
バカとテストと召喚獣 《パラドックス》

ゴードン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣 《パラドックス》

【Nコード】

N7339X

【作者名】

ゴードン

【あらすじ】

歪んでしまった過去のせいで一人になってしまった少年、吉井明久。

彼は色々な人に出会い変わっていく。

ストーリーは、パラドックスはどんな結末を……。

現在清涼祭編です！

【Paradox'0】 自己紹介（前書き）

今回は主人公の明久の人物紹介と召喚獣のネタばれ。

挿絵注意！！

挿絵変更しました。

11/15、少し設定を変更しました。

【Paradox'0】 自己紹介

よしいあきひさ
吉井明久

【詳細】

本作の主人公。性格は原作とはちがい、優しくなくてクールになった。

基本、一人でいることが多かったが雄二や秀吉が絡んでくるようになったため嫌がっている。だが、拒絶しないあたり、本当は嬉しいのかもしれない。

鈍感なのは変わってない。性の知識が増えるためムツツリー二にも好かれた。

中学は両親や姉と海外にいた。身体能力はこの時に強くなりたいたい、努力したのもものすごく高い。

過去（中学時代）に大きな傷があり、絆を失うのが怖いため友達や親友と呼べる存在を作らないでいた。

1年生の時の事件（？）が無かったため、観察処分者ではない。

勉強は高校に入ってから全くしていないが、教科書や参考書を丸暗記しているのでテストは楽勝。

目は右目が義眼で左目もコンタクトが無いと殆ど見えない。その代わり、他の人より聴覚が凄くよかったりもする。

顔も原作と結構違う。

> i 3 6 0 2 1 — 4 2 5 1 <

【2章以降詳細】

雄二や秀吉、ムッツリーニと和解。協力し合う仲になる。

己が信じた悪党として奮闘する。

自分が今まで探して、拒絶していたものを見つけようとしてる。

試験召喚獣

【詳細】

明久の中の負の感情に引き寄せられたバグ。だが他の召喚獣と違い、フィールド外でも召喚でき物理干涉もできる（on/off可能）

他の召喚獣と大きさは同じで、力もあまり変わらない。

装備は紫の炎を纏った妖刀ムラマサに改造学ラン（中に暗器や銃などが仕込んである）

> i 3 3 6 4 5 — 4 2 5 1 <

【腕輪】

400点以上の点数を取ると使える腕輪。全教科400点を超える

のでほとんど使える。

龍神召喚

腕輪の能力。点数を消費して、それに見合う強さの龍を召喚して操る。

【バグ能力】

バグを持つ召喚獣がバグを操って使う能力。

ベクトル操作

言わずと知れたあの人が使う某学園都市の最強の能力。だが、教師には反射と言っている。（そうしないと兵器として使われるかも知れないから）

非常に燃費が悪いが、使えば最強の能力。

【Paradox'0】 自己紹介（後書き）

挿絵は作者が好きなキャラとかがごちゃ混ぜになってこうなった。

原作の面影なんて無かった。

【Prologue'1】

起承転結（前書き）

【Prologue 1】 起承転結

- side ??? -

「ヨシイクン！ ヨシイクン！」

……？ なんだよ……。俺は寝たいんだ……。

「うう……。私のせいだ……」

誰のせい？ 俺のせい？ 誰が……誰が……。

「じゃあね……。吉井君？」

うわああああああああ！！

- side 明久 -

「うわああああッ！」

ガバツと布団を飛ばして俺は起き上がる。

「はあ……。はあ……。なんだ、昔の夢か？」

どうやらつなされていたみたいだ。……あれ？ どんな夢を見た
っけ……？

「まあいいや……、シャワーでも浴びるか」

ああ、俺は吉井明久。ちょっと捻くれた普通の高校生だ。

「そう言えば、今日は振り分け試験の日だったな……」

何でクラスの振り分け試験などを行うのかというと、俺の通う文月学園はテストの点数に上限がない。そして成績順にクラスを分けて勉強に対するモチベーションを上げるためだ。成績順にA〜Fとなっていて、成績が良い順に設備がいろいろだ。

そしてこの学校最大の特徴、試験召喚戦争。これはクラス対クラスで召喚獣を使い戦う戦争のことである。しかし召喚獣の強さは成績に比例するため下位クラスが上位クラスに勝つことは普通はありえない。だから下位クラスの生徒は勝つために勉強、上位クラスは負けないために勉強をさせることが出来るのである。

「まあ、俺ならAクラスにいけるかな」

俺はこれでも去年は学年主席だった。まあ1年の頃は試召戦争がなかったから目立たなかったけど。

「んじゃ、行ってきます」

誰もいない部屋に俺の声だけが響いた。

「おつ、よう明久」

「……………（スタスタスタ）」

「え？　ちょ明久？」

「……………（スタスタスタ）」

「おーい、明久ー？」

「……………（スタスタスタ）」

「おい！　無視すんなよ明久！」

「はあ……………、なんだよ坂本」

さつきから俺を呼ぶゴリラ野郎はバカ代表の坂本雄二。元神童（笑）である。

「なんか凄い勢いでバカにされた気がするんだが……………」

「気のせいだ」

「そうか」

「んじゃ、テスト前の小手調べだ。三権分立は司法と立法ともう1つは何で成り立つか？」

「行政だろ？ 簡単過ぎんぜ」

「おお、正解。流石だな明久」

「今度は俺からだな。浮世絵を確立した人物は？」

「……は？」

「………勉強しろ」

「………わかった」

【Prologue 2】 君子固窮

- side ??? -

ごがつ・じゅうごにち

ぼくはともだちがほしかった。

ぼくはしんゆうがほしかった。

ぼくはなかまがほしかった。

ぼくはこいびとがほしかった。

ぼくはひつようとされたかった。

ただそれだけのことだった。

なのに……。

なのに……………。

ただそれだけだったのに……………。

なんでぼくはまたひとりになっちゃうんだろう。

なんで……………なんで……………——

【I would like to be needed . . .
】

- side 明久 -

「うぐっ……！」

俺は坂本と一緒に学校へ行き、今はテストを受けている真つ最中だ。

だけど今はそれどころではない、俺は過去のことをふと思い出してしまった。

頭痛は痛いし吐き気もする。……思い出したくないのに……忘れたいのに……。

痛い痛い痛い痛いイタイイタイイタイ……――

「吉井。大丈夫か？ 退席するか？」

俺へ声をかけるのは西村先生。みんなは鬼の鉄人などと呼んでるが良い先生だと思う。

「うっ……だ、いじょうぶです……」

はっきり言ってかなりヤバイ……。頭が回らない……。

「……そうか。無理するなよ」

西村先生は心配してくれるけど……。いや……。良いんだ。どうせみんな裏切るから……。誰も頼る必要なんて……。

「くっ！ ……はぁ……はぁ」

ヤバい……。意識……。が……。

ドサツと音をたてて倒れこむ俺。

「……！ 吉井！ おい吉井！」

「……ここは……」

俺はどうやらベットに寝ていたようだ。

「あつ、起きたかしら？」

確かこの人は保険室の先生か……。邪魔になるから早く出ないと……。

そして俺は立ち上がり保健室を出ようとする。テストはどうなったのかな……？

「大丈夫なの？ かなりうなされてたみたいけど」

「はい、ご迷惑おかけしました……。あのテストの方は？」

「もう終わったわよ。それに時間も下校時間過ぎてるし……」

「……そうですか」

これで俺は途中退席扱いになってしまつてFクラスだろう。

「西村先生は学園長に抗議したんだけどね……。学園長はそれを一刀両断してしまつてね……」

「まあ、過ぎたことを気にしても仕方ないです。……さようなら……」

- side ???? -

ろくがつ・にじゅうなにち

そうか……けっきよくみんなうらぎるんだ。

だったら……きずななんていらないよ。

【It is already and disagreeable】

【Paradox'1】 夢幻回路（前書き）

やっと、第一話です。

結構、性格を変えるのって大変です。

【Paradox'1】 夢幻回路

- side ??? -

7月・18日

俺は友達なんていない。

俺は親友なんていない。

俺に仲間なんていない。

俺は恋人なんていない。

だから……僕は一人。

【It refuses.】

- side 明久 -

俺がこの文月学園に入学して2度目の春が訪れた。

俺は振り分け試験で倒れてしまったからクラスは決まったも同然だった。ちなみに俺は家を遅刻出来る時間に出た。

毎日アイツと一緒に登校なんて反吐が出る。

「吉井、遅刻だぞ」

学校の校門で声を掛けられる。

「おはようございます。西村先生」

声を掛けられた方を見ると生活指導の西村先生が立っていた。

「ああ、おはよう。早速だが……ほら、受け取れ」

先生が封筒を取り出し俺に差し出す。

「もうクラスは分かってますから良いのに……」

「まあこれがうちのやり方だな。……それと、すまなかったな吉井。俺がしっかりしていれば……」

「いえ、気にしてないですよ。俺が体調管理をしっかりとしなかったのが悪いんですし……」

「……そうか」

先生がバツが悪そうに言う。

「じゃあ、俺は行きますね」

ビリビリと紙を破り捨てる。

『吉井明久……Fクラス』

「ここがFクラスか……」

俺は二年Fクラスと書かれたプレートの前に立っていた。

「まあ気にしてもしょうがないか……」

慣れ慣れしいバカがいなければいいや。

「すいません遅れました」

「おつ、来たか明久」

何で……？ 何でいるの……？

「何でお前がいるんだよ坂本……」

「何でって、そりゃあ俺がこのクラスの代表だからな」

はぁ……、よりもよってこいつが代表かよ。変なこと考えるな
よ……。

「これでこのクラスの全員が俺の兵隊だな」

「で、坂本。席はどこだ？」

「基本は自由席だ」

「うわっ、ほんと適当だな……」。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

背後から声をかけられる。高校生には見えないので担任の先生だろう。

「それと席についてもらえますか？　HRを始めますので」

「はい、わかりました」

「うーっす」

そして俺たちはそこの席に着いた。……何で近くに座るんだよ。

「えー、おはようございます。二年Fクラス担任の……、福原慎です。よろしく願いします」

チョークすらないのかこのクラスは……。

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されてますか？　不備があれば申し出てください」

そしてみんなから不備の申し出が出るが、すべてを軽く受け流す。……慣れてるんだろうか？

「必要なものは極力自分で調達するようにしてください」

本当に適当だな……このクラス。

「では自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願いします」

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

ああ、こいつもFクラスか。

木下秀吉。女に見えるほどの女子顔でよく坂本と一緒に俺に関わってくる。

「——と、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

ほんと女に見間違うな。クラスの男子、鼻の下が伸びてるぞ……。

「……………土屋康太」

次は土屋か。あんまりつるんで来ないのは嬉しいけど、写真を撮ってくるのが鬱陶しい。

「——です。ドイツ育ちで日本語は苦手です。趣味は——」

げっ、この声は……。

「趣味は吉井明久を殴ることです」

ほんと、迷惑なやつだな……。

「はろはろー」

「……………ちっ」

コイツは島田美波。俺はこいつが嫌いだ。

「——です。よろしく」

俺の前の奴が終わったか。

「吉井明久だ。好きなものはない。嫌いなものは人間（特に島田、坂本だ）だ。よろしく」

「人間が嫌いな人間なんて聞いたことがないぞ」

「うるさい。死ね坂本」

何でコイツは俺にかわるんだよ……クソったれが……。

「あの、遅れて、すいません……」

『え？』

「はあ？」

何でだ？ 何でこいつがFクラス何かにいる……。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さん
もお願いします」

「は、はい！ あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします
……」

……何でお前がいるんだ……姫路瑞希！

【You are disagreeable.】

【Paradox'1】 夢幻回路（後書き）

明久は姫路さんを嫌っています。

理由は聖者と悪党は対場が逆だからでしょう。

【Paradox 2】異口同音（前書き）

学校のテストの時期が終わりました！！
もっと早く更新出来るように頑張ります。

【Paradox 2】 異口同音

- side 明久 -

「はいつ！ 質問です！」

「あ、は、はいつ。なんですか？」

「なんでここにいらっしゃるんですか？」

いきなり質問をされる姫路。こいつの学力は学年トップクラスのはずだぞ……。何でこんなところにいるんだよ……。

「そ、その……」

そういえば確かこいつは頭はいいけど体が弱いんだっとな。

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

「なるほど、明久と同じ理由か」

「チッ……。なんでこうなんだよ……」

この学校では試験を途中退席した場合、試験は0点扱いになってしまうのである。これで俺や姫路はFクラスになってしまおうというわけである。

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？ アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

……本当にバカだらけだ……。

「で、ではっ、一年間よろしく願いしますっ！」

そんな中、逃げるように僕と雄二の隣の空いている卓袱台に座る
姫路。

席変えようかな……。そして俺が席を変えようとしてると坂本の
声が聞こえてきた。

「姫路」

「は、はいっ。何ですか？ えーっと……」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「あ、姫路です。よろしくお願いします」

……どうでもいいや……。

俺はその辺の奴を蹴り飛ばし、席を譲ってもらっ。

「おい、黙って俺たちから距離を取ろうとするな明久」

「よ、吉井君!？」

「……何だよ……？」

「あ、いえ……」

ま、お前は俺みたいなやつが嫌いだろうしな。

「んで明久、少し話があるんだが」

「あ?」

こいつが俺に話したいこと……?

「はいはい。その人たち、静かにしてくださいね」

「あ、すんませ——」

坂本が謝ろうとして……。

バキィッ バラバラバラ……

突如、先生の教卓がゴミ屑と化す。おそらくパンパンと叩いたからだろう。

「えゝ……替えを用意してきます。少し待っていてください」

気まずそうに告げて、先生は教室を出ていく。

「……坂本、話って何だよ？」

「ああ、ここじゃ話しにくいから廊下でいいか」

「……？ ああ」

立ち上がって俺たちは廊下に出る。

「んで、何だよ話って？」

「お前、Fクラスをどう思う？」

「ウゼー奴らが多くて嫌いだ」

「いや、そうじゃなくて。設備が酷いだろ」

「ああ、確かに……、って俺に協力しろってか？」

「そんな所だ。お前はあの設備でいいのか？」

「ああ」

クラスのメンバーがもうすでにアレだし、設備なんてどうでもいい。

「はあ、相変わらずだな。ま、協力しなくなったら言ってくれ」

「絶対ないと思うが……。一応聞いておくがどこに仕掛けるんだ？」

「Aクラスだ。世の中、学力がすべてじゃないって証明したくてな。それに秘策もある」

「なるほど……——あ、先生が戻ってきたし教室に戻るか」

「おう」

俺たちは教室に戻る。

「えー、須川亮です。趣味は——」

先生が教卓を替えて、自己紹介を再開。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

特に何もなく最後の一人の坂本に順番が回る。

「坂本君はクラス代表でしたよね？」

福原先生に言われてうなづく雄二。

「Fクラスの代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ」

「さて、皆に一つ聞きたい」

カビ臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

「ほんとに酷い設備だな」

「ああ。そしてAクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが——」

「——不満はないか？」

『『『『『大ありじゃあつ！！』』』』』

二年Fクラスの魂の叫び。

「だろう？ 俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そつだそつだ！』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！ 改善を要求する！』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？ あんまり差が大きすぎる！』

「皆の意見はもつともだ。そこで」

皆の反応に満足したのか、自信に満ちた不敵な笑みを浮かべて、

「これは代表としての提案だが――」

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

【Now, I will begin war.】

【Paradox 2】 異口同音（後書き）

ゴードン「どうも初めまして!! 作者のゴードンです!!」

明久「あれ、何しに来たんだ作者？」

ゴードン「おつ、よう明久。いやさ、後書きで書くことがないから
さ雑談とかキャラの設定とかを書いたりしようと思うんだ」

明久「てか、こういうの見たことがあるぞ」

ゴードン「ああ、あしゅきさんをリスペクトさせてもらった」

明久「ようするにパクったというわけか」

ゴードン「パクったちゃうよ。リスペクトでござるよ」

明久「喋り方おかしくなってるぞ……はあ、このバカ作者の作品を
これからよろしくな」

ゴードン「台詞取られた!!」

【Paradox 3】 月下推敲

【as expected】

- side 明久 -

Aクラスへの宣戦布告。

普通に考えればFクラス何かでは無理な提案だ。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備が落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらない』

学力の差で勝負が決まる試験召喚戦争ではAクラスとFクラスの力の差は明らかだった。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

だがそんな戦力差を知っていてもなお、坂本はそう宣言した。

『何を馬鹿なことを』

『できるわけがないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

その通り何だよ……。いくら坂本が知恵が働くからと言ってそれだけでAクラスは越えねえ。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争に勝つことのできる要素が揃っている」

根拠ねえ……。確かにこいつらならやれる気がするな……。

「それを今から証明してやる」

不敵な笑みを浮かべ、壇上から皆を見下ろす坂本。

……？ 何であの野郎は顔を畳に擦りつけてんだ？

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

成程。土屋は姫路のスカートを覗くために……。

……そこまで恥も外聞も殴り捨ててまでやる必要はあるのか？

「土屋康太。こいつがあ有名な、ムツリーニ寡黙なる性識者だ」

「……………！！（ブンブン）」

ムツリーニねえ……。ただの変態のくせに何で有名なんだよ……。

『ムツツリー二だと……?』

『馬鹿な、ヤツがそうだというのか……?』

『だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとして
いるぞ……』

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……』

「???」

姫路はムツツリー二こと土屋のことを知らないのか。

まあ、女子には縁のない話だしな。

「姫路のことは説明するまでもないだろう。皆だってその力はよく
知っているはずだ」

「えっ? えあ、私ですか?」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

……確かにこいつは戦争では駒としては役に立つな。

『そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだった』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『ああ。彼女さえいれば何もいらなないな』

「木下秀吉だっている」

……木下秀吉。よく坂本みたいに絡んでくる。鬱陶しいことこの上ない……。

ちなみに演劇部のホープとか双子の姉のことで有名。

『おお……！』

『ああ。アイツ確か、木下優子の……』

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学校の頃は神童とか呼ばれてなかったか？』

『それじゃあ実力はAクラスレベルが二人もいるってことだよな！』

……いや、確かに二人は頭がいい。だがそのレベルの奴は挑むAクラスにはゴロゴロいるぞ。

だが士気を上げるのは成功したようだな。

「それに、吉井明久だっている」

「……………は？」

……………シン——

そして一気に下がる。俺は参加する気はないんだぞ!!

「おい坂本！ 何で俺の名前を出すんだ！ 俺は参加する気はないと言っただろ！」

「士気を上げるためだ。すこし黙ってろ」

『誰だよ、吉井明久って』

『いや、確かそいつって……』

『去年の学年主席、吉井明久!!』

『『何だとツ!!!!』』』

「そうだ、そいつは去年の学年主席。まぎれもない天才だ！」

『Aクラスでも倒せないような奴がいるなら!!』

『ああ！ 勝てるんじゃないか!!』

はあ、これじゃあ俺が参加することになるじゃないか……。

「なんとかしてくれ坂本……」

「ああ。こいつは戦争に参加する気はないらしい」

『『何イ——ツ!!!!』』』

「ま、俺を引きずりだしてみろってことだ。……さあ、始めようぜ。坂本」

「ああ。まずは俺たちの力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」

Dクラスか……。こいつのことだから色々考えてるんだろうな。

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『『『当然だ！！』『』』

「ならば全員筆を執れ！ 出陣の準備だ！」

『『『おおーっ！！』『』』

「俺たちに必要なのは卓袱台ではない！ Aクラスのシステムデスクだ！」

『『『うおおーっ！！』『』』

「死者は須川にやってもらう！ 無事大役を果たせ！」

「今、字が違ったしそれに、下位勢力の使者って酷い目に遭うよな？」

「……使者を果たせば、女子が振り向いてくれるかもしれないぞ（ボソッ）」

「すぐに行ってくる！！」

……さよなら、顔も知らぬ須川……。

その後、帰ってきた死体はお亡くなりになった……。

【Paradox 4】 精神一到

- side 明久 -

「さて、宣戦布告もしたことだしミーティングでもするか。明久も来るんだぞ」

そう言つて坂本は須川^{死体}を引きずつて教室を出ていく。

……何かがおかしい気がするのは俺だけだろうか。何で皆ツッコまないんだ……？

坂本の後に皆が続く。俺はどうしようか……。

「どうでもいいか、俺はその辺をブラブラしよう……」

「明久。お主も来るんじゃないぞ」

「……はあ……」

釘を刺しやがって……。これじゃあほんとに引けないぞ。

「しょうがねえな……」

「……………（サスサス）」

自分の頬の辺りをさすり、土屋も続く。

「おい土屋。畳の跡なら消えてるぞ……」

「……………！！（ブンブン）」

「いや、お前が変態なのは知ってるから」

「……………！！（ブンブン）」

「ここまでやってるのに否定なんて、ある意味凄いぞ」

「……………！！（ブンブン）」

「……………何色だった？」

「みずいろ」

即答かよ。

「やっぱりお前は真の変態だな」

「……………！！（ブンブン）」

こいつは色々な意味で凄いな……………。

「ほら吉井。アンタも来るの」

ぐいっと島田に腕を引っ張られる。

はあ、適当に逃げるチャンスを窺ってたのに……………。

「チッ、離せよ。……………仕方ねえなあ」

「相変わらずねアンタは」

「お前もな……」

「……一度、D a s B r e c h e n——ええと、日本語だと……」

「……調教か……。せめて教育とか指導にしろ……」

「じゃ、中間とってZ? c h t i g u n g——」

「折檻は悪化してるだろ……」

「そう?」

何でろくに漢字も読めねえのに、こんな余計な単語を知ってるんだ……。

俺たちは屋上にいた。

「須川。宣戦布告はしてきたな?」

「今日の午後に開戦予定と伝えてきたぞ」

それぞれが各々腰を下ろす。

「それじゃあ、先に飯ってことか」

「そうなるな。明久、あとで一緒に食おうぜ」

「「ええ!？」」

姫路と島田が各々声を上げる。何だ、そんなに坂本と食いたいの
か？

「断る。なんでお前と何かと……」

「まあそう言うな、女子二人がお前と食いたがってるぞ」

「「え!？」」

突然おかしなことを言う坂本。

「はあ？ 何言っちゃってんですかあ？ こいつらは俺のこと嫌っ
てるだろ？」

「いや、絶対にそれはないと思うが…… まあいい。とりあえず今は
試召戦争の話だ。…… お前らも大変だな（ぼそっ）」

坂本が話を戻す。後、何故か姫路と島田が落ち込んでる。

「雄二。一つ気になってたんじやが、どうしてDクラスなんじや
？ 階段を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならA
クラスじゃろう？」

「そついえば、確かにそうだな」

「まあな。当然考えがあつてのことだ」

木下と須川の疑問に坂本がうなずく。

「どんな考えですか？」

「色々と理由があるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

「え？ でも、俺らよりはクラスが上だぞ？」

須川の言うことはごもつともだ。試験が終了したばかりなのだから、総合点には絶対的な差がある。

……今はな。

「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かったかもしれない。けど、実際のところは違う。須川、お前の周りにいるメンツをよく見てみる」

「えーつと……」

坂本に言われた通り、須川は周りを見渡す。

「美少女三人と馬鹿一人、ムツツリ一人に天才が一人だな」

「誰が美少女だと！？」

「ええっ！？ 代表が美少女に反応するのか！？」

「……………（ポツ）」

「土屋まで！？ 俺だけじゃツツコミきれない！？」

坂本と土屋が悪ノリで須川を圧倒。…………いや、あれは素かもしれ
ない。

「まあまあ。落ち着くのじゃ、代表にムツツリーニ。明久、おぬし
も何とかしてくれ」

木下…………お前は女扱いされてることにきずけ…………。

「ん、そうだな。…………ツツコミって結構響きがエロいよな」

「おぬしはいきなり何を言うのじゃ！！ しっかりするのじゃムツ
ツリーニ！！」

ふと足元を見ると土屋が鼻血を吹いて倒れていた。

…………おい…………、まさか今の言葉だけでイメージして倒れたのか……
…。

「ま、要するにだ」

おい、お前の足元に死体が転がってることに気づけ。

「姫路や明久に問題がない今、正面からやってもEクラスには勝て
る。Aクラスが目的である以上はEクラスなんかと戦っても意味が

ないってことだ」

「まあ、確かにDクラスは確実に勝てるとは言えないしな。モチベーションを上げるにはもってこいの相手だな」

「流石だな明久。この戦争の真の意図にも気づいたか」

「ま、打倒Aクラスを望むのなら、Dクラス戦には俺は出る必要がないと気づいて嬉しいだけだ」

Aクラスに勝つ作戦は知らんがな……。

「あ、あの！」

そこで姫路が声を上げる。

「ん？ どうした姫路」

「えっと、その。吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話しかけてたんですか？」

「ああ、戦争に勝つには必須な点数が高く、召喚獣の操作がうまい人間……、つまり明久に俺から相談したんだ」

そう、俺は他の奴らよりずば抜けて召喚獣の操作がうまい。何故かは知らんが、俺の召喚獣はシステムのバグの副産物のようなものである。

召喚フィールド外でも召喚出来るし、さらに物理干涉もフィールド内で行える。さらに腕輪とは別にバグの能力もある。使った

ら大変なことになったけどな。

「まっ、俺が戦争に出るかはお前らしだいだな」

「ん？ どういうことだ？」

「さっき言っただろ。俺を引きずりだしてみろよ」

「へっ、上等！」

「だが坂本。さっきの話はDクラスに勝たないと意味がないぞ」

須川の心配を笑い飛ばす坂本。

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる」

そう断言する坂本。

「いいか、お前ら。ウチのクラスは——最強だ」

ほう、まあ頑張ってみれば。

「いいわね。面白そうじゃない！」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「……………（グッ）」

「が、頑張りますっ」

「俺たちならいける！」

「ま、俺は最初は見物といくか」

こいつらの後押しくらいなら悪くねえかな？　なあ？

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

【It can win, if it is us.】

【Paradox / 4】 精神一到（後書き）

ゴードン「明久。お前死ねよ」

明久「はあ！？ いきなりなんだ！」

ゴードン「リア充はしね、リア充は氏ね、リア充は死ね」

明久「なんか怨念唱えだした！！ どうしたんだよ？」

ゴードン「はあ、このお方はこっちでは性格変わってるはずなのに
鈍感のままですわね」

明久「はあ？ 鈍感？ これでも運動は得意だぞ。そういえば俺の
性格と言えば、コロコロ変わりすぎじゃねえ？」

ゴードン「はあ、君は熱しやすく、冷めやすい性格なのだよ」

明久「……本当は？」

ゴードン「僕の文才の低さです。はい」

明久「……すまん」

ゴードン「ゴメン」

【Paradox 5】 不撓不屈

- side 明久 -

「坂本、今の戦況はどうだ？」

「Dクラスの連中と渡り廊下で交戦中だ。状況は良くないな……」

俺と坂本は今は教室にいる。

俺は振り分け試験を途中退席して点数がなかったため、回復試験を受けた。

「それにしても、やっぱりお前すげえな。一教科10分で全教科150点並みとか」

「当たり前だ。ま、腕輪がないから今回は出ないけど一応な」

「とりあえず、中堅部隊の奴らに戦線を維持させて、前線部隊を下げて回復試験を受けさせる」

……確か中堅部隊は須川と島田だったな。

「あいつらなら、補習への恐怖で逃げ出しそうだが……」

「確かにそうだな……よし、横田」

そこで坂本が横田に指示を出す。

「なんて伝えるんだ？」

「ああ、『逃げたらクロス』ってな」

「なるほど」

それはじつに効果的だ。

『全員突撃しろぉーっ！』

「これでとりあえず前線は維持できるな」

「ああ」

- s i d e 須川 -

くっ、やはりDクラスと言っても強い！

「須川！ 五十嵐先生と布施先生よ！ Dクラスの奴ら、化学教師を引っ張ってきたわね！」

立会人を増やして一気に片をつけにきたか！

「島田、化学に自身は？」

「全くなし。60点台常連よ」

「よし、それなら、化学教師に近づかないよう注意しながら学年主任の所に行くぞ」

「高橋先生のところね？ 了解！」

「あつ、そこにいるのはもしや、Fクラス的美波お姉さま！ 五十嵐先生、こっちに来てください！」

「くっ！ ぬかったわ！」

Dクラスの一人に島田が見つかった。マズい。こっちも召喚獣で応戦しないと、二人揃って一撃で補習室送りだ。

「よし。島田、ここは俺が足止めするから先に離れろ！」

「ゴメン須川！」

「邪魔者は殺します！ 試獣^{サモン}召喚っ！」

「試獣召喚っ！」

こっちにもFFF団会長のプライドがある！

『Fクラス	須川亮	V S	Dクラス	清水美春
化学	76点	V S	94点	』

くそっ！ 点数はこっちが負けてる上に、操作がむずい……。

「さあ死になさい豚野郎！！」

「ひどいっ！」

このままじゃ補習室送りだ。

「――試獣召喚っ！」

『Fクラス	島田美波	V S	Dクラス	清水美春
化学	53点	V S	41点	』

そこで島田の召喚獣が清水の召喚獣を切り裂く。助かった、正直ヤバかったしな。

「ありがとう島田」

「いやいやお互いさまよ。あいつを補習室に送れるしね。西村先生、早くこの危険人物を補習室にお願いします！」

「おお、清水か。たつぷり勉強漬けにしてやるぞ。こっちに来い」

これで召喚獣が戦死した清水は補習室に連行だ。

「お、お姉さま！ 美春は認めませんから！ このまま無事に卒業できるなんて思わないで下さいね！」

とても危険な捨て台詞を残し、清水は去って行った。

「島田、とりあえず俺はテストを受けてくる。それまで戦線を頼むぞ」

「了解！」

- side 明久 -

「おい坂本。戦線は維持できたようだしき、本隊動かしたら？（バリバリ）」

「うーん、もう少し様子を見たい。……って何で菓子を食ってる？」

「ああ、暇だからな。家から持ってきた」

ほんと今日は何もすることねえしな。

「それ1枚くれ」

「あいよ」

【ピンポンパンポーン《連絡致します》】

そんな事をやってると放送が入った。この声は須川？

「何で放送が？」

「大かた先生を騙すんだろ」

なるほど、そうすれば少しは戦線を維持しやすいかな。

【《船越先生、船越先生》】

船越ってたしか数学の……。

【《坂本雄二君が体育館裏で待っています》】

……あれ？ 須川？

【《生徒と先生の垣根を越えた、男女の大事な話があるそうです》】

「お……おい、坂本？」

ふと隣を見ると坂本がプルプルと震えていた。

「代表……アンタあ男だよ！」

「ああ。まさかクラスのためにここまでやってくれるなんて！」

「……す」

「す？」

「須川あああああつっ！」

そして坂本は放送室へ向かった。

【Keep protecting yourself!!】

【Paradox 5】 不撓不屈（後書き）

ゴードン「いやあ、今回空気だったね」

明久「全くだ。主人公誰？　って感じたぞ……」

ゴードン「あ。でも次話も空気だぞ」

明久「またかああああ！！」

【Paradox 6】 悶絶境地

- side 明久 -

放送室から悲鳴が聞こえた後、坂本は本隊を連れて戦線に向かった。

俺は教室にお留守番である。

坂本の戦争にかける思いは人一倍だ。昔は神童などと言われていたが、今は勉強がすべてではないと証明するために頑張ってる。

「……アイツと俺は似てるんだよな……」

そう、アイツと俺は似ている。俺は目的を見失い、一人になってしまった。けどあいつの周りにはたくさんの人たちがいる。代表として尊敬されてる。

「……だから嫌いなんだよ……」

これはただの同族嫌悪だ。似てるのに全然違うあいつが俺はうらやましいだけだ。

ほんと……どうすればいいんだよ……。

「ふう。島田、よくやった」

それから少しして皆が教室に戻ってきた。

「ええ。後さっきの放送は何なの？」

「須川の野郎が流したデマだ。……後5回コロス……」

とても恐ろしい単語が聞こえた。……俺はこいつのどこが羨ましいんだろっ？

「さて、そろそろ決着をつけるか」

「そうじゃな。ちらほらと下校してる生徒も見え始めたし、頃合いじゃろっ」

「……………（コクコク）」

「よっしゃ！ Dクラス代表の首級を獲りに行くぞ！」

『『『おうつ！』『』』

教室から皆が出ていく。俺は帰る準備をしておくか。

その後、姫路のテストが終了してDクラス代表にとどめを刺したらしい。

試験召喚戦争終了後。俺が帰ろうとしてると坂本と帰ることになった。

「それにしても何で設備を交換しなかったんだ？」

あの後、何故か和平交渉で戦争を終結したらしい。実は気になってたから聞いてみる。

「何だ、気づいてなかったか。実は取引をしたんだ」

「取引？ 何のだ？」

「Bクラスの室外機を壊してもらっ」

Bクラスの室外機？ 確かスペースの関係でDクラスに間借りしてるやつか。

「何でそんなものを？」

「次のBクラス戦で必要になるからだ」

次はBクラスか……なら。

「次は俺も暴れていいか」

「ん？ 何でだ？ お前出たくないんじゃない……なるほど」

「ああ、Bクラスの代表はあの三下だからな。叩き潰したい」

「わかった。だが参加は途中からだ。いきなり警戒させたくないか

「らな」

「だが、遠距離からの攻撃ならいいだろ？ 見えない敵にじわじわ倒されていくなんて最高じゃねえか」

俺の召喚獣は何故か大量の武器を持ってたしな。銃あたりで倒す。

「それならいいぞ。見えない敵に気をそらせて、冷静さを失わせろ」

「OK。次回もがんばろうぜ」

「ああ。もちろんだ」

そうして俺たちはそれぞれの帰路に行く。

【You should do what .】

【Paradox 6】 悶絶薨地（後書き）

ゴードン「次回でやっと明久の召喚獣が出せるな」

明久「ああ。今回の戦争では俺は空気だったしな。俺が主人公だ！
」

ゴードン「次回もよろしく！」

【Paradox 7】 猛虎伏草

- side 明久 -

Dクラスとの試召戦争の翌日、俺はいつも通り学校に向かう。

今日は皆が消費した点数を補給するためにテスト漬けのはずだ。
頑張りますかね。

そして俺はいつもと同じように静かに席に着く。

「おう明久。時間ギリギリだな」

こいつはバカの坂本。バカの大將でバカである。

「なんかものすごい勢いでバカにされた気がするんだが……」

「はっ、気のせいだよ」

「そうか」

そして無駄に鋭い。

「そついえば坂本。お前はいいのか？」

「ん？ 何がだ？」

まさか……気付いてないのか？

「昨日の後始末だよ」

「ああ、須川のことか。大丈夫だぞ。死体は処分した」

「いや、死体の始末じゃなくて」

貞操の危機なのに、本当に気付いてないのか？

「今日の数学の監督、船越先生だぞ」

そう言った瞬間、坂本は教室を飛び出し廊下を疾走した。

「はあー………なんとか貞操は守り抜いたぞ………」

坂本がそう言って机に突っ伏す。

とりあえず四教科が終了。

坂本は近所のお兄さん（三十九歳／独身）を紹介して船越先生の魔の手から逃げ切ったらしい。

「はあ、なんとか腕輪は取れるかな」

今回は全教科いい感じにペンが進んだし。

「さすがじゃのう」

「……………保健体育なら負けない」

そこに木下と土屋がやってくる。

木下は髪をポニーテールにしてる。……そんなだから女子に間違えられるんじゃない？

「よし、昼食食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

「お前の体はどういう構造をしてるんだ……。俺は弁当だから屋上で食う」

俺は一人で食いたい。

「じゃあ俺たちも屋上に行くか」

「おい」

なんで来るんだよ。

「一人じゃ寂しいじゃろう？」

「友達と一緒に飯を食うもんだぞ」

「……………久しぶりに語り合いたい」

「坂本。なんで俺がお前の友達になってるんだ。それと土屋、食事中にエロはやめろ」

「……………！（ブンブン）」

はぁ、どうせついて来るんだろ……。

「わかったよ……。屋上に行こう」

「おお」

「あ、みんな屋上に行くの？　だったら一緒にいい？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ」

「それじゃ、混ぜてもらうわね吉井？」

「……………チッ」

なんでこうなったし……。

「あ、あの。皆さん……………」

立ち上がって屋上に行こうとしたら声をかけられた。

「うん？　あ、姫路。一緒に行くか？」

坂本が声をかける。

「あ、いえ。え、えっと……、お、お昼なんですけど、皆さんの分を……………」

は？ …… ちょっと待って……。

「もしかして俺たちの分も作ってきてくれたのか？」

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

はあああっ！？

「迷惑なんかじゃないよな。 明久」

「……………（ダラダラ）」

「おい明久？」

「お、俺はやっぱり食堂で食べるよ……………」

「いきなりどうしたんだ？」

やばい…………… 小学校の時のトラウマがッ……………。

「……………（ボタン）」

「おい明久？ 明久ああッ！？」

そこで俺の意識は途絶えた。

「あなた、また倒れたのね」

「……………すいません」

今、俺は保健室にいる。小学校の修学旅行の記憶を思い出して倒れたっぽい。……………あれは恐ろしかった……………。

「あなたのクラスの子もさっき運ばれて来たわよ」

「あいつら……………あれを食ったのか……………」

安らかに眠れ……………。

さて、教室に戻ろうかな。

—————

「そういえば坂本、次の目標だけど」

「ん？ 試召戦争のか？」

「うん」

俺は保健室で飯を食った後、復活した坂本たちに弁当の悲劇について詳しく話した。皆、顔が青ざめていた。

……………とりあえず姫路には島田が料理を教えることに。

その後教室で会議をすることになった。

「相手はBクラスなの？」

「ああ。そうだ」

それにしてもBクラスのエアコン室外機を何に使うんだ？ Aクラスに攻めるのには関係ないしな……。

「どうしてBクラスなの？ 目標はAクラスなんでしょう？」

俺たちの目標はAクラスだ。Bクラスと戦うのにはどんな意味が？

「正直に言おう。どんな戦力でもAクラスには勝てやしない」

「でも明久は主席以上の学力の持ち主じゃし、姫路は元学年次席じゃぞ？」

「確かに二人は強い。だが二人だけでAクラス全員の相手なんて無理があるだろう？」

確かに……俺は50人の相手が出来ないこともないが、能力の燃費が悪いし途中で戦死するだろう。

「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」

「いいや、Aクラスをやる」

じゃあBクラスとやるのは……なるほど！

「すなわち坂本はBクラスを使ってAクラスとの一騎打ちに持ち込むつもりか」

「ああ。その通りだ明久。戦争のルールを使ってBクラスと交渉する」

「交渉、ですか？」

「Bクラスに勝ったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスに攻め込むように交渉すればいい」

「勝ったら設備を入れ替えることのできるルールを利用するわけじゃない」

「これならFクラスの設備を免れ、Cクラス程度の設備で済むだろうしな」

「そういうことだ。それをネタに『Bクラス戦の勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな」

モチベーションの差を利用するわけだな。

「一騎打ちは明久なら勝てるじやろうしな」

「いや、明久を一騎打ちに出すと相手はまだ勝ち目のある連戦を選ぶだろう」

「じゃあどうするの？」

「そのへんに関しては考えがある。心配するな」

そして坂本はニヤリと笑った。

「というわけで須川。宣戦布告に行つて来い」

「断る。俺はもうあんな目に遭いたくない」

また須川を犠牲にするつもりか。

「やれやれ。それならジャンケンで決めないか」

まあそれなら須川にも退路があるな。

「いいだろう」

「よし。負けた方が行く、で良いな？」

須川がコクリとうなずいて返す。

「ただのジャンケンでもつまらないし、心理戦ありでいい」

そんな坂本の提案。これだと裏をかいたりするのが得意の坂本の方が有利じゃ？

「わかった。それなら俺はグーを出すよ」

「そうか。それなら俺は——」

さて、坂本はどうやって須川を誘導するんだろう。

「お前がグーを出さなかったらブチ殺す」

は？ 何だその心理戦！？

「行くぞ、ジャンケン」

「わああっ！」

パー（坂本） グー（須川）

「決まりだ。行って来い」

「絶対に嫌だ！」

「まさかお前、Dクラスの時みたいに殴られるのを心配してるのか？」

「それもある！」

須川が断言する。……確かに殴るのは楽しいけど殴られるのは嫌だ。

「それなら今度こそ大丈夫だ。なぜなら…… Bクラスには美少年好きが多いらしい」

「行ってくる！」

ダツと須川がBクラスへ向かう。……自分を美少年だと思ってるのかアイツ……。

「……言い訳を聞こうか」

テスト終了後の放課後。

須川はBクラスに向かった後、ボロボロになって戻ってきた。

「予想通りだ」

「殺す……殺す……」

「落ち着け」

「ぐふあっ!」

坂本が須川の鳩尾に拳を打ち込む。……容赦ねえな……。

「先に帰ってるぞ。明日もテストなんだから、あんまり寝てるんじゃないぞ」

爽やかに言い残して教室を出ていく坂本。

俺が言えたことじゃないが、かなりの外道だな……。

ん？ 姫路はまだ教室に残ってるんだな。かなり挙動が不審だな。何かあったのか？

……まあ俺には関係ないか。帰ろ。

【Paradox 7】 猛虎伏草（後書き）

ゴードン「ついに次話では明久の召喚獣が登場!？」

明久「やつとかよ。待ち侘びたぜ!」

ゴードン「それにしても姫路の飯のこと知ってたんだな」

明久「ああ。小学校のころは一応友達だったからな……」

ゴードン「次回もよろしく!」

【Paradox'8】 安宅正路

- side 明久 -

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

今日も午前中はテストで、ついさっき全科目のテストが終了したところだ。今回は真面目に受けたので点数はざっと学年主席レベルだ。

……まあ実はもつと取れるんだけどな……。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は十分か？」

『『『おおーっ！』『』』』

一向に下がらないモチベーション。この気力を勉強に注げば、上位クラスにも入れたんじゃないか？

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

『『『おおーっ！』『』』』

「そこで、前線部隊は姫路瑞希に指揮を取ってもらおう。野郎共、きっちり死んでこい！」

「が、頑張ります」

……姫路の奴、若干引いてるな……。まあこのノリはキツイしな。

『『『うおおーっ！』『』』

ま、これだけの戦力を注ぎ込めば何とかなるだろ。俺も暗躍するしな。

【キーンコーンカーンコーン】

昼休み終了のベルが鳴り響く。これからBクラス戦開始だ。

「よし、行ってこい！ 目指すはシステムデスクだ！」

『『『サー、イエッサー！』『』』

皆が一斉にBクラスに向かう。

「……土屋。居るか？」

「……………ここに」

静かになった教室でエロ本をチラつかせそう呟くと背後に土屋がやってくる。

「交渉だ。これをやるから廊下の窓をすべて開けてくれ」

「……………良い品だ。了解」

よし、これで何とかなるな。

「坂本。俺は校庭に行くぞ」

「は？ 何で……ああ、そういうことか」

「じゃ、行ってくる」

そう言っただ俺は教室の窓から飛び下りて着地。こついつときこの無駄な身体能力も役に立つな。

……あと坂本がなんか騒いでたが無視だ無視。

俺は校舎から30mくらい離れた木の上にいる。よし、ここなら目立たないかな。

「久しぶりに頼むぜ。試獣^{サモン}召喚」

『Fクラス 吉井明久』

『古典 672点』

俺の足元に他の奴らとは少し違う複雑な魔方陣が現れその中から俺をデフォルメしたような生き物が出てくる。俺の召喚獣はフィードルだがいらないんだよな。ちなみに教科はランダムだ。

そうするといきなり俺に抱きついてくる。そういえば久々に召喚したな。

「感動の再開は後だ。今はあれを頼む」

それを理解したようで甘える目つきから攻撃的な目になる。

「換装。バルカン・ショットガン」

俺がそう言うのと俺の召喚獣が学ランから武器を取り出す。

……その学ランどうなってんだ。この前なんかふざけてトンファ
ーって言ったらホントに出てきてビックリしたしよオ……。

「よし、さすが土屋だ。いい仕事するぜ……」

まだ五分ぐらいしか経ってないのに廊下側のすべての窓が開いて
る。……窓に血痕が付いてるのは見なかったことにしよう……。

「ンじゃ、後は頼むぜエ」

俺がそう言うのと召喚獣はコクリと頷く。そして武器を構えて『ド
ドドッ！』と銃を放つ。

おーおー。Bクラスの連中驚いてるぜ。見えない敵って怖いモン
な！。必死に謎の襲撃者を探してやんのwww

お、あれは姫路の召喚獣の腕輪か。あ、銃弾に引火して爆発した
(笑)

「とりあえず、これで警戒意識をこっちに向けさせるのは成功だな
ア。襲撃やめてくれ」

俺の召喚獣はピタリと攻撃をやめる。良い子なんだよなア。本当に俺の召喚獣か？

後、こいつを出すと口調がおかしくなるのはなんで？

「さて、Bクラスの代表はあの三下だ。一旦教室に戻ろう」

俺は召喚獣を一旦消し（めっちゃ悲しそうな顔してた）、木をつたって校舎に侵入。教室に向かう。

って、誰もいないか。……とりあえず待機しとくか。

俺が教卓の後ろに隠れていると何人かが教室に入ってくる。Fクラスの奴らじゃねえな。

『おい！ さっさとやるぞ！』

『ああ！』

「何やってるのかなあ？」

『『『！！！』』』』

おーおー、みんな見事なモブ顔だね。

『お前Aクラスの吉井!!』

『クソ！ 見られたからにはおとなしく——』

「するのはお前らだぜ！」

そう言っただけ俺はモブを殴り飛ばす。そしてそいつの体がロッカーにめり込む。あれー、力加減間違えたか？

『なっ、何すんだテメエ!?!』

その死体の仲間らしき奴が声を上げる。腰が震えてんぜ

「え？ お前らが変な行動取ってたから正当防衛だろ。というわけで寝てろ」

『グハッ!』

手刀を入れるとバタツとそいつが倒れこむ。残りの一人、腰抜けてるwww

「さて、最後はお前なわけだが？ 何か言うことはあるか？」

最後のモブは死刑前の死刑囚のようだったwww

『た…たのむ、許してくれ……』

「はっ、卑怯な真似して最後は命乞いか？ 悪党の真似ごとは笑えねエぜ。……で、誰の差し金だ？」

『……代表の…根本だ……。も、もう…良いだろ…』

俺は悪党は嫌いじゃねえ……だが三流には興味ねえんだ。

「ああ、最後に教えてやる」

『……？　グガッ！？』

蹴りを入れるとグツタリとそいつも気を失う。

「これが真の悪党だ。お前ら三流とはちがうんだよ」

――

「戻ってきたぞい……って！　何じゃこの有様は！」

今の教室は死体が三体転がってる。確かに酷い有様だ。

「お、お帰り木下。拳動不審な奴らがいたからとりあえず気を失わせといたぞ」

「さすがにやりすぎじゃ……」

「どうでもいいだろ。どうせモブだし」

「流石、真の外道は違うのう……」

「ありがとう」

「褒めてないのじゃ！」

えー。俺にとっては褒め言葉なのに。

「さすがだな明久。戦争でも良い仕事をしてくれた」

「お、坂本」

「む？ 明久は戦争に出てなかったではないか」

「いやこいつは校庭から攻撃してくれたんだ。Bクラスの奴らの意識を誘導してくれた」

「だからBクラスの連中は冷静じゃなかったわけじゃな」

結構、途中でやめたのもいい方向に進んだか。

「それにしても坂本。なんで教室を空けてたんだ？」

教室に代表である坂本がないのはおかしかったしな。

「協定を結びたいという申し出があつてな」

「協定じゃと？」

「ああ。四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。ってな」

「……まさかとは思うがそれ、承諾してないよな……？」

「ん？　したがそれがどうした？」

何やってんだこいつ！

「バカ野郎！　そんなことしたら他のクラスの対処が出来ねえだろ！……！」

しかも相手はあの根本だぞ！　絶対裏があるに決まってる。そんなこと簡単に気づけるだろ！

「——ッ！　悪い！」

「何でじゃ？　この協定はこっちが有利じゃろう？」

「そうじゃねえ！　漁夫の利を狙う連中、またはBクラスと接触を持つクラスの対処が出来ないって言ってるんだ！」

「……！」

「……すまねえ明久……」

クソッ……！　済んだことだ……。

「……いや、こっちも熱くなって悪い。とりあえず今日は目の前の戦争に集中しよう」

「ああ……」

「じゃあワシは前線に戻るぞい。向こうでも何かされてるかもしれない」

「わかった。俺も影からだが援助する。坂本、失敗は指揮で取り返せ」

「ああ。とりあえずこいつらはどうする？」

坂本は死体に目を向ける。

「俺が何とかする。お前らも十分警戒しとけよ」

「了解」

「わかったのじゃ」

坂本と木下は教室を出ていく。さて、こいつらどうしよう？

「……………明久」

不意にトントンと肩を突かれ声を掛けられる。

「何だ土屋？」

「……………情報の連絡を取れるようにしたい」

そう言っ て何かを俺に差し出す。…………これは小型トランシーバーか？

「いいのか？」

土屋はコクリと頷き。

「……………さっきの本が予想以上に良かった。これはお礼」

「ありがとう。貧血には気をつけろよ。それと俺のお勧めは56ページだ」

「……………フツ、また後で」

「ああ」

土屋とも別れもう一度校庭の死角の木に向かう。

ちなみに死体の処分は土屋がやってくれた。

—————

《……………明久。Bクラスに島田が人質に取られた》

《そうか、こっちは俺が何とかする。お前はCクラスを調べてくれ》

《……………Cクラス？》

《Cクラス代表は根本の彼女らしいぞ》

《……………了解。……………根本コロス……………》

これは土屋とのトランシーバーでの会話。便利だなコレ。

さっきパクツてきた双眼鏡で廊下を覗く。おーおー何てドラマ展開www

「ま、その幻想をぶち殺すつてな。試獣召喚」

そして召喚獣を出すといきなり飛びついてきた。いきなり消したのを根に持つてな。

「わりイわりイ。家で遊んでやるからあれをどうにかしてくれ」

俺がそう言々と花が咲くように笑顔になり、ミサイルを構えてぶっ放してくれた。

うんうん。俺はやっぱりこうじゃ無くちなア……。

【Furthermore, it became familiar.】

【Paradox'8】 安宅正路（後書き）

明久「いやあ、俺の召喚獣は素直で可愛いなあ」

ゴードン「お、まさかの子供好きか？」

明久「てか原作のキャラほとんど子供好きだろ？」

ゴードン「たしかに……」

【Paradox'9】 竜驤虎視（前書き）

今日は学校の文化祭の準備でした。

楽しみです！

【Paradox'9】 竜驤虎視

- side 明久 -

「ふう……何人かは潰せたみたいだな。ありがとな」

俺が召喚獣の頭を撫でると気持ち良さそうに目を細めた。

「さて、協定通りなら4時から休戦だし教室に戻るか……」

俺がつぶやくと召喚獣がまためっちゃ悲しそうな顔をする。……
そんな目で見つめられると罪悪感が……。

「大丈夫だ。俺は嘘はつかない、後で遊んでやるからさ」

そう言っても消えようとしない。

「……はあ、一緒に行くか？」

そう言ったら今度はニツコリ笑い、ちょこんと俺の肩に乗ってきた。
……ポ○モンみたいだな。

「ただいまーっ」と

校舎の近くにある木に登って窓からFクラスに侵入。

「うおっ！ 何だ明久か」

「悪いな俺だ。坂本、戦況はどうだ？」

「一応計画通り教室に攻め込んだ。もっとも、こちらの被害も少な
くはないがな」

「何で誰も明久が窓から入ってきたことをツツコまないんじゃ……」

坂本が被害の書いたメモを読み上げる。あ？ 予想より被害が少
ないな。

「明久が敵をかなり潰してくれたおかげで大分被害が減った。あと
お前何で召喚獣が肩に乗ってるんだ？」

「ああ。何かもう少し居たいらしい」

コクコクと召喚獣が頷く。

「ハプニングはあったが、今のところは順調なわけだなア」

「まあな」

「あの吉井君！」

「ン？ 何だ？」

心なしか姫路がソワソワしてる。

「召喚獣にさわらせてもらっていいですか!？」

「あ、ああ。別にいいが」

召喚獣を手渡す。

「可愛いです!」

何か姫路が召喚獣を撫で回してる……。あ、消えた。

「逃げちまったな」

「流石、明久の召喚獣じゃな……」

「……………(トントン)」

「お、土屋か。どうだった？」

気がつけば土屋がそばに来ていた。

「やっぱりCクラスの様子が怪しいか」

「……………(コクリ)」

土屋の話だと、Cクラスが試召戦争の用意を始めているらしい。

「漁夫の利を狙うつもりか。いやらしい連中だな」

「坂本、注意した方がいい。Cクラスの代表は根本の彼女らしいぞ」

「……………（コクコク）」

土屋も頷く。どうやら本当の情報だったらしい。

「何……？ それじゃ待ち伏せをしてる可能性もあるな。協定違反で潰すか」

「いや、俺に考えがある」

「何だ明久」

「おそらくBクラスは先生を呼んでCクラスにいる可能性が高い。だから返り討ちにして戦力を削いでやろうぜ」

「……分かった。じゃ、姫路と須川は俺と来てくれ。ムツツリーニは明久に付いていけ。秀吉は念の為ここに残ってくれ」

「ん？ なんじゃ？ ワシは行かなくて良いのか？」

「お前の顔を見せると、万が一の場合にやろうとしている作戦に支障があるんでな」

「よくわからんが、雄二がそう言うのであれば従おう」

木下が必要な作戦？ 何をするつもりなんだ？

「んじゃ、行くか土屋」

「……………了解。雄二、これを持ってけ」

「ボイスレコーダーか。わかった」

俺と土屋は校舎裏のCクラスに近い倉庫の上に居る。ここなら死角だし見つかることもないだろ。

「さて、サモン試獣召喚」

『Fクラス 吉井明久』

数学 564点』

どうやらCクラスには数学の先生が居たみたいだな。

「……………相変わらず凄い点数」

「サンキュ。土屋、そっちの様子はどうだ？」

「……………今、Cクラスの中」

「了解」

久しぶりに腕輪を使うか。

「ドラゴンス・サモン【龍神召喚】！ 炎龍イフリート！！」

俺がそう言っていると召喚獣の背後に炎を纏った龍が現れる。ちなみに

こいつも物理干渉が出来るんだよな。

『Fクラス 吉井明久 & 炎龍イフリート

数学 64点 500点
』

「……………明久、今だ」

「了解！ いけイフリート！」

俺がそう言うのと口から赤く燃え上がる炎を噴き出して、Cクラス
の中にいるBクラスの奴らに攻撃する。

『Fクラス 炎龍イフリート v s Bクラス 工藤信二&真田由
香&他2名

数学 500点 0点 0点
0点
』

……………何だ、一撃で終わったよ。

「……………成功」

「よし、教室に戻ろう」

「……………（コクリ）」

「ふう、どうだった坂本？」

「完璧だ。龍がいきなり現れた時は何事かと思ったけどな。あと暑かったぞ」

これでBクラスの戦力を減らせたな。

「俺は数学じゃもう役に立たないかな」

「あと何点だ？」

「64点」

「充分だ。まあ、こうなった以上はCクラスも敵だ」

向こうは連戦が狙いだろう。俺たちが勝っても息つく暇もねえぞ。

「じゃ、どうするんだ？ 俺一人で時間を稼いでいるうちにお前らが回復試験を受けるか？」

「心配するな。向こうがそう来るなら、こっちにだって考えがある」

「考えて、木下を使っつて奴か？」

「ああ。明日の朝に実行する。目には目を、だ」

この日はそれで解散となって、俺は家で召喚獣と遊んだ。

【Paradox'9】 竜驤虎視（後書き）

ゴードン「ついに腕輪も登場だな」

明久「チートだよなあ。この能力」

ゴードン「大丈夫。もっとチートな能力が登場するから（笑）」

明久「（笑）って何だよ！」

【Paradox 10】 私利私欲

- side 明久 -

「昨日言っていた作戦を実行する」

翌朝、登校した俺たちに開口一番にそう告げた。

「だが、開戦時刻はまだだぞ？」

今の時刻は午前八時半。開戦予定時刻は九時だ。

「Bクラス相手じゃない。Cクラスの方だ」

「なるほど。で、何をするんだ？」

「秀吉にコイツを着てもらおう」

そう言って坂本は鞆からうちの学校の制服。

……坂本……お前に何があったんだ……。

「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

木下、それは男として大いに構った方がいいぞ。

「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらおう」

なるほど。確かに木下姉弟は流石双子といったくらいにそっくり

だ。これを見破れる人はいないだろう。

「と、いうわけで秀吉。用意してくれ」

「う、うむ……」

制服を坂本から受け取り、その場で生着替えを始める木下。

「……………（パシャパシャパシャパシャ！）」

土屋は指が擦り切れるような勢いでカメラのシャッターを切つて
る。

「よし、着替え終わったぞい。ん？ 皆どうした？」

「許してやれ。こいつらは男で 放送禁止用語 しちゃう変態ども
なんだ」

「お主は何を言っておるのじゃ！」

何か怒られちゃった。心なしか木下の顔が赤い。

「どうした木下？ 熱でもあんのか？」

そう言っただけで木下の額にさわる。ふむ……結構熱いな。

「お、おぬしは何をするのじゃ！／＼／」

「おい明久。秀吉をいじるのはやめろ。んじゃ、Ｃクラスに行くぞ」

いや、今は柄にもなく心配しただけなんだが……。

「う、うむ……／＼／」

木下は俯いてゴニョゴニョ言ってるし……何なんだ？

「……………急に優しくされたから動揺した」

「何か言ったか土屋？」

「……………何でもない」

「…………？」

そのまましばらく歩き、Ｃクラスの前に着く。

「さて、ここからは済まないが一人で頼むぞ、秀吉」

「気が進まんのう…………」

あまり乗り気じゃない様子の木下。姉のふりをして敵を騙すなんて、決して気持ちのいい話ではないだろうしな。

「そこを何とか頼む」

「むう…………。仕方がないのう…………」

「悪いな。とにかくあいつらを挑発して、Aクラスに敵意を抱くように仕向けてくれ。お前ならできるはずだ」

確か木下は演劇部のホープとか言われてたしな。

「ま、それなりに頑張れ……」

「はぁ……。あまり期待はせんでくれよ……」

力なくCクラスに向かう木下。本当に気が重そうだ。姉と仲が悪いのか？

……俺の姉は……いや何でもない……。

「大丈夫かアイツ？」

「シッ。秀吉が教室に入るぞ」

ガラガラガラ、と扉を開ける音が聞こえる。

『静かにしなさい、この薄汚い豚ども！』

……これは……。

「流石だな、秀吉」

「確かにこれ以上ない挑発だが……」

『な、何よアンタ！』

これはCクラス的女子か？ 声からして怒ってるのが伝わってくる。

『話しかけないで！ 豚臭いわ！』

自分から来てその言葉……。ツツコミどころが多すぎだ。

『アンタ、Aクラスの木下ね？ ちょっと点数が良いからっていい気になってるんじゃないわよ！ 何の用よ！』

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！ 貴方達なんて豚小屋で充分だわ！』

『なっ！ 言うに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですって！？』

別にFクラスとは言っていないんだが……。

『手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴方達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの』

これは素なのか？ 演技なのか？

『ちょうど試召戦争の準備もしているようだし、覚悟してなさい。近いうちに私達が薄汚い貴方達を始末してあげるから！』

そう言い残し、木下は教室を出てきた。

「これで良かったかのう？」

どこかスッキリした顔で木下が近寄ってくる。

「ああ。素晴らしい仕事だった」

『Fクラスなんて相手にしてられないわ！ Aクラス戦の準備を始めるわよ！』

Cクラスからヒステリックな叫びが聞こえる。どうやらこいつが代表の小山のようだ。あだ名はヒステリック小山で決定だな。

「作戦もうまくいったことだし、俺たちもBクラス戦の準備を始めるぞ」

「ああ」

俺たちは早足で教室に戻った。

「ドアと壁をうまく使っんじゃ！ 戦線を拡大させるではないぞ！」

木下の指示が飛ぶ。

あの後午前九時よりBクラス戦が再開された、俺は死角の階段から皆を援護してる。坂本いわく『敵を教室内に閉じ込める』とのこと。

だが、姫路の様子がおかしい。

本来は総司令塔であるアイツだが、今日は一向に指示を出す気配がねエ。なんかあったのか？

「勝負は極力単科目で挑むのじゃ！ 補給も念入りに行え！」

いま指揮をとってるのは副指令の木下。ここ数時間はうまくやってるがやられるのは時間の問題だ。

『左側の出入り口、押し戻されてます！』

『古典の戦力が足りない！ 援軍を頼む』

「クソッ！」

俺の召喚獣に武器を構えさせる。今の武器は軍用スーパーボール。反発力が普通のスーパーボールの数百倍の代物だ。拡散型なので大人数の相手には使えるがダメージが低いのが難点だ……。

『姫路さん、左側に援護を！』

誰かがそう叫ぶ。

「あ、そ、そのっ……！」

クッ……！とにかく時間を稼ぐしかねエ！

「換装！ グレネード・閃光弾！」

俺の召喚獣が学ランから武器を取り出し投げる。すると爆音が発し、凄い閃光が出る。

その間に姫路の所に向かう。

「おい姫路。どオしたんだ？」

とにかく原因をはっきりさせないことには動けない。

「そ、その、なんでもないんですっ」

「なにかあったなら言え！　それで作戦も変わるんだぞ！」

「ほ、本当になんでもないんです！」

そうは言っが絶対におかしいだろ。

『右側出入り口、教科が現国に変更されました！』

『数学教師はどうした！』

『Bクラス内に拉致された模様！』

このままじゃ押し切られちまう！　俺も行くしかないか？

「私が行きますっ！」

そう言って姫路が戦線に加わろうと駆けだす。でも、

「あ……」

急に動きを止めてうつむいてしまった。

そろそろグレネードの煙も晴れてきたな。あ？ あれは根本か？

「ッー！」

なるほどそオいうことかア……。あれを使って姫路を脅したってわけかよ……。

「姫路」

「は、はい……？」

「何もしないンなら帰ってくれ。はっきり言って足手まといだ」

「……！ よ、吉井君？」

おー、驚いてる。そりゃあ今の俺は凄い醜い顔してるンだろうな。

「イイね。最高だ。根本くウン？」

光の人間を闇に引き込もうとするなんてなア……。

あの野郎、ブチ殺す。

【It kills.】

【Paradox 10】 私利私欲（後書き）

明久「何で俺怒ってんだ？」

ゴードン「光の人間を闇に巻き込もうとする根本にブチ切れたんだよ」

明久「なるほど」

ゴードン「一方〇通だってそうだったしな」

明久「おい」

【Paradox / 11】 悪人正機

【An overwhelming slaughter】

- side 明久 -

「……おい坂本」

「うん？ どうした明久。脱走か？ チョキでシバくぞ」

俺の目を潰すつもりか！

「話しがある」

「……とりあえず、聞こうか」

今はコイツのジョークに構ってる暇なンてねエ。

「根本から取り返したい物がある」

「……なるほど。勝利の暁にはそれくらいなんとかしてやる」

やべエ……。そろそろ負の感情で押しつぶされそうだ……！

「で、それだけか？」

驚くような顔で俺を見る坂本。今の俺の顔はバケモノみてエだろ
うしなア。

「姫路を今回の戦闘から外せ」

「理由は？」

「理由は話せねエ」

坂本が考え込む。 姫路を外すなんて戦力ダウンなんてレベルじゃねエしな。

「……条件がある」

「あ……？」

「姫路が担う予定だった役割をお前がやるんだ。どうやってもいい。必ず成功させろ」

「最初からそのつもりだ！」

「わかった。お前はタイミングを見計らって根本に攻撃を仕掛ける。教科はなんでもいい」

「くっ……！ あア……了解だよ大将……！」

「……！ フッ。お前にはお前にしかできないやり方がある」

……なるほど。いかにも俺らしい。

「俺はDクラスに指示を出してくる。無理はするなよ」

- side out -

吉井明久はDクラスにいた。だが周りには誰一人居ない。作戦の巻き添えを出さないためだ。

「ゴメンな俺の自分勝手な理由で……試^{サモン}獣召喚」

そして召喚獣を呼び出す。召喚獣の样子がいつもと違い、髪が真っ黒に染まっていた。

「……演算開始……」

そう呟くと彼と召喚獣の周りに黒いもやのようなものが漂う。

「うつ……グアアあああああッ!!」

突如、彼が叫び声を上げる。すると彼の腕から、赤い何かが噴き出し、口の中は鉄の味に染まった。

彼が発動させたのはバグ能力。自身の感情に反応するシステムであり、これを使うと完全に物理干渉が出来る。だが自分の負の感情を膨大させるものでもある。実際彼はこの能力を抑えるのは限界であった。

「がはっ! ……オオオおおおおおおおおおおおおおおおッ!!」

彼の中の何かが弾け飛んだ。それほど根本は彼を侮辱してしまったのである。自分の中のルール、それを否定されたことによって……。

彼にとって悪党とはそれほど大切で大きく、そして……。

「――y j r p 殺 q w」

何かをつぶやいた。消えてしまいそうな声で。誰にも届かない声だった。

そして彼の召喚獣の背中からはどす黒い翼が飛び出した。彼の中にはもう根本恭二を破壊することしかなかった……

のだが。

「くっ……アアあああああ！ はア……はア……」

彼はそのドロドロした感情を抑え込んだ。彼の強靱な精神力がなければおそらく意識が弾け飛んでいただろう。

彼は赤く染まった右腕を抑えて、召喚獣は黒い翼を抑え込み攻撃を開始した。

「お前らいい加減諦めろよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての」

そう言うのはBクラスの代表で卑怯者の根本。明久の話だとコイツに姫路が脅されているのだろう。

「どうした？軟弱なBクラス代表様はそろそろギブアップか？」

Bクラスを挑発する。それとさっき明久の叫び声が聞こえたが大丈夫かアイツ？

「はア？ ギブアップするのはそっちだろ？」

「無用な心配だな」

「そうか？ 頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？」

「……お前ら相手じゃ役不足だからな。休ませておくのさ」

今日は主役もいるしな。

「けっ！ 口だけは達者だな。負け組代表さんよお」

「負け組？ それがFクラスのことなら、もうすぐお前が負け組代表だな」

そろそろ時間だ。頼むぜ明久。

「……体制を立て直す！ 一旦下がるぞ！」

「どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！」

違う。巻き込まれちまうんだよ。

『オオオおおおおおおおおおおおおおおおおお
ッ！！』

【ドゴオッ！！】

豪快な音を立て壁が吹き飛び、その中から明久が飛び出してきた。
その腕は血で染まっていた。

「ンなっ！」

「根エエエ本くウウウウウウン！！」

明久が悪魔のような形相で根本のもとに駆け寄る。

「Bクラス山本が——」

明久に一人のBクラス生徒が近寄り勝負を申し込もうとすると、
それ以上そいつは喋ることなく地面にひれ伏した。

いや、そいつだけじゃないBクラス内に居る全員が明久を中心に
ひれ伏していた。

そう……、まるで重力が何倍にもなったように。

「Fクラス吉井明久。根本恭二に勝負を申し込む」

「お、お前……吉井——」

根本の周りの奴らは全員地面にひれ伏し、顔は恐怖に染まっている。そこへさらに追い打ちがかかる。

「……Fクラス土屋康太。……Bクラス根本恭二に保険体育勝負を申し込む」

屋上よりロープを使って二人の人影が忍び込み、根本恭二の前に降り立った。それは保険体育なら敵なしのムツリー二と体育教師の大島先生だった。

『Fクラス 吉井明久 & 土屋康太 VS 根本恭二』

保健体育 421点 & 441点 VS 203点
『』

ムツリー二の召喚獣が一撃で敵を切り捨て、明久の召喚獣が瓦礫を物凄いスピードで根本（本人）に投げつけた。

今ここにBクラス戦は終結した。

【Paradox '11】 悪人正機（後書き）

初めて3人称サイドを書いてみました。

修正した方がいいところがあつたら教えてください。

……あと明久がまんまあの方やな……。

【Paradox 12】 虚心坦懐

- side ムツリーニ -

…… side ムツリーニって何だ……。俺はいかにも健全な男子なだけなのに。

俺の召喚獣が根本の召喚獣にとどめを刺して、明久の召喚獣が根本にとどめを刺す。

だが流石だな明久。もう少しで点数が追いつかれるところだった……。

「……………明久？」

明久の召喚獣が消えて、力なくドサツと明久が倒れこむ。……
ッ！！ 出血が多い！

「……………！ 大丈夫か明久！！」

秀吉が明久を支える。

「よかった。気を失ってるだけじゃ」

ふう、心配させるな。

「とりあえず秀吉とムツリーニは明久を教室に連れてって介抱してやれ。俺はこっちを終わらせる」

「うむ。ムッツリーニも頼む」

「……………（コクリ）」

残りは雄二に任せよう。……何でBクラスの奴ら全員が床とキスしてたのかも早く知りたいしな。

- side 雄二 -

明久の怪我は出血のスペシャリストのムッツリーニにまかせておけば大丈夫だろう。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

「……………」

床に座り込んで必死に明久の召喚獣に攻撃された腹をさすってる。でも誰にも心配されてないな。

つかさつきまでひれ伏してた奴らが普通に立ってるな。何をやってたんだ明久の奴？

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

俺の言葉に反応して周囲がざわざわと騒ぎ始める。

「落ち着け、皆。前にも言ったが、俺たちの目標はAクラスだ。ここがゴールじゃない」

『確かに……』

「ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやるうかと思う」

そう言葉を皆理解したようで納得したような表情になった。

「……条件はなんだ」

「条件？ それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

これが明久の言う真の悪党と三下の違いなのか？ やっぱり誰からもフォローされてない。

「そこでお前らBクラスに特別チャンスだ。Aクラスに行つて、試召戦争の準備ができていると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやってもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるだけ伝えるんだ」

「……それだけでいいのか？」

さてここ等で明久に貸しを作っておくか。

「ああ。Bクラス代表がコレを着て言った通りに行動してくれたら見逃そう」

そう言っただけ俺は女子の制服を取り出す。おそらく明久が言っていた物は根本が自分の身に持ち歩いてるだろうしな。

「ば、馬鹿なことを言っただけ！ この俺がそんなふざけたことを……！」

根本が慌てふためく。そりゃ嫌だろうな。

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！』

『任せて！ 必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！』

Bクラスの奴らの温かい声援。根本の奴どこまで信用がないんだ。

「んじゃ、決定だな」

「くっ！ よ、寄るな！ 変態ぐふうっ！」

『とりあえず黙らせました』

「お、おう。ありがとう」

一瞬で代表を見限って腹部に拳を打ち込んだBクラス男子。明久の攻撃の痛みは尋常じゃなかっただろうし、これは痛そうだな。……ていうか、変わり身早いな。

「では着つけに移るか。須川も手伝え」

「了解」

ぐったりと倒れてる根本に近付き、制服を強引に脱がせる。

これはこの上ない苦痛だな。須川も嫌そうな顔してる。

「う、うう……」

「おらっ！」

「がふう！」

起きそうな根本の腹に追加攻撃。

「これはどうするんだ？」

須川は女子の制服の着せ方が分からないらしい。もちろん俺も知らない。……何で秀吉は知ってるんだ？

『私がやってあげるよ』

Bクラスの女子1人がそう提案した。

「悪いな。折角だし可愛くしてやれ」

『それは無理。土台が腐ってるから』

そりゃそうか。

「んじゃよろしくな」

その辺の女子に根本を託し、制服を持ってその場を離れた。

おそらくこの辺に……。

「ごそごそと根本の制服を探る。すると、指の先に何かがあたる感触があった。」

「……あつたあつた」

これは……封筒か？ 明久の物には見えないからやっぱり姫路の物か。

珍しい。あいつが誰かのために動くなんて……。あいつも変わり始めてるのか？

そんな事を考えながら先にFクラスに戻る。明久は意識は戻ったか？

余談だが、根本の制服はゴミ箱に突っ込んでおいた。ゴミはゴミ箱へ、だ。

「お前ら、明久の様子はどうか？」

「……………おかえり。処置は完璧」

「む？ そっちは終わったのかのう？」

教室にいたのは秀吉とムツツリー二と姫路だけだった。明久は…
…まだ目を覚まさないか……。

「姫路」

姫路にさっきの手紙を差し出す。

「あつ……………これ。あ、ありがとうございます……………！」

「お礼ならそこに倒れてる王子様に言ってくれ。それを取り返すためにこんなにボロボロになったんだからよ」

規則正しい寝息をたててる明久を見る。

「……………やっぱり何も変わってなかったです……………！」

「ん？」

「やっぱり吉井君——明久君は何も変わっていませんでした！
優しいまま、昔のままでした！」

姫路の方を見ると泣いていた。悲しい涙ではなく、明るい……旧
友と再会した時のような優しい涙だった。

「……………よかったな」

そして俺はそう柄にもなくつぶやいてしまった。

- side 明久 -

目を覚ますと見慣れたFクラスの天井が目映った。ふと窓の外を見ると綺麗な青空が見えた。

「起きたかのう明久」

そう言っただけ俺が起きるのを手伝ってくれる木下。

土屋や坂本の姿はなかったが、俺の怪我が治療してあるというこ
とは土屋がやってくれたのか？

「今……何時だ？」

「三時じゃ。戦争はさっき終了したぞい」

「そうか……」

ってことは一時間くらい倒れてたのか……。

「明久君っ！」

俺が腰を上げるとあろうことか姫路が抱きついてきた。何でいき

なり……。

……でもこういう雰囲気は何年ぶりかな……。

……懐かしくて、温かい。

「瑞希ちゃん……」

「えっ!？」

「懐かしいだろ？ 小学校の頃そう呼んでたじゃねえか」

俺はこの時何故か姫路を抱き返して、柄にもなく子供のように笑ってしまった。

「えっ！ いや……その／＼／」

ボンツという効果音が似合いそうな勢いで姫路の顔が赤くなって俺から離れる。

……？ 怒らせちゃったかな？

「そ、そのっ！ 手紙ありがとうございます……！ 明久君がわざわざ私のために……」

「気にすんなよ。旧友のよしみとでも思ってくれ」

「……旧友、ですか」

その時姫路は悲しそうな顔をした。

「わざわざ介抱してくれてありがとう。じゃあな二人とも」

そう言っ て俺は鞆を持って教室を出る。

……この時の姫路の顔が俺の中の記憶の何かに酷似していた。

あと空間に追いつけない木下は困惑していた。

【It is warm】

【Paradox 12】 虚心坦懐（後書き）

Bクラス戦はめちゃくちゃでしたね……。

すいません！！

まだまだ未熟者ゆえ、何か指摘があれば教えてください。
もちろん感想も待ってます。

【Paradox 13】 泥中之蓮

- side 明久 -

あの後、職員室に連行された俺は召喚獣の暴走と言って、俺自身も怪我をしたと言ったらすんなり修理の手伝いをする程度で許してもらえた。

あと家で召喚してみたが特に異常は無かった。もっと心を落ち着かせることが出来るようにならないと。

あと坂本と土屋がBクラス戦のあれはどうやったんだとしつこく聞いてきたんだが、何のことだろう？

そして点数補給のテストを終えた二日後の朝。

いよいよAクラス戦を残すのみとなった俺たちは最後の作戦の説明を受けていた。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われているにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったことだ。感謝している」

「どうしたんだ坂本。らしくないぞ？」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

確かにこの戦争は坂本や姫路だけじゃない。皆が頑張ったからこそまで来れたんだ。

……皆で何かをやり遂げるのもいいことかもしれないな……。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

『おおーっ！』

『そうだーっ！』

『勉強だけじゃねえんだーっ！』

ここに来て士気も最高潮だな。

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着をつけたいと考えてる」

『どういうことだ？』

『誰と誰が一騎打ちをするんだ？』

『やっぱり姫路さんか吉井じゃないのか？』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

坂本がバンバン、と机を叩いて皆を静まらせる。

「やるのは当然、俺と翔子だ」

霧島と坂本？ こいつらが幼なじみなのは知ってるが……何か弱点でも知ってんのか？

「馬鹿の坂本が勝てるわけがなあっ！？」

須川の頬をカッターがかすめる。殺す気なのか？

「次は耳だ」

殺す気らしい。

「まあ、須川の言うとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしれない」

それを認めるなら須川にカッターを投げる必要もなかったと思うが……。

「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？ まともにやりあえば俺たちに勝ち目はなかった」

だが俺たちはこうして勝ち進んでる。

「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺たちの勝ち揺るがない」

最初は誰も勝てないと思っていた試召戦争を勝利に導いてきた坂本の言葉だ。このクラスに否定する人間はいない。

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童と言われた力を、今皆に見せてやる」

『『『おおおーっ！！』』』

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちではフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？ 何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ」

日本史か……。俺の得意科目だが。

霧島が日本史が不得意なんて聞いたこと無いぞ。坂本も良くてDクラス上位ぐらいだろうし……。

「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

試験召喚戦争はテストを用いるのであれば、どんな方法でも構わないんだっとな。

それだと集中力や注意力の勝負になるからまだ勝機はあるかもしれないが……。

「だが、同点だったらきつと延長戦だぞ。坂本は神童と言っても小学生のころだし厳しいだろ？」

「確かに明久の言うとおりじゃ」

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？ いくらなんでも、そこまで

運に頼り切ったやり方を作戦などと言うものか」

「んじゃあ、霧島の集中力を乱す方法を知ってんのか？」

「いいや。アイツなら集中なんてしなくても、小学生レベルのテスト程度なら何の問題もないだろう」

「そりゃそうか。俺もテストなんて最低限の集中でやってるし。だが、だったらこの方法を？」

「雄二。あまりもつたいぶるでない。そろそろタネを明かしても良いじゃろう？」

「ああ、すまない。つい前置きが長くなった。俺がこのやり方を選んだ理由は一つ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ」

ある問題？

「その問題は——『大化の改新』」

「大化の改新か……。中大兄皇子や中臣鎌足が蘇我体制を潰したあれのことか？」

「ああ。だがそんなに掘り下げた問題じゃない。もっと単純な問いだ」

「単純というと——何年に起きた、とかかのう？」

「おっ。ビンゴだ秀吉。お前の言う通り、その年号を問う問題が出

たら、俺たちの勝ちだ」

大化の改新の年号か。俺が小学校の時は『むしころす大化の改新』⁶⁴⁵で覚えてたな。

だが、こんな基礎問題をあの霧島が間違えるのか？

……もしかして意図的に間違えてたり……？

「大化の改新が起きたのは、645年。こんな簡単な問題はFクラスでも間違えない」

あれ……？ 何でみんな目を逸らすんだ……？

「だが、翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺たちの勝ち。晴れてこの教室とおさらばって寸法だ」

やっぱり霧島は意図的に間違えてるのか？ 年号なんて暗記物だし復習すれば間違いなんて分かるだろ。

たとえ小学生レベルだからといってよく使うものだってあるし……。だが何でだ？

「あの、坂本君」

「ん？ なんだ姫路」

「霧島さんとは、その……仲がいいんですか？」

俺はこの前教えてもらったが、みんなは知らないんだっただな。

……あ。でもこれ言ったら……、

「ああ。アイツとは幼なじみだ」

「総員、狙ええっ！」

「なっ！？　なぜ須川の号令で皆が急に上履きを構える！？」

「黙れ、男の敵！　Aクラスの前にキサマを殺す！」

「俺が一体何をしたと！？」

……嫉妬狂ったクラスメートに襲われるぞ……。なんでこんな時だけ結束力が最高なんだよ。

「遺言はそれだけか？　……待つんだ横溝。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むものだ」

『了解です隊長』

ホント面倒なクラスだな……。

「落ち着けお前ら」

「む？　吉井は坂本が憎くないのか？」

「いや、相手はあの霧島だぞ。男の坂本に興味があるとは思えない」

この前聞いた噂を利用させてもらっ。確か霧島はモテるけどすべ

ての告白を断ってるから同性愛者説が立ってるんだよね……。

本当は坂本を一途に思ってる結果なんだがな。この前バッテリー公園で会って、坂本のことを色々聞かされた。……それから少し仲良くなった。

『……おお、そう言えば……』

『むしろ興味があるとすれば……』

『……そうだな』

皆の視線が姫路に集中する。まさか……ホントに噂を信じてるのか……？

「な、なんですか？　もしかして私、何かしましたか？」

「とにかく、俺と翔子は幼なじみで、小さな頃に間違えて嘘を教えていたんだ」

なるほど。坂本のことを話してる時の霧島、本当に楽しそうな顔してたしな。好きな人から教えてもらったことを優先して覚えててもおかしくない。

「アイツは一度覚えたことは忘れない。だから今、学年トップの座にいる。俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺たちの机は――」

『『『システムデスクだ！』』』

俺たち最弱の最強への下剋上は最後の戦いに突入する――。

【Paradox 13】 泥中之蓮（後書き）

ゴードン「やっとここまで来ましたなあ」

明久「ホントよくやったな。これからもこの駄作者を応援してやってくれ」

ゴードン「素直に褒めてッ……！」

【Paradox 14】 王侯将相

- side 明久 -

「一騎討ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む」

恒例の宣戦布告。

今回は須川ではなく代表の坂本を筆頭に、俺、姫路、木下に土屋と首脳陣勢揃いでAクラスに来ていた。

「うーん、何が狙いなの？」

現在坂本と交渉のテーブルについているのは木下の双子の姉の木下優子。ホント姉弟そっくりだな。

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいけどね、だからと言ってリスクを冒す必要も無いかな」

「賢明だな」

予想通りの返事。これじゃ、Cクラスの用に挑発してもうまくいかないかな。

「ところで、Cクラスとの試召戦争はどうだった？」

坂本が腕を組み、顎に手を当てながら訊く。

「時間は取られたけど、それだけだったよ？ 何の問題もなし」

木下の……弟の方の挑発に乗り、昨日Aクラスに攻め込んだクラス。まあ代表があんなのでクラスの統一が取れてない奴らが勝てるわけないんだけど。

「Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって……、昨日来ていたあの……」

「ああ。アレが代表をやってるクラスだ。幸い宣戦布告はまだされていないようだが、さてさて。どうなることやら」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずだね？」

試召戦争のきまりの一つ、準備期間。

戦争の泥沼化を防ぐため、敗戦したクラスは三ヶ月の準備期間を経ない限り自ら宣戦布告はできないというルール。

「知っているだろ？ 実情はどうあれ、対外的にあの戦争は『和平交渉にて終結』ってなっていることを。規約にはなんの問題もない…… Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな」

「……それって脅迫？」

「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」

いいね。いい悪党だよ坂本。

「うーん……わかったよ。何を企んでるのか知らないけど、Fクラスに負けるなんて思わないからね。その提案受けるよ」

「いいのか？」

へえ……。案外あっさりOKが出たな。坂本も驚いてる。

「だって、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん……」

確かに……。俺がAクラス代表だったら間違いなくお断りしてたしな。

「でもこっちからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうだね、お互いに五人ずつ選んで、一騎打ち5回で3回勝った方の勝ち、っていうのなら受けてもいいよ」

「ほお……」

流石はAクラスといったところかな。きっちり俺と姫路を警戒してる。

「なるほど。こっちから明久や姫路が出てくる可能性を警戒しているんだな？」

「うん。姫路さんはともかく、吉井君は強すぎるからね」

確か霧島は総合科目5000点前後だったはず……まあ俺には勝てんな。

「安心してくれ。うちからは俺が出る」

「無理だよ。その言葉を鵜呑みにはできないよ」

これは競争じゃなくて戦争だからね、と付け足す。確かにその通りだ。

「そうか。それなら、その条件を呑んでも良い」

一騎討ち5回か……。俺、姫路、土屋でいけるか？

「ホント？ 嬉しいな」

「けど、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。そのくらいのハズデはあってもいいはずだ」

こちらから挑んでおいて教科の選択権を全部よこせ、ってことか。すげー図々しいな。

「え？ うーん……」

「……受けてもいい」

「あつ、霧島」

「……雄二や吉井の提案を受けてもいい」

突然霧島がどこから現れる。

「あれ？ 代表。いいの？」

「……その代わり、条件がある」

「条件？」

「……うん」

俺や姫路を観察するように見て、坂本に向けて言い放つ。

「……負けた方は何でも一つ言うことを聞く」

なるほど……これを機に坂本に交際を迫るつもりか？

「……………（カチャカチャ）」

「土屋……何してるんだ……」

「……………撮影準備」

何を撮影するつもりだお前は……。

「じゃ、こうしよう？ 勝負内容は五つの内の三つをそっちに決めさせてあげる。二つはうちで決めさせて？」

なるほど。確かにそれなら充分だな。

「交渉成立だな」

「……勝負はいつ？」

「そうだな。十時からでいいか？」

「……わかった」

「よし。交渉は成立だ。一旦教室に戻るぞ」

「そうだな。皆にも報告しなくちゃいけねえし」

交渉を終了し、Aクラスをあとにする。

俺たちの試召戦争の終結は、すぐそこまで迫っていた。

【Paradox 14】 王侯将相（後書き）

ゴードン「感想待ってます！」

明久「今日は何にもなしか!!」

【Paradox 15】 風林火山（前編）

- side 明久 -

「では、両名共準備は良いですか？」

今日の戦争ではAクラス担任かつ学年主任の高橋先生が立会人を務める。

「ああ」

「……問題ない」

会場はAクラス。こっちの方が広いし、腐った畳のFクラスじゃ締まらないしな。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよっ」

向こうは木下の姉、木下優子。

対するこちらは、

「ワシがやろっ」

その弟の木下秀吉。

……それにしても何か忘れてるような……。

「ところでさ、秀吉」

「なんじゃ？ 姉上」

「Ｃクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

「Ｃクラスの小山って、確かこの前木下が……、

「じゃーいいや。その代わり、ちょっとこっちに来てくれる？」

「うん？ ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

木下が姉のフリをして罵倒しまくった相手だったような……。

『姉上、勝負は——どうしてワシの腕を掴む？』

『アンタ、Ｃクラスで何してくれたのかしら？ どうしてアタシがＣクラスの人達を豚呼ばわりしてるのになってるのかなあ？』

『はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して——あ、姉上っ！ ちがつ……！ その関節はそっちには曲がらなっ……！』

【ガラガラガラ】

扉を開けて木下姉が戻ってくる。

「秀吉は急用ができたから帰るってさっ。代わりの人を出してくれる？」

「い、いや……。ウチの不戦敗で良い……」

それにしても木下姉はずいぶん良い子ちゃんを演じてるみたいだな。昔から人間観察が日課だった俺からすると表情の違いなんてすぐにわかる。

……。まあ、今はコンタクトとか眼鏡をしないとほとんど目が見えないけど。……。あの時の……。

「そうですか。それではまずはAクラスが一勝、と」

『Aクラス 木下優子 VS Fクラス 木下秀吉

生命活動 W I N V S D E A D』

まだ生きてると思うぞ……。

「では、次の方どうぞ」

「私が出ます。科目は物理でお願いします」

Aクラスからは去年のクラスメートの佐藤。……物理か……。

「よし。頼んだぞ、明久」

「え？ 俺？」

てつきり俺は学年次席の久保利光と当てられると思っていたが。

「ああ。相手はAクラスだ。出し惜しみして勝てるほど甘くない」

確かにそうだが……。

「でも今回のテストは……」

「本気を出したんだろ？ それに今回は協力してくれ」

坂本が俺に頭を下げる。なんかずるいなあ。……でも、

「やれやれ。わかったよ」

「ありがとう」

……今回のテストは眠くて少し手を抜いてるんだけど……。

「吉井君。あなた、まさか……」

「ああ。久しぶり佐藤。そう、今の俺は——」

どうしよう勝てる気がしない……。わざわざ物理で名乗りを上げてきたのだから相当の点数なのか？

「本気だ。^{サモン}試獣召喚」

かっこつけてる俺、かっこ悪いな……。

『Aクラス 佐藤美穂 VS Fクラス 吉井明久

物理 389点 VS 524点
』

Aクラスの方から驚いたような声がちらほら聞こえる。

あれ？ 佐藤は自信満々で来たからもつと凄いかと思ったが。

「えっ？ よ、吉井君！ いつの間にこんな点数を！？」

「いや、これでも手を抜いているんだが……」

「ええっ！？」

「まっ、いいや。【ドラゴンズ・サモン龍神召喚】！ 雷龍ボルテックス！！」

『Aクラス 佐藤美穂 VS Fクラス 吉井明久 & 雷龍ボル
テックス

物理 389点 VS 24点 & 50
0点
』

俺の点数が限界まで消費され、俺の場に雷をバチバチと纏う龍が
召喚される。

てか、このエフェクトかっこいいな。学園長は変なところに労力さ
くしな……。

「代表様との約束なんだね。……やれ」

俺が言つと四方八方から雷が現れ、物凄いスピードで佐藤さんの召喚獣に迫る。

もちろん避けれる訳がなくすべての攻撃が直撃する。

『Aクラス 佐藤美穂 VS Fクラス 吉井明久 & 雷龍ボルテックス』

物理 0点 VS 24点 & 50点 』

「勝者、Fクラス」

「よくやった明久！ 流石だ」

「サンキュッ！」

バシンと坂本とハイタッチ。もちろん全体重を掛けたので、

「痛つてええええ！！ 明久ああッ！！」

こうなる。

「ははッ。決める瞬間を台無しにするのが俺だ！！」

こういうのもすげえ楽しい。なんだかんだ言つて俺もこいつらに侵されてるのかな？

【Paradox 15】 風林火山（前編）（後書き）

明久「俺の性格が丸くなるの早くな？」

ゴードン「物語を進める上で、少し丸くした方がいいかと思ったんだ」

明久「……本当は？」

ゴードン「……僕の力不足です……」

明久「……」

ゴードン「……」

【Paradox '16】 風林火山（後編）（前書き）

このへんから明久の性格が少しずつ（ここ重要）に変わり始めていきます。

……たぶん苦勞人になると……。

- side 明久 -

「では、三人目の方どうぞ」

「……………（スック）」

ここで立ち上がったのは保健体育の帝王の土屋。

こちらに教科選択権がある今、土屋に負けはないはず……………。

「じゃ、ボクが行こうかな」

Aクラスからは髪をショートカットにした、ボーイッシュな女子。
確かAクラスの転校生だっけか？

「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

ぱっと見少年のようだ。

「教科は何にしますか？」

「……………保健体育」

高橋先生に尋ねられ、土屋の唯一の武器が選択される。

「土屋君だっけ？ 随分と保健体育が得意みたいだね？」

あれ？ 工藤は土屋の保健体育の実力を知らないのか？ 随分と
余裕そうだ。

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？ ……キミとは違って、
実技で、ねっ」

「……………実技？（ドバドバ）」

……………なんだ、ただの変態さんか。あつ、土屋が鼻血を…………。

「そっちのキミ、吉井君だっけ？ キミも保健体育が得意みたいだ
し一緒にやる？ もちろん実技で」

ゲツ、今度はこつちか…………！ こういうタイプは相手にしない方
がいい。俺の人生に悪影響を及ぼしそうな変人オーラが出てるし。

目には目を、歯には歯を、変態には変態を、だ。

「いや、遠慮しておくよ。その土屋とでも——って土屋あああ
あ——」

土屋に視線を向けると出血多量で倒れてた。…………相変わらず凄い
想像力だ。

って、土屋はもう戦えそうにないんだがッ！

「くそッ、仕方ねえ。明久はムツツリー二を保健室に連れてけ。代
わりに須川！ お前が（生贄として）出る——」

須川なんかの点数で勝てるわけないし…………あの野郎は捨て駒か。

「おい土屋。しっかりしろ」

「……………生まれ変わるなら……………鳥になって……………」

いきなり語り始めたぞ……………？

「……………女子更衣室を思う存分……………覗き、たい……………（ガクッ）」

「……………現世の死因から何も学んでいないな……………」

この手のエキスパートのはずなのに、なんでこんなに純情なんだ……………。

土屋を保健室に投げ込み、Aクラスに戻る。

後、木下は肩が外されていたからはめ直しておいた。

「大丈夫か……………？」

「うむ……………。じゃが何で助けてくれたのじゃ？」

「お互い姉には苦勞してるってことだよ……………」

「……………？」

坂本に聞いた話では、予想通り須川は瞬殺されて、補習室に連行。姫路は学年次席の久保利光に点数差をつけて勝利したらしい。

ということでは今の勝敗は二対二。高橋先生も随分驚いてらっしゃる。

「最後の一人、どうぞ」

「……はい」

Aクラスからは現学年主席の霧島翔子。

そして、こちらからは当然、

「俺の出番だな」

坂本雄二。コイツしかない。

「教科はどうしますか？」

Aクラスの奴らは随分余裕そうな顔をしている。その顔が絶望に塗り替わると思うとゾクゾクするな。

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

【ざわ……！】

坂本の宣言で、Aクラスにざわめきが生まれる。

『上限ありだつて？』

『しかも小学生レベル。満点確實じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ……』

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少しこのまま待っていてください」

高橋先生が教室を出ていく。おそらく、資料でも取りに行くのだろう。

「明久」

そこで坂本が俺に近づいてくる。

「なんだよ、改まって？」

「お前の力があつたからここまで来れた。ありがとう」

そう言つて手を差し出してくる。……なんか恥ずかしいな……。

「いや、俺も楽しかったよ。後は任せたぜ、……雄二！」

そういつて坂本の手を力強く握り返す。

「……………！ ああ！」

俺にも…………… 本当の友達が作れるかもしれないな……………。

坂本と霧島が教室を出ていき視聴覚室に向かった、俺たちはAクラスモニターでそれを見守る。

『では、問題を配ります。制限時間は五十分。満点は100点です』
画面の向こうで問題用紙が二人の机に置かれる。

『不正行為は即失格になります。いいですね？』

『……………はい』

『わかっているさ』

『では始めてください』

二人が問題用紙を表にして、問題を解き始める。

……………？ でも何だろう、何かが腑に落ちない。

「……………そう言えば坂本の奴、振り分け試験の日に小学生レベルの問

題を解けなかったよな……」

俺が試験の前に出した問題が解けなかったのである。

『『『うおおおっ！！』』』

Fクラスの奴らが歓声を上げる。おそらく大化の改新が出たのだろっ。

「あ、明久君っ」

「姫路？」

「これで私たちっ……！」

「いや、よく考える姫路」

そう、よく考えたらすぐにわかった。

「え……？」

「たとえば霧島が1問程度間違えるとしても、ずっと勉強して来なかった奴が、たとえば小学生レベルだとしても——まして、暗記が物を言う日本史で満点を取って勝てると思うか？」

「……あっ」

たとえ過去に神童と言われていたとしてもそれは過去の話し。さらに今やってる教科は日本史だ、暗記が物を言う教科をずっと勉強をしていなかった人間ができるのか？

「答えはNOだ」

《日本史勝負 限定テスト 100点満点》

《Aクラス 霧島翔子 97点》

VS

《Fクラス 坂本雄二 53点》

Fクラスの卓袱台がみかん箱になった。

【Paradox 17】 栄枯盛衰（前書き）

今回で1章完結です！ 次からは清涼祭編です。

【Paradox 17】 栄枯盛衰

- side 明久 -

「三対二でAクラスの勝利です」

視聴覚室にFクラスの奴らが突撃すると、高橋先生が言った。

「……雄二、私の勝ち」

床に膝をついてうなだれている雄二に霧島が歩み寄る。

「……殺せ」

「霧島と幼なじみの上にこの結果とは……生き残れると思うなよ……」

須川を筆頭に、Fクラスの連中が構える。

「……一応聞いておくが、その点数だと——」

「いかにも俺の全力だ」

「殺せええええ!!」

俺が雄二に尋ねるとそれを認め、須川が攻撃を開始する。

「まあ落ち着け須川。お前だと、30点も取れんだろ？」

「それは否定出来ん!!」

「それなら坂本君を責めちゃダメですっ!」

「くっ! なぜ止めるんだ吉井に姫路! この馬鹿には腹を切ると
いう体罰が必要なのに!!」

「それって体罰じゃなくて処刑です!」

姫路や木下、島田がクラスの奴らを沈める。俺はその間に雄二に
近づく。

「……すまん、明久……」

申し訳なさそうに俺に言う雄二。

「気にしてないよ。それに、お前のおかげで大切な事が少しだけわ
かった気がする」

そう言っ雄二に手を差し出す。

まだだけど、もうすぐ本当に大切なものが見つかりそうな気がする。
る。

「そうか」

雄二もそれを力強く握り返してくる。

「でも、ここで諦めるわけじゃないんだろ?」

「……！　そうだ、まだ俺たちの下剋上は終わってない！」

よかった。ここで諦めてたならしばいてたけど。

「……雄二。ところで約束」

霧島が雄二に言う。

「ああ。俺の完敗だ！　何でも言え」

ここで『俺の』って言うのが何ともコイツらしいな。

「……それじゃ――」

俺と姫路に一度視線を送り、再び雄二に戻る。

「……雄二、私と付き合って」

やっぱりか。

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

「……私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

この二人は小学校の時からずっとこんな関係だったらしい。詳しくは聞いてないが、霧島にすこし教えてもらった。

「その話は何度も断っただろ？　他の男と付き合う気はないのか？」

「……私には雄二しかないない。他の男なんて、興味ない」

「拒否権は？」

「……ない。約束だから。今からデートに行く」

「ぐあっ！ 放せ！ やっぱこの約束はなかったことに——」

【ぐいっ　つかつかつか】

「……じゃあね吉井」

「え？ あ、ああ……？」

「明久！ 助け——」

雄二は霧島に首根っこを掴まれ、どこかに連れて行かれた。

「……………」

「……………」

「……………」

教室にしばしの沈黙が訪れる。

皆、いきなりの出来事に声が出ないようだ。

「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

呆然としてる俺たちの耳に野太い声がかかる。

「あれ？ 西村先生。どうしたんですか？」

「おお、吉井。何、今から我がFクラスに補習についての説明をしようと思つてな」

え？ 我がFクラス？

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるそうだ。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

「あ。そうなんですか？」

『『『なにいつ！』『』『』』

西村先生は生活指導と補習教師を務める先生だ。厳しいけど、根は優しくて教師の鑑のような人である。

「いいか。確かにお前らはよくやった。Fクラスがここまでくるとは正直思わなかった。でもな、いくら『学力が全てではない』と言っても、人生を渡つていく上では強力な武器の一つなんだ。全てではないからといって、ないがしろにしていいものじゃない」

西村先生が言うことはまったくもって正論だ。だけど、

「だが吉井。お前には学力なんかよりももっと大切なことが……いや、何でもない。お前は自分で気づいたようだしな」

。 西村先生が俺を見てきたけど、笑って返した。大切なことは――

- s i d e 鉄人 -

吉井の目には他者を拒絶するような感情はなく、まっすぐと俺を見ていた。その目に迷いはない。

……フツ、この事はこの馬鹿どもに感謝しないとな。

- s i d e 明久 -

今は試験召喚戦争終了後の夜、色々あったけど俺は破壊したDク
ラスの設備の修理の手伝いをして帰った。

妙に今日は西村先生や福原先生の機嫌がよかった気もする。

『はい、もしもし?』

「あつ、母さん? 久しぶりっ」

『その声は――明久君? ……あれ? 明久君、妙に機嫌がいい
ね?』

「うん! あつ、そのことじゃなくて、今月の仕送りなんだけど」

『え？　ちゃんと振り込んでおいたわよ？』

「ああ……振り込んであったけど、１００万円ってどういうこと！？　振り込む桁が絶対違うだろ！？」

『安心して、それはお父さんが——』

「あつ、父さんが間違えちゃったんだ。父さんもドジだな」

『それはお父さんが振り込んだ分で、私もちやんと振り込むから』

「まだ振り込む気なの！？　とにかく、もう大丈夫だからそんなに気を使わないで！」

『あつ、そう言えば明久君。成績の方は？』

「いつも通りだよ。心配しないで。……でも、クラスはＦクラスに——あれ？　何で電話の向こうから真剣を振るような音が聞こえるの？」

『あんのババア！！　私の可愛い息子をＦクラスに入れただとツ！　永久に研究者としてやっていけないようにしてやる！！』

「もの凄い不吉な言葉が聞こえた気がする！　落ち着いて母さん！　俺は大丈夫だから！」

『こうしちゃいらねエ！！　あのババアに血の気も引くような嫌がらせをお見舞いしてやる！！』

そこでガチャンと電話が切れた。……学園長ご無事で……。

なんて事を思いながら、黙祷を捧げていると不意にインターホンが鳴る。

「誰だ？ こんな時間に」

今の時間は夜の7時、そろそろ飯にしようかと思っていたころだ。こんな時間じゃ、『新聞の勧誘とかかな？』とかを思いながらインターホンのモニターを見る。

「……雄二か？」

そこには、ボロボロの制服を着て腕に手錠がつけてある雄二が震えながら立っていた。

とりあえず俺は状況を整理するため雄二を家に入れることにした。

「どうしたんだよ雄二？」

「あ、明久……とりあえず家に、入れて……くれ……」

何故か物凄く震えていた。

「まあ、良いけど」

ガチャガチャと雄二につけてある手錠を外す。

「妙に手慣れてるな？」

「気にすんな……」

昔、姉からの奇襲から逃げるためにピッキングを練習していたのは秘密だ。

「で、あの後何があったんだ？」

「ああ。映画館に連れてかれたんだ」

「映画館？　そこから何でこうなった……？」

「そして帰ろうとしたらスタンガンを押しつけられた」

「ふむふむ」

……色々ツッコみたいけどとりあえずガマンだ。

「……目を覚ますと、繋がれた牛が殺されるシーンだった……」

「え？」

「隙を見て逃げ出そうとしたら、またスタンガンを当てられ気を失い、目が覚めたらまた牛が……」

「……2回見たのか……。というかどんな映画だよ……」

「……また逃げようとしたら気を失い、永遠に牛が死んでいるシーンで目が覚めるんじゃないかと強迫観念に襲われて……、逃げられなくなった……」

「永遠に映画の最初は見れないんだな……」

これは怖いな。震えるのもわかる。

「というわけで明久！ 俺に勉強を教えてくれ！」

「は？ 何でだ？」

「……翔子に聞かれたんだ……、式はどこで挙げたいかと……。今度こそAクラスに勝たないと、俺の未来は……」

「わかった、できる限り協力する。あと、今日は泊っていくか？」

「……ありがとう……」

その日は雄二は俺の家に泊まることになり、徹夜で勉強を教えることになった。

【A n i m p o r t a n t t h i n g】

【Paradox 17】 栄枯盛衰（後書き）

雄二と明久の友情がどんどん深まっていけますね。原作のような悪友関係にもなれるかな？

ちなみに明久の両親と学園長は企業と学園として繋がりを持っています。

【Paradox 18】 温故知新（前書き）

『あ、明久君？』

「母さん？ 何の用？」

『じつは……あ、ちゃんとお金は振り込んでおいたわよ』

「大丈夫だって言ったのに……。後何でそんなに満足げなの？」

『フフフ……。これでババアを葬ることに成功したわ……』

「学園長、ご無事で……。で、用事はこれで終わり？」

『あ、ゴメンゴメン。実はあのアクセサリーが見つかったよ』

「え！ ホントに！？」

『うん。そっちに送っておいたからすぐ届くと思うよ』

「ありがとうございます！ 大好きだぜ！」

『そんな……大好きだなんて／＼／』

【Paradox '18】 温故知新

- side 明久 -

暖かくなり、新緑の芽吹き始めたこの季節。俺たちの通う文月学園では、新学期最初の行事である『清涼祭』の準備が始まりつつあった。どのクラスも学園祭の準備の為にLHRの時間は活気に溢れている。

そして我がFクラスというと――

「横溝！ こいつ！」

「勝負だ、須川！」

「お前の球なんか、場外まで飛ばしてやる！」

準備なんてせずに校庭で野球をしてやがった。

ちなみに教室にいるのは俺、木下、姫路、島田の四人。何やってんだか。

「皆、HRを始めるぞ――これはどういうことだ……？」

俺は指でちよいちよいと校庭を指差す。

「あの馬鹿ども……少し待っている」

「さて。そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだが――」

Fクラスの代表様は教壇の上から俺たちを見下ろしながらそんな宣言をしてきた。

ちなみにさつき西村先生に全員連れてこられた。

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

心底どうでも良さそうな雄二の態度。ぶっちゃけ『そいつに全部押しつけて俺はサボる』ってことだろ？ まあ、俺もあまり興味はないが。

それにしても……、

「まさか卓袱台から設備が落ちるなんて思ってたぞ……」

今の俺たちの机はミカン箱だ。まさかここまでとは……。

「んじや、学園祭実行委員は島田でいいか？」

どうやら実行委員は島田に決まっただらしい。まあ適任か。

「え？ ウチがやるの？ うーん……、ウチは召喚大会に出るから、ちよっと困るかな」

召喚大会？ ああ、学園をプッシュするためのイベントだっけ？

「学校の宣伝のようなもののに、物好きだな」

「ウチは瑞希に誘われてからなんだけどね。どうやらお父さんを見返したいって言って聞かないんだから」

「Fクラスって理由だけでバカにするんですよ？ 許せませんっ」

Fクラスはホントに馬鹿の集まりだと思う……ってことは言わない方がいいか。

「だからFクラスのウチと組んで、召喚大会で優勝してお父さんの鼻をあかそうってワケ」

なるほどな、まあ姫路と島田なら優勝も不可能じゃないだろ。

「三人とも。こっちの話を進めてもいいか？」

「あ、ゴメン雄二。どうせお前はやらんだろうし、俺が板書をやるよ」

どうせ皆やりたくないだろうし、とつとやって終わらせよう。

「ああ、ありがとう。それじゃ、あとは任せたぞ。ふあ……」

ホントに興味がないんだな。全身からだるいオーラが溢れ出てる。

「それじゃ、ちゃっちゃと決めるわよ。クラスの出し物でやりたい

ものがあれば挙手してもらえる?」

数名は手を挙げてるな。やる気のある奴もいるのか。

「はい、土屋」

「……………（スクツ）」

名前を呼ばれて立ち上がったのは、そっち方面の知識は人一倍の土屋康太。

「……………写真館」

「土屋の言う写真館って、かなり危険な予感がするんだけど」

島田が思いきり嫌そうな顔をする。

土屋が撮った写真はおそらく先生の見周りで一発でアウトになるだろう。

【候補? 写真館】

「次。はい、横溝」

「メイド喫茶———といたいけど、流石に使い古されていると思うので、ここは斬新にウェディング喫茶を提案します」

「ウェディング喫茶? それってどういうの?」

俺も聞いたことがねえな……。

「別の普通の喫茶店だけど、ウェイトレスがウェディングドレスを着ているんだ」

ふむ。なかなかおもしろそうだけど、女子の数が足りないと思うが……。

【候補？ ウェディング喫茶】

それにしてもチョークすらボロボロなんだな……。

「さて、他に意見は——はい、須川」

「俺は中華喫茶を提案する」

そう言いながら須川が立ち上がる。

「中華喫茶？ チャイナドレスでも着せようっていうの？」

「いや、違う。俺の提案する中華喫茶は本格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す店だ。そうやってイロモノ的な格好して稼ごうってワケじゃない。そもそも、食の文化は中国にあるという言葉からもわかるように、こと『食べる』という文化に対しては中華ほど奥の深いジャンルはない。近年、ヨーロッパ文化による中華料理の淘汰が世間で見られるが、本来食というものは——」

へえ……。須川には相当なこだわりでもあるのか？ 随分と熱弁を振るっているな。

【候補？ 中華喫茶】

と、書き終えたところで教室の扉が開き、西村先生が入ってきた。

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

「今のところ、候補は黒板に書いてある三つです」

島田がそう言うつと西村先生が黒板に目を向ける。その時に俺に優しい視線を向けてきた。

【候補？ 写真館】

【候補？ ウェディング喫茶】

【候補？ 中華喫茶】

Fクラスにしては真面目にやっているとと思う。西村先生も満足げだ。

「よし。どうやら進んでいるようだな」

すると先生は皆の方を向きこう言い放った。

「皆、今回の清涼祭で稼ぎを出せば、設備を向上できるように俺から学園長に頼んでおいた。頑張るんだぞ」

すると一気に教室が活気づく。皆この設備は嫌だろうし、我慢なんてこいつらにできるわけがない。

だがそのせいでクラスのまとまりがなくなってしまった。

『お化け屋敷とかの方が受けれると思う』

『簡単なカジノを作ろう』

『焼きとうもろこしを売ろう』

うーん……。コレをまとめることのできる雄二はやっぱり凄いな……。

「とにかく静かにしろ。まとまらなければ手に入れることのできる設備も手に入れないぞ」

強引に教室を沈める。ブーブー言う奴は眼力で抑え込む。

「それじゃ、写真館に賛成の人！——はい、次はウェディング喫茶！——最後、中華喫茶！」

クラスが静まったところで多数決を始める島田。結果、

「Fクラスの出し物は中華喫茶にします！ 全員、協力するように！」

随分の接戦だったけど、僅差で中華喫茶に決まった。まあ順当だろう。

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

と、須川が立ち上がる。さっきは随分と熱弁を振るってたし彼に任せれば大丈夫だろう。

「……………（スクツ）」

それと、何故か土屋も立ち上がった。

「土屋、中華できるのか？」

「……………紳士の嗜み」

何で中華料理が紳士の嗜みなんだ……。まあ多分チャイナドレスの見たさで通ってできるようになった、とかそんな所だろう。

「じゃあ、俺もホールにするかな」

「あれ？ アキ、料理できるの？」

「ア、アキ…………？」

いきなり島田にそう言われた。…………あだ名か何かか？

「明久だからアキ。別にいいでしょ？ ……ウチも、負けたくないから…………」

「まあ構わんが……。俺は一人暮らしだし、それなりに料理はできる」

それにウチの両親と姉は料理ができなかったしな。うつ……。思
い出すと吐き気が……。

「それじゃ、私も厨房班に——」

「ダメだ姫路！ お前は女子だから島田とホールを頼む！ 島田、
頼むぞ……！」

断じて清涼祭を食中毒で終わらせるわけにはいかない！ 島田も
コクコクと頷く。

『明久、グツジョブじゃ』

『……………！（コクコク！）』

木下と土屋からのアイコンタクト。何が言いたいのかすぐにわか
った。

これを教えてくれた坂本は寝ているはずなのに小刻みに震えてい
る。夢の中にでも姫路の料理が出てきたのか？

そんなこんなで俺たちは準備を始めた。

【Paradox 19】 率先垂範

- side 明久 -

「アキ、ちよつといい？」

帰りのHR終了後。帰ろうとしたところ、何故かあだ名で呼ばれることになった島田に呼びとめられた。

「何か用か……？」

「用って言うか、相談なんだけど」

ふむ、どうやら顔つきから考えて真面目な話のようだ。

「相談？ 一応聞くけど」

「うん。ありがと。やっぱり坂本をなんとか学園祭に引っ張りだせないかな？」

確かにアイツのリーダーとしての能力は相当なものだ。アイツに任せればおそらく学園祭は成功するだろう。

「だけど……、

「アイツは興味がないことにはとことん興味を示さないから……」

アイツとは戦争以来、よく一緒に勉強しているけど、できる教科はすぐに伸びたけど、興味の無い教科はやらないから……。

「それじゃ、坂本は動いてくれないってこと？」

「ああ。おそろくな」

「なんとかできないの？ このままじゃ喫茶店が失敗に終わるような……」

目を伏せ、沈んだ面持ちになる島田。……だが何でここまでやる？ 設備とは違う理由があるんじゃないか？

「む？ お主らは何の話をしておるのじゃ？ そんなに思いつめた顔をするとは、随分と深刻な話のようじゃが」

そのことを聞こうと思ったら、そこに偶然通りかかった木下がやってくる。

「まあ、クラス設備にあまり興味のなかった島田がここまでやるのもおかしいと思ってたしな。理由を話せ。今後の話はそれからだ」

「うつ……。でも事情が事情だし……。けど、一応秘密の話だからね」

「ああ」

「うむ」

流石に俺も、人の秘密をペラペラ喋るなんて真似はしない。

「実は、瑞希なんだけど」

「姫路？　そう言えば今日は少し様子がおかしかったな」

率先して動いたり、お父さんを見返すとか。

「うん。実はあの子、転校するかもしれないの」

「……ふむ」

なるほど、姫路の転校ね。だが転校なんて覆せる事態じゃないだろ。

「だが、転校なんて親の都合何かがほとんどだろ？　どうしようもないだろ」

「島田よ。その姫路の転校と、さっきの話が全然つながらんのじゃが」

「そうでもないのよ。瑞希の転校は今の環境が原因なのよ」

「ってことは転校の理由は親の都合何かじゃなく……、」

「Fクラスの設備といったところか？」

この設備しかないだろう。競争意識を高めるという学園の考え方は否定しないが、既に高いレベルにいる姫路がこの処遇だ。さらに切磋琢磨しあう人間もこの環境にはいない。

どんな親でも文句の一つや二つは言いたくなるだろう。……現に俺の母親もそうだったし……。

「うん。それに瑞希は、体も弱いから」

設備の次は教室の環境か。こればかりどうしようもないな。学校の方針での設備だし。

「なるほどのう。じゃから喫茶店を成功させ、設備を向上させたいのじゃな」

「うん。瑞希も抵抗して『召喚大会で優勝して両親にFクラスを見直してもらおう』とか考えているみたいなんだけど、やっぱり設備をどうにかしないと」

Fクラスはバカの集まりだと思っているのはどうにでもなる。万が一の時は姫路以上の学力を持つ俺もいるしな。これだと一番の問題はFクラスの教室環境か……。

「とりあえず、あの悪知恵の働く代表様を焚きつけるとしようか」

「そうじゃな。ワシもクラスメートの転校と聞いては黙っておれん」

「ありがとう二人とも」

ポケットからケータイを取り出して、雄二の番号を呼び出す。後で島田の連絡先も聞いとくか。

『——もしもし』

「ああ、雄二。ちょっと話が——」

『明久か。丁度良かった。悪いが俺の鞆を後で届けに——げっ！
翔子！』

「え？ 雄二。今何してんの？」

『くそっ！ 見つかつちまった！ とにかく鞆を頼んだぞ！』

「雄二！？ もしもし、もしもーしー！」

どうやらリアルな鬼ごっこをエンジョイしてるような雰囲気だった。

「どうやら霧島翔子から逃げ回っておるのじゃろ。アレはああ見えて異性には滅法弱いからの」

木下もうんうんと頷いている。

「そうになると、坂本と連絡を取るの難しいわね」

確かに連絡を取るの難しいだろうけど——

「いや、これはチャンスだ」

「え？ どういうこと？」

「雄二の奴を引っ張りだすには丁度いい状況なんだ。あの野郎を連れ出してやる」

俺は携帯をパチンと閉じ、不敵に笑う。

「それはいいけど……坂本の居場所はわかっているの？」

「いや。まっ、悪知恵が働くのはアイツだけじゃねえってことだ」

「何か考えがあるようじゃな」

「まあな」

俺は二人と別れ、教室をあとにした。

「とりあえず、霧島の動きを封じないとな」

Aクラスに用事だつて言ってもそれくらいで霧島が雄二の追跡を止めるわけがないしな。

「声真似で良いかな」

絶対に必要のないスキルではある気がするが、俺は木下ほどではないが声帯模写ができる。ほんと、アメリカで色々なスキルを手に入れたものだ。今となつてはいい思い出だが……。

ちなみに今いるのは放送室。普通は鍵がかかって閉めてあるのだが、俺のピッキングの前ではそんな小細工は通用しない。

「さて、頑張りますかね」

そう言っ て俺はマイクを手を持った。

- side 雄二 -

くそっ！ 翔子の奴、何で俺の隠れている場所が分かるんだ！

『あー、マイクテス、マイクテス』

この声は…… 明久？ 何であいつが放送室に？

『それじゃ、頼むぞ雄二』

俺？ 何をするつもりだ明久。

『翔子。校舎裏で待ってるから急いで来てくれ。待ってるぞ！』

は？ これは正しく俺の声だ。アイツ、声真似なんかできたのか？

だがこれで、翔子の奴から逃げ切れる。流石だ明久！

明久の奴が翔子を新校舎に送ってくれたことだし、教室に戻ろう。

- side 明久 -

「そうか。姫路の転校か……」

教室に戻ってきたときにはすでに坂本も居た。霧島から逃げられたことが嬉しいのか満足げのような気もする。

どうやら二人が事情を説明してくれたらしい。

「そうになると、喫茶店の成功だけでは不十分だな」

ボロボロの教室を見渡して雄二が告げる。

「やっぱりな。流石に学園祭の利益ぐらいじゃ流石に教室環境の改修はできないしな」

「ああ。それに姫路の両親が転校を勧めた要因は恐らく三つ」

そう言って雄二は指を三本立てて見せた。

「まず一つ目。ござとみかん箱という貧相な設備。快適な学園環境ではない、という面だな。これは喫茶店が成功したら利益でなんとかできるだろう」

言いながら指を一本引つ込める。

「二つ目は、老朽化した教室。これは健康に害のある学習環境という面だ」

「一つ目は道具で、二つ目は教室自体ってこと？」

「そうだ。これに関しては明久の言った通り喫茶店の利益程度じゃ改善は難しい。教室自体の改修ともなると、学校側の協力が不可欠

だ」

机や椅子は買っただけだから俺たちにもできる。だが、教室自体の改修ともなると学園側の協力がなければできないこともたくさんある。たとえば業者の出入りや手続きなどだ。これは俺たちにできることではない。雄二はそう言いたいんだろう。

「そして最後の三つ目。レベルの低いクラスメート。つまり、姫路の成長を促すことのできない学習環境という面だ」

「それならアキが居るじゃない」

「確かに明久は姫路よりも高い学力を持っている。だけど流石に一人じゃ無理だろ？」

まあ、自分と同等なのが一人だけってのはつらいだろう。

「それじゃ、随分と問題だらけじゃのう……」

「いや、そうでもないさ。三つ目の方は既に姫路と島田で対策を練っているんだろう？」

そう言えば確か召喚大会に出るって言ってたな。それで優勝とはいかなくても決勝あたりまで行けば、Fクラスにもトップと渡り合える生徒がいるって証明できるな。

「この前、瑞希に頼まれちゃったしね。『どうしても転校したくないから協力して下さい』って。召喚大会なんて見世物にされるみたいで嫌だったけど、あそこまで必死に頼まれたら、ね？」

ふむ……。島田の評価を改める必要があるそうかな？

「翔子が参加するようだと優勝は厳しいが、アイツはこういった行事には無関心だしな。姫路と島田の優勝も充分ありえるだろう」

「そうだな。二人ならきつとなんとかなるよ」

「本当なら姫路抜きでFクラスの生徒が優勝するのが望ましいけどな」

「それは言いつこなしだ」

俺や雄二はともかく、他の奴らじゃ無理だろう。俺たちもあまり召喚大会に興味ないし。

「姫路と島田が優勝したら、喫茶店の宣伝にもなるじゃろうし、一石二鳥じゃな」

木下がうんうんと頷く。確かにその効果は絶大だろう。

「で、坂本。それはそうと、二つ目の問題はどうするの？」

二つ目の問題。教室の改修。これは俺たちだけじゃどうにもできない。

「どうするも何も、学園長に直訴したらいいだけだろ？」

さも当然、と言わんばかりの雄二の態度。

「だがこの学校のシステムを作ったのは学園長だし、あの人が俺た

ちの言うことを聞くとは思わないけど」

「あのな。ここは曲りなりにも教育機関だぞ？　いくら方針とは言え、生徒の健康に害を及ぼすような状態であるなら、改善要求は当然の権利だ」

確かに理論的には間違っではないけど……。

「まあ、行くだけ行ってみようか」

もしかしたら了承してくれるかもしれないし。

「そうだな。学園長室に乗り込むか。秀吉と島田は学園祭の準備計画でも考えておいてくれ。それと、鉄人を見かけたら俺たちは帰ったと言っても言っといてくれ」

学園長と担任の意見を通さずに交渉なんてしたことがばれたら、容赦なく鉄拳を食らうだろうし。

「うむ。了解じゃ。鉄人と、ついでに霧島翔子も見かけたらそう伝えておこう」

霧島の名前を出されて固まる雄二。さてはコイツ忘れてたな……。

「アキ、しっかりやってきなさいよ」

「オツケー。任せとけ」

二人に見送られ、俺たちは学園長室を目指して教室を後にした。

【Paradox 20】 複雑怪奇

- side 明久 -

『……賞品の……として隠し……』

『……こそ……勝手に……如月ハイランドに……』

新校舎の一角にある学園長室の前まで来ると、扉の向こうから誰かが言い争っている声が聞こえた。

「どうした、明久？」

「いや、中で何か話をしているようだが……」

「そうか。つまり中には学園長がいるということだな。無駄足にならなくて何よりだ。さっさと中に入るぞ」

取り込み中かどうかは向こうが判断するってことか。まあ用件だけは伝えようか。

「失礼しまーす！」

雄二が学園長室のドアを開き、ずかずかと中に入る俺達。

「本当に失礼なガキどもだねえ。普通は返事を待つもんだよ」

その中で俺たちを迎えたのは、藤堂カヲル学園長だ。俺に召喚獣のバグを押しつけた張本人であり、召喚獣システムを開発をしたの

もこの人だ。

「やれやれ。取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。しかも『ジャッジメントグループ』の御曹司とは……。これでは話を続けることもできません。……まさか、貴方の差し金ですか？」

眼鏡を弄りながら学園長を睨みつけるのは教頭の竹原。早く社会的に抹殺してやりたいほどウザい。

「馬鹿を言わないでおくれ。どうしてこのアタシがそんなセコい手を使わなきゃいけないのさ。負い目があるというわけでもないのに」

「それはどうだか。学園長は隠し事がお得意のようですから」

アンタもな竹原。俺知ってんだぜ、アンタが近所の私立校に出入りしてることを。

「さっきから言っているように隠し事なんて無いね。アンタの見当違いだよ」

「……そうですか。そこまで否定されるならこの場はそういうことにしておきましょう」

そう告げると竹原は教室の隅に一瞬視線を送り、

「それでは、この場は失礼させて頂きます」

踵を返して学園長室を出て行った。ポーカーフェイスは悪党の基本だぜ。顔がにやけててそこに隠してありますと言わんばかりの表情なんてしてたし、所詮は三下か。

「んで、ガキども。アンタらは何の用だい？」

「今日は学園長にお話があつてきました」

聞かれると学園長の前に立ち、雄二が話を切り出す。というか敬語を使えたのか。

「私は今そころじゃないんでね。学園の経営に関することなら、教頭の竹原に言いな。それと、まずは名前を名乗るのが社会の礼儀つてモンだ。覚えておきな」

学園長に礼儀を説かれたくなんか無いんだが……。まあ一応名乗つておくか。

「失礼しました学園長。俺はジャッジメントグループの御曹司の二年Fクラス、吉井明久。こっちはバカクラスの代表様だ」

ジャッジメントグループとは、今世界の企業の半分ほどを受け持つ超大企業である。如月グループや文月学園もこの会社の傘下である。ちなみに俺の父親の会社だったりする。

「おい明久。今、俺の説明が色々おかしかったぞ！？」

「ほう……。そうかい。アンタがFクラス代表の坂本かい」

「ちょっと待てくれ学園長！俺はまだ名前を言つてませんが！？」

雄二が学園長に抗議する。まあ、さっきのは面と向かってバカと言われたようなもんだからな。

後、雄二には家のことを話した。最初は驚いていたが、ハチャメチャな家族のことを話したらめっちゃ同情してくれた。その時の雄二の眼は何故か光が無かった。

「気が変わったよ。話を聞いてやろうじゃないか」

もともと妖怪のような学園長の顔がニヤリと笑い、閻魔大王のように見える。

「……ありがとうございます」

「礼なんか言う暇があったらさっさと話しな、ウスノロ」

「わかりました」

それにしてもこんなにも罵倒されてるのに、雄二の態度や言動は落ち着いたままだ。俺だったら殴り飛ばしてる。……あ、目に殺気がこもってる。

「Fクラスの設備について改善を要求してきました」

「そうかい。それは暇そうで羨ましいことだね」

「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みそのように穴だらけで、隙間風が吹き込んでくるような酷い設備です」

言動も綻び始めたぞ……。

「学園長のように戦国時代から生きている老いぼれならともかく、

今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われます」

ここぞと言わんばかりに学園長を罵倒し返す雄二。これは相当キレてるなあ。

「要するに、隙間風の吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直せクソババア、というワケです」

うん。やっぱりいつもの雄二だ。

そんな慇懃無礼な雄二の説明を受けて、学園長は何かを考え込む。

「……ふむ、丁度いいタイミングさね……」

小声で学園長がつぶやいた。丁度いいタイミング？ 何のことだ？

雄二には聞こえなかったらしい。

「よしよし。お前たちの言いたいことはよくわかった」

「え？ じゃあ、直してもらえるんですか？」

いくらこの人でも教育機関だし雄二の言った通りだったかな。良かった良かった。

「却下だね」

一瞬でも期待した俺がバカだった。

「雄二、このババアを宇宙空間に捨てよう。大丈夫、ロケットは父さんに言えばどうにでもなるから」

「……明久。もう少し態度には気を遣え」

しまった、つい本音が。……って言うかお前に言われたくない。

「まったく、この文月学園を圧力で潰せるほどの力を持つ会社の御曹司が失礼しました。どうか理由をお聞かせ願えますか、ババア」

「そうですね。教えて下さい、ババア」

流石だ雄二。この短時間でここまで人を罵倒できる人間もそうはいない。

「……お前たち、本当に聞かせてもらいたいと思っているのかい？」

学園長が冷や汗を垂らしながら俺たちを見る。何か変なことを言っただろうか？

「理由も何も、設備に差をつけるのはこの学園の教育方針だからね。ガタガタ抜かすんじゃないよ、なまっちろいガキども」

「そうですか。それじゃ」

「——と、いつもなら言ってるんだけどね」

俺が帰ろうとしていると、急に気が変わったらしく喋り始めた。

「可愛い生徒の頼みだ。こちらの頼みも聞くなり、相談に乗ってや

ろうじゃないか」

交換条件か……。ふと雄二の方を見るとコイツも何か考えているようだった。

「……その条件は何ですか？」

このままじゃ話が進まないため、俺は思考を中断し聞いてみる。

「そんな警戒するじゃないよ。清涼祭で行われる召喚大会は知っているかい？」

「ええ」

「じゃ、その優勝賞品は知ってるかい？」

「確か……腕輪だったか？」

ちらつとポスターを見たときにそんな事が書いてあった気がする。

「そうだね。正確には賞状とトロフィーとアンタの言った『白金の腕輪』、副賞には『如月ハイランド プレオープンプレミアムペアチケット』が用意してあるのさ」

随分と豪華なラインナップだ。後、ペアチケットと聞いて反応した雄二が気になった。

「それで、この副賞のペアチケットなんだけど、ちょっと良からぬ噂を聞いてね。できれば回収したいのさ」

「それなら賞品に出さなければいいんじゃないんですか？」

「そうできるならしてるんだけどね。正式に契約を行ってしまったから、今更覆すわけにはいかないんだよ」

まあ、恐らく学園長は忙しいから竹原の野郎が勝手に進めてしまつて引き返せなくなった、とかそんなところだろう。

「ふむ……。で、その良からぬ噂つてのは何ですか？」

つまらない内容なんだけどね、と前置きして学園長は口を開いた。

「如月グループは如月ハイランドに一つのジンクスを作ろうとしているのさ。『ここに訪れたカップルは幸せになれる』ってジンクスをね」

「だけど、それならいい話なんじゃないですか」

「どうやらそのジンクスを作る為に、プレミアムチケットを使ってやって来たカップルを結婚までコーディネートするつもりらしい。企業として、多少強引な手段を用いてもね」

「な、なんだと!？」

突然雄二が大声を上げる。

「どうした雄二。そんなに慌てて」

「慌てるに決まってるだろう！ 今ババアが言ったことは『プレオ―プンプレミアムチケットでやってきたカップルを如月グループの

力で強引に結婚させる』ってことだぞ!？」

「ああ、わかってるよ。だけどそれなら行かなければいい話だろう?」

「そうもいかねえんだ……。くそっ、うちの学校は何かと美人揃いだし、試験召喚システムという話題性もたっぷりだ。学生から結婚までいけばジंकスとしては申し分ないし、如月グループが目をつけるのも当然ってことか」

悔しげに唇を?む雄二。さっきから様子がおかしいな。

「ふむ。流石は神童と呼ばれていただけはあるね。頭の回転はまずまずじゃないか」

「……絶対にアイツは参加して、優勝を狙ってくる……。行けば結婚、行かなくても『約束を破ったから』と結婚……。俺の、将来は……!」

雄二の目が虚ろだ。……まさか霧島に『チケットが手に入るなら一緒に行ってやる』なんて安い請け合いでもしたのだろうか?

「ま、そんなワケで、本人の意思を無視して、うちの可愛い生徒の将来を決定しようって計画が気に入らないのさ」

本当に生徒を可愛いと思っているのかは疑問だが。

「つまり交換条件ってのは——」

「そうさね。『召喚大会の賞品』と交換。それができるなら、教室

の改修くらいしてやろうじゃないか」

「……俺たちが優勝したら、教室の改修だけではなく、清涼祭の利益での設備の導入も許可してもらえませんか？」

「その話なら既に西村先生から通っているよ。今回は特別に目を瞑ってやってもいい」

それなら利益は五分五分といったところだな。

……？ この何か引つかかる気持ちは何だ……？

「わかった。この話、引き受ける」

「そうかい。交渉成立だね」

「ただし、こちらからも提案がある」

「なんだい？ 言ってみな」

「召喚大会は二対二のタッグマッチ。形式はトーナメント制で、一回戦が数学だと二回戦は化学、といった具合に進めていくと聞いている」

タッグマッチって事は俺と雄二で組むことになるな。教科の変更は点数の消耗なしでやるためだろう。

「それがどうかしたのかい？」

「対戦表が決まったら、その教科の指定を俺にやらせてもらいたい」

そう告げる雄二の目つきは学園長を試すような感じだった。流石、腐っても神童ってことか。

「ふむ……。いいだろう。点数の水増しとかだったら一蹴してたけど、それくらいなら協力しようじゃないか」

「……ありがとうございます」

何……？　じゃあ俺達以外の協力者はいないのか？　こういう話
はなるべく大勢の協力者がいた方がいいのに……。

「さて。そこまで協力するんだ。当然召喚大会で、優勝できるんだろっね？」

「無論だ。俺達を誰だと思っている？」

雄二の不敵な笑み。これは試召戦争の時にも見せたやる気全開の表情だ。

学園長が言ってることはやっぱりおかしい。俺達なんか頼むよりは他の奴ら……たとえばAクラスの連中に協力してもらえばいいだけだ。それを何で……。

「……ああ。そっちこそ約束忘れるなよ」

……！　なるほど……俺達でなければいけない理由。そう言うことか。

「それじゃ、ボウズども。任せたよ」

「「「おうっ！」」」

こうして、文月学園の最底辺の最強コンビが誕生した。

雄二は教室に帰らせ、俺は学園長室に残った。

……おっ、あったあった。竹原の野郎が目を向けていた植木鉢の下に盗聴器が仕掛けてあった。

ボキッと破壊して学園長の机の上に置く。

「……これは!？」

学園長が声を上げたので俺は口の前で指を立てて『喋るな』というジェスチャーをする。学園長もすぐ理解したようで黙った。

俺は携帯を取り出し、カチカチと操作する。

《とりあえず、まだ他の盗聴器が仕掛けてあるかも知れないから携帯で会話しましょう。色々聞きたいこともありますし》

すると学園長も携帯を取り出し操作する。

《まったく。アンタはつくづく頭が回る奴だよ》

《何で俺たちに依頼した？ 確かに俺や雄二はそれなりに頭がいいが、もっと確実に優勝が可能な人間がいたはずだろ》

《はぁ……。あんたには嘘をつけそうにないね。アタシがアンタ達に勝ちとってほしいのは腕輪の方なのさ》

《確か『白金の腕輪』でしたっけ？》

《ああ。実はそれに欠陥があったのさ》

《その欠陥があるから俺達じゃないとだめだったというワケですか？》

《そうさ。点数があまり高くない坂本と、召喚獣にバグがあつて欠陥の効果を受け付けないアンタが適任なんだよ》

つまり、腕輪は高得点者が使うと暴走あたりを起こすわけっつか。まあ、常時暴走してる俺の召喚獣には効果がないってことか。むしろ欠陥同士が相殺するんじゃないのか？

《そう言うことなら協力する。黒幕もわかってるしな》

《頼むよ。アンタらが頼りだ》

《ああ。任せとけ》

【A cool festival will be! so on.】

【Paradox '20】 複雑怪奇（後書き）

急いで書いたので色々酷いところがあると思います。

間違いなどがあつたら指摘下さい。

感想待ってます！

【Paradox 21】 獅子奮迅

- side 明久 -

「……………やっぱり雄二の統率力は凄い」

「まったくだ。いつもはただの馬鹿なのにな」

清涼祭初日の朝。

俺達の教室はあの小汚い有様を一新して、中華風の喫茶店に姿を変えていた。

「あー……。それにしても凄いな。テーブルなんてパツと見は本物と区別がつかないぞ」

「……………秀吉がやってくれた」

教室に設置されているテーブル。ミカン箱を重ねて小奇麗なクロスをかけて立派なテーブルと化していた。

ちなみに俺と土屋は厨房の下準備をしている。

「……………明久は何作ってるの？」

「ん？ ああ、時間がなくて朝飯を食わなかったからな。さっき食堂に忍び込んでさ。食材をパクッ——譲って貰って炒飯をな」

ふう……。俺がただの泥棒になるところだったぜ。

「……………少し頂戴」

「ああ、いいよ」

そう言って小皿に炒飯という名の焼きご飯チャンプルをよそう。

「……………凄い。何でこんなにパラパラなの？」

「ああ、これはな——」

——吉井明久の料理教室——

「……………ありがとう。明久のおかげで料理の幅が広がった」

「おお。ちょっと食わせて」

「……………（コクコク）」

俺がアドバイスして土屋が作った胡麻団子を口に放り込む。……うん。さっきよりずっと美味しくなった。ちなみに最初は炒飯だけだったのだが、他にも色々教えることになった。

「凄く美味くなったぞ土屋。あいつらにも味見して貰ったら？」

「……………（コクリ）」

そう頷き土屋は姫路たちのところに行く。

それにしても雄二の奴遅いな。まあ召喚大会はまだだからいいけど。

適等に設備の点検を行ってたら土屋が戻ってきた。

「どうだった土屋？」

「……………凄く好評だった。…………あと俺のことは名前で呼んでほしい。秀吉も『雄二の奴だけずるいのじゃ！』って言っていたし、何より俺自身がお前ともっと親しくになりたい」

そうか…………、雄二の時も結構恥ずかしかったんだけどな。でも木下も土屋を信用できるし、いいかな。

「わかったよ。これからもよろしくな康太」

そう言っただけ俺は手を差し出す。まあ、握手をしようって事だ。

「……………よろしく」

土屋も俺の手を握り返してくる。基本こいつらはいいい奴なんだよな。…………今度は…………、守れるかな…………？

「うーっす。戻ってきたぞ！」

と、そんなところで雄二が戻ってきた。

「おかえり雄二」

「……………おかえり」

そして俺達のいる厨房の方にやってくる。

「お、美味そうじゃないか。貰うぞ」

「……………（コクコク）」

あれ？ さつき土屋——改め、康太が作った奴はあいつらが全部食べたよな？ じゃあ雄二のは誰が……。

「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとっても——んゴパツっ！」

「雄二イイイイいいい！！」

その胡麻団子を食べた雄二がいきなり倒れた。こ、これはまさか姫路がッ……………！

「……………！！（グイグイ）」

康太が必死に心臓マッサージをする。

「おい、雄二！ 大丈夫か！？」

「ふっ。何の問題も無い」

良かった、雄二は無事みたいだ。……………目の焦点があってないのが不安だが。

「あの川を渡ればいいんだろう」

「その川は三途の川だ！ カムバック雄二！」

全然無事じゃなかった。既に生死の境をさ迷っていた。

「六万だと？ バカを言え。普通渡し賃は六文と相場が決まって――はっ！？」

「……良かった。これで尊い命が救われた」

「……………（コクコク）」

黄泉の送り人がぼったくりをしてくれたおかげで雄二が救われた。

「何だったんだ……、今のビジョンは……」

「……深くは考えない方がいい……」

「……………（コクコク）」

胡麻団子（という名のバイオ兵器）で臨死体験なんて忘れていた方がいい。

「それにしても雄二、教科の選択は終わったのか？」

とりあえず強引に話を逸らす。

「ああ。一回戦は数学だ」

「そうか。じゃあそろそろ準備をしますかね」

「おう」

俺達は机を拭いたりする。まあ、少しは手伝わないとな。

「む？ 雄二は帰っておったのか？」

「ああ、ちよつと話し合いにな」

雄二は秀吉の質問を適等に誤魔化す。

まあ、学園長に教科指定の話は秘密にしろって言われている。黒幕のことは学園長と俺のトップシークレットってことだから雄二にも話せないがな。

営業妨害とか無ければいいが……。

「それで、そっちの方は大丈夫か？」

「バッチリじゃ」

「……………お茶と飲茶も完璧」

本当に完璧なんだろうか？ 姫路製のバイオ兵器が混ざっていないか一抹の不安がよぎるんだが……。

「よし。少しの間、喫茶店は秀吉とムツツリー二任せる。俺は明久と召喚大会の一回戦を済ませてくるからな」

「頼むぜ。秀吉、康太」

「……………（コクリ）」

「ふえっ／＼／ お主、今名前で……………」

秀吉の顔が一気に赤くなる。あれ、怒らせたか？ でも康太はグツとサムズアップしてるし。

「あれ？ アンタたちも召喚大会に出るの？」

近くにいた島田が確認するように俺たちに声をかける。

「ああ。まあ色々あってな」

適等に言葉を濁す。チケットや腕輪の裏事情は秘密だしな。まあ、このことが広まったら学園の存続の危機に発展するしな。

「もしかして、賞品が目的とか…………？」

「うゝん。雄二が自分の未来を手にするためにどうしても手に入れたらしい」

嘘は言っていない。

「何それ？」

島田は理解できないようだ、…………俺もわからん。

「自分が生きるためには悪にならなくちゃいけない時もあるんだ。

な、雄二」

「あ、ああ……。俺は生き延びる……」

雄二は震え始めた。とことん霧島に弱いな。

「つと、そろそろ時間だ。行くぞ雄二」

「あ、ああ……」

……大丈夫か、これで……。

「えー。それでは、試験召喚大会一回戦を始めます」

校庭に作られた巨大の特設ステージ。そこで召喚大会が開催される。

「三回戦までは一般公開ありませんので、リラックスして全力を出してください」

今回の立会人は数学の木内先生。当然教科は数学になる。

「頑張ろっね、律子」

「うん」

対戦相手の二人は康太の情報によるとBクラスの女子二人。まあ、負けは無いだろ。

「では召喚してください」

そして、木内先生が召喚フィールドを展開する。

「「^{サモン}試獣召喚っ！」」

相手の二人の召喚獣は西洋風の鎧に剣というベーシックな装備だ。

『Bクラス 岩下律子 & Bクラス 菊入真由美

数学 179点 & 163点 』

「流石はBクラスってとこかな。それなりの点数だ」

「ああ。だが俺達の敵じゃないだろ」

「「^{サモン}試獣召喚」」

現れる俺達の召喚獣。俺の召喚獣の初期装備は紫の炎を放つ妖刀に、大量の武器が隠してある改造学ランだ。

一方、過去に神童とまで言われた我らが代表様の召喚獣は――

「……素手？」

武器を何も持っていないように見える。俺と同じように改造学ランの中に隠してあるとか？

「明久。よく見る」

雄二が召喚獣を動かし、拳を掲げる。

「メリケンサックを装備しているだろう?」

「なんでだ!??」

他にそんな装備の奴なんかいなかったぞ。武器がメリケンサックだなんて……大丈夫なのか?

「行くわよ、オカルト&闇ルートコンビ」

「律子、違うよ。チンピラコンビだよ」

俺達の召喚獣は改造学ランに、妖刀&メリケンサックコンビだ。もはや何を言われても反論できない……。

「随分と好き勝手言ってくれるなBクラスコンビ」

「事実だから否定できねエけどなア……」

そして俺達の召喚獣の点数も表示される。

『Fクラス 坂本雄二 & Fクラス 吉井明久

数学 192点 & 465点 』

「お、雄二の点数、随分上がってンじゃねエか」

Bクラスで上位を狙えるくらいの点数に成長してた。これまでの勉強会の成果かな。

「お前は下がってんじゃねえか……」

「悪い、夜中までゲームやってた」

「おい！」

実は今日、午前3時ぐらいまでゲームをやっていた。飯を食えなかったのもコレが原因だったりする。

「な、何でそんな点数でFクラスなのよ！」

対戦相手の女子が随分と驚いてらっしゃる。

「よし、明久。例の作戦で行くぞ」

「了解」

作戦開始の合図をする雄二。そう、俺達の作戦は――

「一人一殺で、真っ向勝負じゃアアアア！！」

一対一を作ること。試験召喚戦争で召喚したことがない雄二を操作に慣らせるため相手のコンビを引き離し、倒す。

「きゃあっ！」

俺の召喚獣が振り下ろした妖刀を……たしか律子だっけ？ が剣で受け止める。

だが……、

「え！？ 何で剣が碎けるのよ！」

この点数差だ。鏢迫り合いを起こし、相手の剣が碎ける。まあ、相手は操作に慣れてないようだし細かい動きはできないだろう。

「ッは！ ほらほらほらアッ！！」

妖刀で相手の鎧を攻撃する。流石は上位クラスと言うべきか装備が頑丈だ……。だが、

「おらアアアッ！」

相手の召喚獣の腕を強引に掴み、高く投げ飛ばす。

「空中で防御は取れねエだろ！ 換装、雷電の槍！ くらえエッ！」

そのまま武器を取り出し相手に向かって蹴りあげる。雷を纏う槍は空中で相手の召喚獣を鎧ごと突き刺し相手の召喚獣を倒した。

『Bクラス 岩下律子 VS Fクラス 吉井明久

数学 0点 VS 421点

』

よし、雄二の方は！

「ふはははは！ 無駄無駄無駄あっ！」

「きゃああああ！」

「とどめっ！」

雄二の召喚獣の拳が相手の腹にヒット。決まったな。

『Bクラス 菊入真由美 VS Fクラス 坂本雄二』

数学 0点 VS 121点

『

「……勝者、坂本・吉井ペア」

凄く不満そうに木内先生が告げる。まあ、傍から見たら今のはなかなか教育的に悪いだろう。

「まずは一勝だな、明久」

「そうだな。とりあえず教室に戻ろう」

「ああ」

何も起きてなけりゃいいんだけど……。

【Paradox 22】 妨害工作

- side 明久 -

「明久に雄二。急いで教室に来てくれんかの？」

教室へ戻っていると秀吉がこっちにやってくる。少し息が上がっているようで、急いでいるみたいだ。

「何かあったのか？」

「うむ。少々面倒な客がおつての。すまぬが話は歩きながらで頼む」

「了解」

先を急ぐ秀吉に俺と雄二がついていく。ついにきやがったな。

「……営業妨害か？」

雄二も目を細める。とりあえずはそいつ等をシバくか。

「うむ」

「相手はどいつだ？」

「うちの学校の三年じゃな」

三年の奴らか……。まず間違いなく竹原側の人間だな……。

「よし、とりあえずそいつ等は俺が交渉する必要があるそうだな」

どんな交渉をするつもりなんだ……。

すると廊下に聞こえるくらい鬱陶しい声が聞こえてきた。

「む。あの連中じゃな」

「じゃ、ちよつくら始末してやるか」

今、始末って言ったよな……。ま、雄二はこういうことは滅法強いから大丈夫だろう。

「マジできつたねえ机だな！　これで食い物扱っていいのかよ！」

雄二が扉を開けるなり耳に飛び込んできた罵声。どうやらミカン箱がお気に召さなかったらしい。……ふむ、あいつらは画板が良かったのかな？

「うわ……確かに酷いな……」

「クロスで誤魔化してたみたいね」

「学園祭とは言っても、一応食べ物のお店なのに……」

その様子を見た他の客が口々に呟く。こういった噂は広まりやすいから早めになんとかしないと。

「どうする雄二。俺達で交渉（という名の処刑）をするか？」

「そうだな……。秀吉、ちょっと来てくれ」

「？ なんじゃ？」

雄二が秀吉に耳打ちする。秀吉つて事は演劇用の小道具つて所か？

「一応用意はできるが……。あっても二つ程度じゃぞ？」

「それで充分だ。その後はまた他から調達してくるさ」

「了解じゃ。すぐに戻る」

そう言い残して、秀吉は何人かのクラスメートを連れて教室を去る。

「明久。お前はあいつらの写真でも撮っておけ。後、テーブルのある教室を調べておいてくれ」

「あ、ああ……。？ とりあえず了解」

携帯を取り出して、ピローンピローンと写真を撮る。クレイジーなクレイマーは2人組で、一人は中肉中背の一般的な体格にモヒカンという非一般的な髪形をしてる。もう一方も同じくらいの体格に丸坊主だ。

そんなクレイジー共のもとにのっしのっしと代表様は近づく。

「まったく、責任者はいないのか！ このクラスの代表ゴペツ！」

「私が代表の坂本雄二です。何かご不満な点でも御座いましたか？」

そして、坊主頭が殴り飛ばされる。そして雄二は模範的な責任者のように対応する。

「おっと、こうしちゃいられない。俺も自分の仕事をこなそう」

誰のかは知らんが勝手にパンフをパラパラとめくる俺。……ここからだと思接室と休憩室が近いかな。

雄二の方を見ると坊主頭の前輩にバックドロップをお見舞いしていた。流石、強いもんだ。

「お、覚えてろよっ！」

倒れた相棒を抱えて去っていくモヒカン先輩。これでなんとかかな。

『流石にこれじゃ、食っていく気はしないな』

『折角美味しそうだったんだけどね』

『食ったら腹壊しそうだからなあ』

——というわけにはいかなかった。

一人目の人が席を立つと、どんどんそれが伝染していく。

『店、変えるか』

『そうしようか』

次々とお客さんが席を立つ。集団心理って奴か。あの野郎……、俺達の妨害をして潰そうとでも考えてやがるな……。

「失礼しました。こちらの手違いでテーブルの到着が遅れていたの
で、暫定的にこのような物を使ってしまいました。ですが、たった
今本物のテーブルが届きましたのでご安心下さい」

そんなお客さんに頭を下げる雄二。その後ろには、秀吉や他に男
子数名が立派なテーブルを運んできた。

……演劇部の大道具のテーブルか。なるほどな、コレならお客さ
んの前で衛生面の改善の姿を見せることができる。雄二も風評につ
いて考えているようだ。

「あれ？ テーブルを入れ替えてるの？」

「あ、おかえり。島田に姫路。1回戦はどうだった？」

「はいっ。なんとか勝てました」

姫路がVサイン。今回は負けるわけにはいかないしな。勝ちにこ
だわるのは当然だろう。

「そんなことより、テーブルを入れ替えちゃってもいいの？ 演劇
部にあるテーブルなんて、そこまで多くはないはずでしょう？」

「さっきクレイマーでちよつとな……、まあ雄二のことだしそこら
へんにも知恵が回るだろう」

悪知恵が、な。

「それでは、他のテーブルも届き次第順次入れ替えさせていただきますので、ご利用中のお客様はひとまずこちらのテーブルにお移りの上、ごゆっくりとおくつろぎ下さい」

仕事を終わらせ、雄二が俺達のいる廊下まで戻ってきた。

「ふう。こんなところか」

慣れない敬語で疲れたのか、雄二が小さく息を吐く。

「お疲れ、雄二」

「何があつたのかは詳しく知らないけど、お疲れ様」

「お疲れ様です」

「おう。姫路に島田か。その様子だと勝ったみたいだな」

一回戦の教科は数学だったしな。こいつらの勝ちは確実だろう。

「一応ね。それより、喫茶店は大丈夫なの？」

さっきの騒動でお客は減ってしまったし、悪評も流れるだろう。

「このまま何も妨害が何もなければ問題ないな」

恐らくあいつらは妨害を続けるだろう。バックドロップまでくらってたから大丈夫かな？

「あの、持ってくるテーブルは足りるんですか？」

「ああ、それか。そうだな……。明久、2回戦まではあとのくらい時間がある？」

「開始は十一時。だから小一時間つてところだ」

「そうか。それならさっさと行くぞ。明久、ついて来い」

「は？ 行くつて——ああ、なるほど」

こんなことやってたら悪評が広がるだろうけど、もうたくさんあるしこの際どうでもいいや。

「ウチらは手伝わなくてもいいの？」

「お前らは喫茶店でウェイトレスをやっていてくれ。落ちた評判を取り戻す為に、笑顔で愛想よく、な」

「はいっ！ 頑張りますっ！」

こちらもやる気十分だな。俺達も殺る気十分だ。

「じゃ、行こうか雄二」

「ああ。明久」

俺達は小さく笑みを浮かべる。

「「テーブル調達の時間だ！」」

「吉井君に坂本君！ 待ちなさい！」

「明久、走れ！ 捕まったらありがたい先生方の鉄拳が待ってるぞ！」

「わーってるよ代表様！」

布施先生に追われながら、俺と雄二は必死に廊下を走っていた。

「折角パクったテーブルだ！ 落として壊すなよ！」

「代表様こそ、へますんなよ！」

なぜなら、応接室からテーブルを盗んだからだ。

「それにしても、どうして、テーブルを背負って、そんなに速く、走れるんですか……」

長谷川先生はどうやら運動があまり得意ではないらしい。俺達はワケありでそこらの奴らとは鍛え方が違うしな。それに……、

「一旦喫茶店で使用してしまえばこっちのモンだ！ 一般人が使用中のテーブルを回収なんて真似はできないだろうしな！」

「その通りだ明久！ それにその辺の先公じゃ俺達には追いつけないだろうしな！！」

つくづく雄二とはこういうことでは気が合うな。

「こうなったら、西村先生に応援を——」

ゲッ！ 西村先生から逃げ切るのは俺達でも無理だぞ！

「明久！」

雄二が自分の上履きを俺に向かって蹴りあげる。ナイスッ！

「くらえッ！」

「うわっ！」

そして俺が蹴った上履きは布施先生の手元に命中。携帯はカランカランと音を立てて地面を転がる。

「それでは御機嫌よう、先生方！」

「Moreover, I will play! (また遊ぼうぜ！)」

布施先生が携帯を拾っている隙に全力で逃げる。姿が見えなくなったところで秀吉に置き場所を教えて、俺達はその場を去る。

「よし。次は職員室そばの休憩室だったな！ それが終わったら二回戦だ！」

「了解！」

こうして俺達が学園内をテーブル泥棒として駆け回ったおかげで、
テーブルの目標数の確保ができた。これなら喫茶店の方は大丈夫だ
ろう。

「で、二回戦の相手はどんな連中だ？」

特設ステージに向かいながら、隣を歩く雄二に尋ねる。

時間ギリギリまでテーブル泥棒をやっていた俺達はそんな確認を
していない。

「対戦表を見た限りだと、勝ちあがってきそうなのは——お、予
想通りだ」

対戦相手はマッシュルーム頭のカスと、ヒステリックなCクラス
代表だった。

「あれ？ 誰かと思えばBクラスとCクラスの小物代表コンビじゃ
ないか？」

「坂本に……、よ、よよよ……吉井ッ！ お前らが相手か！」

俺達を見て顔が恐怖に歪んでるのはBクラス代表の三下。どうや

ら俺がフルボッコにしたらしい。

そしてCクラスのヒステリック代表。

「どうしたの根本君。Fクラスのバカコンビが相手なんだから、この勝負は貰ったようなものじゃない」

俺達の点数を知らないのか？ まあ、Fクラスだから楽勝だろうと踏んだのか？

「それでは、試験召喚大会二回戦を始めてください」

今回の立会人の先生は一年の頃、荒れていた俺の面倒をよく見てくれた英語担当の遠藤先生。一年の頃は教室に行かなかったから、カウセリング登校のようなものだったんだよな。英語はこの人が色々教えてくれたから得意だ。

「……試験^{サモン}召喚！」「……」

『Bクラス 根本恭二 & Cクラス 小山友香

英語W 199点 & 165点 』

『Fクラス 坂本雄二 & Fクラス 吉井明久

英語W 183点 & 679点 』

雄二は勉強会の最初の方は酷い点数だったけど、ここまで点数を上げた。流石は神童って所か。……まあ、隣にいる俺が異常な点数

だから見劣りするけど……。

小物共は随分と小物に似合う噛ませ臭の漂う顔をして驚いてる。

遠藤先生も随分驚いてくれる。嬉しい限りだ。俺が堕ちるとこまで堕ちなかったのはアンタのおかげだな。

「コレならこの大量虐殺写真集を使わなくてもいいかな」

隣の相棒を見ると何やら嫌な予感の漂う品を持っていた。

「……何だそれ……？」

「実はお前が倒れた後に根本の女装撮影会が行われたんだ。これはムツツリーニが撮影、編集をしたその時の奇跡（ゲロ的な意味で）の逸品だ」

「……これは酷い……」

チラッと中身を見せてもらったが、これ以上は見ない方がいいだろう。

「まあ、俺はもう少し召喚獣の操作に慣れたかったしな。明久はそっちのクズを頼めるか？」

「OK。雄二はそっちのヒステリックを頼むよ」

「おお」

相手のヒステリックが何やら言っていたがあえて無視した。

「さて、久しぶりだね。根本くウン？」

「よ、吉井……。……はっ、あの時の復讐をさせてもらっぜッ！」

そう言って根本の召喚獣は俺の召喚獣に突っ込んでくる。だけど、

「ああ。そういえば言い忘れてたんだけど――」

「うおおおおおっ！」

「――そこ、地雷原だぜ？」

「はっ？」

根本の召喚獣が俺の召喚獣を攻撃する――直前にその周りが爆発する。実は召喚した時に周りに大量の地雷をセットしておいたのだッ！

ドカーンとフィールドが爆発、根本が立っているステージも爆発、俺の背後も爆発。

「はーッはははっ！ 芸術は爆発だア！」

やべエ。テンションが上がってきた。実はさらに俺の背後と根本の足元にも小型爆弾を（演出のため）設置しておいたのだ！

え？ そんな大量の武器がどこから出るのかって？ それはもちろん俺の召喚獣の万能改造学ランからだ！

ちなみに彼は爆弾をサッカーボールのように飛ばしました。足元は召喚時に学ランから滑り出すようになめらかにセット

流石に物理干渉はOFFにしてるゾ

『Bクラス 根本恭二 VS Fクラス 吉井明久

英語W 0点 595点 』

「よし明久。復讐返しは終わったようだな」

「アレ？ 雄二そっちは？」

『Cクラス 小山友香 VS Fクラス 坂本雄二

英語W 12点 VS 143点 』

「おおウ……。随分と点数が低いねエ？ ヒステリック代表？」

ヒステリックは悔しげに下唇を噛む。どうやら雄二にフルボッコにされたらしい。

「よし……。さて、そのヒステリック。これを見る！」

雄二はさっきの根本恭二個人写真集を巨大ディスプレイでヒステリックに見せる。

「そ、それは……！」

根本の表情が凍る。

召喚獣勝負で爆弾地獄を浴びせ、リアルでも絶望を。まあこれが小物の末路って所か。

「この続きを見たかったら棄権しな。じゃなきゃ召喚獣を倒す」

ワオ。これは見事な脅迫だ。

「さ、坂本！ わかった！ 降参する！ だからその写真だけは……！」

「明久、根本を押さえる」

「了解」

根本を柔道で言う抑え込み技で押さえる。

「よしよし。さて、ヒステリック代表。この写真集が見たかったら俺たちに負けるんだ」

「坂本、吉井っ！ お前らは鬼か!？」

根本が泣きそうになる。……男泣きつて気持ち悪いな。

「明久、男泣きが気持ち悪いワケじゃなくて根本が気持ち悪いんだ」

「そっか」

まあ、その通りだろう。

「……いいわ。私たちの負けよ」

「交渉成立、だな」

かくして、写真集はヒステリックのもとに渡ることとなった。

「ゆ、友香！？ 頼む！ 見ないでくれ！」

根本の懇願も虚しく、ヒステリックは写真集をマジマジと観ている。

「まあ、当然の末路だろうな」

「ンじゃ、後はバカップルどもに任せて帰るか。じゃ、遠藤先生。俺達の勝ちということで」

脇から写真集を覗いてる遠藤先生にウィンクをして告げる。

「あ、はい！ 坂本君と吉井君の勝利です！」

正式に勝ち名乗りも受けたし、三回戦進出決定だ。良かった良かった。

『……別れましょう』

『ちょ、ちょっと待ってくれ！ これには事情が……！』

良かった良かった。

【Paradox '22】 妨害工作（後書き）

今更ですが、書いてて根本君に少し同情しました。

まあ、小物だからどうでもいいか、という思いもありましたが……。

根本ファンの人はすいません！ 感想待ってます！

【Paradox 23】 不協和音

- side 明久 -

「ただいまーっと……、やっぱり客がいねえなあ……」

テーブルが綺麗になったのにも関わらず、喫茶店内にはお客さんは殆どいなかった。

……外から妨害をしてるのか……。いやらしい連中め……。

「お、戻ってきたようじゃの」

その分仕事が無いようで、ウェイトレス役の秀吉も暇そうだった。

「無事勝ってきたぜ。まあ小物程度に負けるほど俺も雄二も弱くないしな」

「それは何よりじゃ。ところで、雄二の姿が見えんが？」

「トイレに寄っていったぞ。暢気なもんだ」

もしかしたら霧島から見つからないように身を隠すためか？

「それより秀吉、あれから変な客は来てねえか？」

「……むう。ワシはずっとここにいるが、あれ以来妙な客は来ておらんぞ？」

秀吉が首を傾げる。となるとやっぱり妨害は外か。

「教室の外か、探すのが面倒だな……」

「そうじゃのう……」

そうやって二人で考え込んでいると、

『お兄さん、すみませんです』

『いや。気にするな、チビッ子』

『チビッ子じゃなくて葉月ですっ』

雄二と知らない女の子の声が聞こえてきた。

「雄二が戻ってきたようじゃな」

「そうみたいだな」

とりあえず康太の手伝いでもしようかな。厨房なら仕事があるだろうし。

『んで、探しているのはどんなヤツなんだ？』

雄二が教室の扉を開けて入ってきた。女の子の姿は雄二の陰にあり見えない。

『お、坂本。妹か？』

『可愛い子だな。ねえ、五年後にお兄さんと付き合わない？』

『俺はむしろ、今だからこそ付き合いたいなあ』

二人はあつという間にクラスの野郎どもに囲まれてしまった。まあ、客がいなくて暇なのはわかるけど最後の奴は自重しろ。

『あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探しているんですっ』

どうやら人探して声を雄二にかけたようだ。雄二はなんだかんだ言って面倒見がいいしな。

『お兄ちゃん？ 名前はなんて言うんだ？』

『あう……。わからないです……。』

『？ 家族の兄じゃないのか？ それなら、何か特徴は？』

名前が分からないヤツでも探してやろうとする雄二の気遣いが感じられる。だけどFクラスで妹がいる奴なんて処刑されてるんじゃない？

『えっと……お姉ちゃんに聞いた話だと……、頭がいいお兄ちゃんですっ！』

『『俺か！？』』』

ホント息びつたりだな。そんなんだからバカって言われるんだ……。

『明久、ご指名だぞ』

そんな雄二の声。俺に子供の知り合いなんていたかな？

「へいへいっと、君は誰？ 人違いかなんかじゃないの？」

Fクラスの連中の所に行き顔をその子の視点に合わせるように屈んで、女の子の顔を見る。そこには髪をツインテールにした小学生と思われる女の子がいた。

「お姉ちゃんとお話のときによく出てくるお兄ちゃんに会いに来たですっ！ お兄ちゃんがお兄ちゃんなんですか？」

うーん？ いまいち何を言ってるのが理解できないぞ？ とりあえずまとめてみよう。

？、小物&ヒステリックコンビ粉砕

？、教室に帰宅。雄二はトイレへ

？、雄二が教室に帰宅。女の子登場

？、「頭がいいお兄ちゃんを探してるですっ！」「ご指名だぞ、明久」

？、Q 君は誰？

？、A お兄ちゃんがお兄ちゃん何ですか？ ↑今ここ

……さっぱりわからん……。

とりあえずこの子の姉の名前を……。

「ただいまですっ」

「あれ？ 葉月？」

「姫路に島田か。どうやら勝ったようだな」

と、そこへ島田と姫路が帰宅。

「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよっ！」

ん？ お姉ちゃん？

「島田。この子はお前の妹なのか？」

「この子じゃなくて葉月ですっ」

「ああ、ゴメンゴメン。で、葉月ちゃんはお前の妹なの？」

よく見てみると確かに似ている……。雰囲気とか、目とか。

「うん。アキは葉月と知り合いなの？」

「いや、お姉ちゃんがいつも喋ってる人が葉月ちゃんにとってお兄ちゃんです。それが俺だからお兄ちゃんらしい。お前なんか知ってるか？」

「えー！？ いや何でもないの！ ……葉月そのことは言わないでっ
て言っただじゃん！……」

どうしたんだ？ アイツ。

「明久君はズルいです……。どうして美波ちゃんとは家族ぐるみの付き合い何ですか？ 私はまだ両親にも会ってもらってないのに……。もしかして、実はもう『お義兄ちゃん』になっちゃってたり……」

こっちもどうしたんだ？ コイツもたまに壊れるな。まあ性格がぶつ壊れる俺が言えたことじゃないが……。

「あ、あの時の綺麗なお姉ちゃん！ めいぐるみありがとうでしたっ！」

礼儀正しくていいな。学園長（父さんの会社の取引先のババア）とは大違いだ。

「こんにちは、葉月ちゃん。あの子、可愛がってくれてる？」

「はいですっ！ 毎日一緒に寝てます！」

姫路は葉月ちゃんにぬいぐるみをプレゼントしたのか？ 島田とは姉妹らしいし、その関係で仲良くなったのか？

「良かった。気にいってくれたんだ」

ホントに俺の周りは面倒見のいい奴が多いな。

「ところで、この客の少なさはどういうことだ？」

……確かにこんなに長く立ち話をしても全然客が入ってこなかったな。

「そういえば葉月、ここに来る途中で色々な話を聞いたよ？」

「ん？ どんな話だ？」

「えっとね、中華喫茶は汚いから行かない方がいい、って」

どうやら本当に妨害が続いているようだ。

「例の常夏コンビの連中が続いているようだな」

「ああ、探し出してシバき倒すか。……って雄二。常夏コンビって？」

「常川先輩と夏村先輩のクソコンビだから略して常夏コンビ」

「なるほど」

あのモヒカンと坊主のここのようだ。それにしても上手いネーミングだな。

「とりあえず様子を見に行く必要があるかな」

「そうだな。少なくとも、噂がどこから流れてるか確認するか」

こんな小さい子でも聞けるくらいだ。かなりの勢いで広まってるかもしれない。

「葉月ちゃん、さっきの話はどこで聞いたんだ？」

「えつとですね……短いスカートを穿いた綺麗なお姉さんが一杯いるお店——」

「なんだって！？ 雄二、それはすぐに向かわないと！」

「そうだな明久！ 我がクラスの成功のために、（……低いアングルから……）綿密に調査しないと！」

適等に悪ノリをすると雄二が乗ってきた。まあ思春期だもんなコイツも。

あと、俺達の横を駆けていた康太の姿が気になった。

【Paradox '24】 泰然自若（前書き）

何故か消えてしまったので再upします。

【Paradox 24】 泰然自若

- side 明久 -

「明久、ここはやめよう」

「ここまで来て言うのか……、早く入るぞ」

「頼む！ ここだけは、Aクラスだけは勘弁してくれ！」

俺達の目的地はAクラスの【メイド喫茶 『ご主人さまとお呼び！』】という名前が存在していた。

【中華喫茶 『ヨーロッパアン』】の俺達と言えたことじゃないが
もつと良い名前があるんじゃない？

「そっか。ここって坂本の大好きな霧島さんのいるクラスだもんね」

「坂本君、女の子から逃げ回るなんてダメですよ？」

そんなこんなやってるうちに女子も追いついたみたいだ。

「……………！！（パシャパシャパシャパシャ！）」

ふと隣を見ると、指が擦り切れんばかりにシャッターを切っている男が一人。

「……………康太？」

「……………人違い」

カメラを片手に否定のポーズを取る厨房責任者のクラスメート。

「どこからどう見ても土屋でしょうが。アンタ何してるの？」

「……………敵情視察」

お前の敵情視察はローアングルで女子生徒を撮影することなのか？

「康太、盗撮とかはダメだろ。男なら堂々と撮影してやれ」

「……………わかった」

「それで納得する方もどうかと思うんだけど」

「……………そろそろ当番だから戻る」

康太は教室の方に去って行った。そもそも俺たちがAクラスに向かうことがあの会話だけでわかったんだろうか……………？ そうだとしたらつくづく底の知れない男だ。

「それじゃ中に入るか」

「そうねそれじゃ、お邪魔しまーす」

島田が1番手でドアをくぐる。

「……………おかえりなさいませ、お嬢様」

出迎えてくれたのはクールで知的な雄二の嫁（？）の霧島だった。

「わぁ、綺麗……」

姫路が感漢の声を洩らす。確かに霧島は同性愛者説が立つほどモテてもおかしくないくらい美人だった。

俺じゃなかったら雄二を殺そうとしているだろう。

「それじゃ、俺たちも」

「はい。失礼します」

「お姉さん、きれー！」

姫路と葉月ちゃんを連れて中に入る。すると、

「……おかえりなさいませ、ご主人様にお嬢様」

そう言って迎えてくれた。

「……チッ」

雄二も嫌々ながらしぶしぶ入店してくる。霧島は同じように、

「……お帰りなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

大胆にアレンジされていた。きっと夫婦の営みをするのだろう。

「霧島さん、大胆です……！」

「ウチも見習わないとね……」

「あのお姉さん、寝ないで遊ぶのかな？」

3者3様のリアクション。島田は何を見習うのかが気になるところだ。

「……お席にご案内します」

霧島が歩きだしたので、俺達もその後をついていく。

「ね、お兄ちゃん。凄いお客さんの数だね」

葉月ちゃんがぐいぐいと俺の袖を引っ張る。……随分と懷かれたもんだ。

「たしかにね、女性客も多いみたいだし」

葉月ちゃんの言う通り、席はほぼ満席だった。お客も男女様々といった感じだ。

「……では、メニューをどうぞ」

霧島が立派な装丁のメニューを渡してくる。これを見るだけで学園祭に本気だということが分かる。流石はAクラスってところかな。

「うちは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もそれが良いです」

「葉月もー!」

女子3人は仲良くシフォンケーキ。うーん、俺はさっき康太と色々作って食ったから、あまり腹が減ってないんだよな。

「俺は『ブラックコーヒー』でいいや」

ここは無難にコーヒーでも頼んでおこう。高校生になってから異常にコーヒーが美味くなっただんだよな。

「んじゃ、俺は——」

「……ご注文を繰り返します」

遮るような霧島の声。あ、雄二に不幸の予感。

「……『ふわふわシフォンケーキ』を三つ、『ブラックコーヒー』を一つ、『メイドとの婚姻届』が一つ。以上でよろしいですか?」

「全然よろしくねえぞっ!?!」

動揺した叫び声を上げる雄二。コイツが翻弄されるなんて珍しい。惚れた弱みってやつか。

「……では食器をご用意致します」

女子三人のところにはフォークが、俺のところにはミルクとスプーンが、雄二のところには実印と朱肉が用意された。

「しょ、翔子！　これ本当にうちの実印だぞ！　どうやって手に入れたんだ！？」

「……では、メイドとの新婚生活を想像しながらおまちください」

霧島は優雅にお辞儀をしてキッチンと思しき方向に歩いていった。

「……明久。俺はどうしても召喚大会に優勝しないといけないんだ……！」

「う、うん。それは俺もだけど」

雄二の目からは並々ならぬ決意が感じられる。

「んで、葉月ちゃん。キミの言っていた場所はここであってるのか？」

「うんつ。ここで嫌な感じのお兄さん二人がおっきな声でお話してたの！」

嫌な感じのお兄さんねえ……。雄二の言ってる常夏コンビで間違いないかな。

『おかえりなさいませ、ご主人様』

『おう。二人だ。中央付近の席は空いてるか？』

と、話してる途中で聞き覚えのあるゲスな声が聞こえてきた。

「あ、あの人達だよ。さっき大きな声で『中華喫茶は汚い』って言

つてたの」

声の主は俺達のクラスで妨害工作をしてきた常川先輩（？）と夏村先輩（？）だった。

ていうかさつきも聞いたってことはここに通ってるのか？ だとしたらAクラスにも迷惑がかかるな。

『それにしても、この喫茶店は綺麗でいいな！』

『そうだな。さつき言った2・Fの中華喫茶は酷かったからな！』

『テーブルは腐った箱だったし、虫も湧いていたもんな！』

落ちて着け俺……、あいつらをここで殴っても悪評が広まるだけだ……。

「おい、翔子おー！」

「……なに？」

雄二が霧島を呼ぶ、するとすぐに登場。ずっと雄二のそばにいたかのような早さだった。

「あの連中がここに来たのは初めてか？」

「……さつき出て行ってまた入ってきた。話の内容もちつとも変わらない。ずっと同じようなことを言っている」

霧島はそう言って少し顔を歪める。やっぱり愉快的客じゃないよ

な。

「そうか……よし。とりあえず、メイド服を貸してくれ」

真顔で問題発言をする雄二。こいつには躊躇いや恥じらいというものがないのか？

「……わかった」

そしてこちらでも問題行動を起こす。なんで脱ぎだすんだ。

「き、霧島さん！？ こんなところで脱ぎ始めちゃダメですっ！」

「そうよ！ ここにはケダモノが沢山いるのよ！？」

「わぁゝ。お姉さん、胸おつきいですゝ」

その霧島を姫路と島田が慌てて止めにかかる。

「……雄二が欲しいって言ったから」

止められた霧島は不思議そうな顔をしている。こいつ、雄二の頼みなら迷いなく実行するな。なんて危ういんだ。

「お、俺がいつお前の着ているメイド服が欲しいと言った！？ 予備のヤツがあれば貸してくれて意味だ！」

そっぽを向いて首まで真っ赤になっている雄二が怒鳴る。霧島は危ういけど、雄二がこんな感じなら大丈夫だろう。

「……今、持ってくる」

霧島が服を着直して去っていく。

『あの店、出している食い物もヤバいんじゃないか？』

『言えてるな。食中毒でも起こさなければ良いんだけどな！』

『2・Fには気を付けろってことだよな！』

それにしてもなんてわざとらしい会話だろう。言葉のボキャブラリーがないのか？

「姫路に島田、櫛を持っではないか？」

「？ 持っていますけど……」

「ちょっと貸してくれ。他にも身だしなみ用の物があれば全部」

「はあ……」

今度は姫路たちからなんか借りるのか？ 何をする気だ、雄二。

「悪いな。あとで必ず返す」

「……雄二これ」

と、今度は霧島がメイド服を抱えて戻ってきた。

「おう。すまないな」

「……貸し一つ」

「だ、そうだ。明久」

「わかった。御礼に今度雄二を一日自由にしていよいよ」

「……ありがとう。やっぱり吉井はいい人」

「ちょっと待て！ どうして俺が！」

雄二の必死の講義も虚しく、霧島は嬉しそうにその場を離れて行った。

「で、これをどうするんだ？」

「……着るんだ」

恨みがましく俺を見る雄二。どうせ試召戦争で負けたのだから言うことを聞かないといけないのに、女々しい奴だ。

……って、まさか……。

「誰が……？」

「お前が」

「まじかあぁっ！！」

やっぱり俺か！ 確かに女装すれば顔はバレないかもしれないけ

どさ！

はぁ……、仕方ない……。

「わかったよ。ちょっと待ってて」

「おう」

「はぁ……、この上ない屈辱だ……」

「大丈夫じゃ明久。似合っておるぞ」

「まったく嬉しくないんだが……」

俺が連絡をしてわざわざ来てもらった秀吉。こいつ何でこんなにメイクが上手いんだ。

まあ、俺がやってるのを手伝ってもらったただけだけどさ。

「では、ワシは喫茶店に戻るぞい。存分に悪党をのしてくるが良い」

「あいつらは悪党なんてレベルにいないが……、まあいいや了解」

秀吉と別れ、再びAクラスに入る俺。周りの視線が痛いな……。

『とにかく汚い教室だったよな』

『ま、教室のある旧校舎自体も汚いし、当然だよな』

まだこんな会話を続けていたのか。潰してやる。

「お客様（女声）」

しずしずと歩き、ウェイトレスであるかのように声をかける。ちなみに声はキーを上げている。

「なんだ？——へえ。こんなコもいたんだな」

「結構可愛いな」

舐めるような視線がまとわりつく。物凄く気持ち悪い！

「お客様、足元を掃除しますので、少々よろしいでしょうか？」

ゴミ掃除をな。

「掃除？ さつさと済ませてくれよ？」

二人が席から立ち上がる。そのうちに雄二と即座にアイコンタクト。準備OK！

「ありがとうございます。それでは——」

「ん？ なんで俺の腰に抱きつくんだ？ まさか俺に惚れて」

「おらあああっ！」

「うばあつ！」

バックドロップ成功。これで坊主先輩は本日二度目の脳天痛打だ。

「お前いきなり何すんだ！」

チツ！ 生きてやがった！ 仕方ない。応援を呼ぶことにしよう。

「こ、この人！ 今私の胸を触りました！」

「ちょっと待て！ バックドロップする為に当ててきたのはそっちだろ——ぐぶあつ！」

「こんな公衆の面前で痴漢行為とは、このゲス野郎が！」

痴漢退治という大義名分を得て雄二が登場。その拳にはかなりの力がこもっていた。

「何を見ていたんだ！？ 明らかに被害者はこっちだろ！」

「黙れ！ たった今、コイツはこのウェイトレスの胸をもみしだいていただろうが！ 俺の目は節穴ではないぞ！」

いや。正直節穴だと思う。

「ウェイトレス。そっちで倒れてる男は任せたぞ」

「え？ あ、うん？」

さて、この坊主どうしようか……。とりあえず秀吉に押しつけられたブラでも頭につけてみようかな。康太がくれた瞬間接着剤で。

「さて。痴漢行為の取調べの為、ちょっと来てもらおうか」

「くっ！ 行くぞ夏川！」

「こ、これ、外れねえじゃねえか！ 畜生！ 覚えてろ変態めっ！」

坊主先輩は頭にブラをつけたまま逃走。

「逃がすか！ まてやゴラあっ！」

完全にチンピラの形相で雄二が追う。……俺はとりあえず、着替えると思いますか……。

今週（？）のエンドカードのコーナー

> i 3 4 7 2 2 — 4 2 5 1 <

女装した明久です。髪形はこんな感じですが、服は学ランなのが変なギャップを生みだしてしまった……。

次回もお楽しみにね

終

制作・著作

――

HK
(噓)

N

【Paradox '24】 泰然自若（後書き）

感想・指摘等、待っています。

【Paradox '25】 名声赫赫（前書き）

新しく、「日常」の小説も書き始めたのでそっちもよろしく願います。

【Paradox 25】 名聲赫赫

- side 明久 -

「で、3回戦は不戦勝じゃったと？」

「ああ。なんでも、食中毒で危険らしい」

メイド服を着替えて（髪は時間が無かったので直さず）、戻ってきた雄二と合流して慌てて向かった3回戦。到着すると、待っていたのは相手が棄権という拍子抜けの結果だった。うちの店でバイオ兵器を引いた客じゃないと信じたい。

「ならば、済まぬがこっちの立て直しに協力してくれんか？」

秀吉が申し訳なさそうに表情を曇らせる。別にお前が悪いわけじゃないのに。

「そうだな。1度失った客を取り戻す為にも、何かインパクトのあることをやる必要があるそうだな」

そう言うのは我がクラスの代表様の雄二。インパクトが……。

「ふむ。それで何をするか、じゃが……」

「そうだね……。代表様、なにか案ある？」

「任せておけ。中華とコレでは安直過ぎる発想だが、効果は絶大のはずだ」

そう言って取りだしたのは、刺繍も見事なチャイナドレス。

「ほう。若干裾が短いような気もするが、これなら確かにインパクトがあるじゃろうな。コレを宣伝用に――」

確かにコレを女子が着れば男はホイホイ釣れるだろうな。王道だが悪くない。秀吉は……、あれ？ 結構見てみたいかも……。

「ああ。コレを――明久が着る」

それは変な趣味を持つ奴しか釣れない。

「もう勘弁して……ッ！ そんな事ばかりしてたら、きっと俺はホンモノだと皆に認識されちゃう！」

「いや、その髪型の奴に言われたくないが……。だが冗談だ明久。これは秀吉と姫路と島田に着てもらっ」

「この髪は今日は整髪剤を持ってきてなくて直せないからこのままなだけだ。でも良かった」

まったく、雄二の冗談は心臓に悪いよ。

「ワシが着るのは冗談ではないのかのう……？」

秀吉がチャイナドレスを持って溜息を吐く。きつと似合うと思うけどやっぱり嫌だよな……。

「んで、明久にはコレを着てもらっ」

そう言って雄二が俺に押してつけてきたのは――タキシード？

「コレを着て仕事をすればいいのか？」

「ああ。なんかムツツリーニが『……………これは明久用（ゲイグイ！）』って感じでめっちゃプッシュしてきたから」

ふーん。康太のやつ、気が利いてるな。

「んじゃ、着替えるか秀吉」

「むう……。何か納得がいかがわかったのじゃ」

――数分後――

「着替え終わったぞい」

「こっちも終わったぜ。へえ……、やっぱり似合ってるね秀吉」

「ありがとっじゃ。そっちも似合ってるぞい」

「サンキュ」

秀吉は女物のチャイナドレスを見事に着こなしてる。じゃあ仕事をしますか。

「おう。二人とも着替え終わったようだな。丁度こっちは女子が帰

ってきたぞ」

ああ、Aクラスで飯を食ってた3人か。俺と雄二は途中で抜け出したから、結局何にも食わなかったな……。

「たっだいまゝ！ あれ？ アキ、今度はタキシードなの？」

「ああ。ホント今日はいろんな意味で大変だよ」

「似合ってますよ明久君。その……とつてもかつこ……可愛いですっ！」

「葉月はお兄ちゃんのメイド服姿がもう一回見たいな」

はあ……、人の気も知らずに好き勝手言ってくれるなあ。

「ははっ。残念ながら、ただでコスプレを見せるほど俺は甘くないよ？」

さわやかに笑いかける。ただし、目には怪しい光がこもっているだろう。こちらは現在進行形でコスプレを見せているのだから、そちらも見せるべきだ。

「そういうことだ。姫路に島田、クラスの売り上げのために協力してもらっぞ」

エモノを逃がさないように、チャイナを片手に退路を断つ。その雄二の目には、俺と同じように怪しい光がこもっていた。

「な、なんだか二人とも、目が怖いですよ……？」

「凄く邪悪な気配を感じるんだけど……」

「やれ、明久！」

「オーケー！ おとなしくこのチャイナ服に着替え——危なああっ！」

振り下ろされた拳を後方に空中で回転（すなわちバク宙）して回避。

「すごいな、お前……」

「どうしてまた、急にそんな言い出すのよ？ 前に須川はチャイナドレスを着たりすることはない、って言ってたと思うけど」

「店の宣伝の為に、明久の趣味だ。明久はチャイナドレスは好きだよな？」

急に話題を振られる。うーん、変なこと言ってやる気を無くされても困るしな。

「大好——愛してる」

あ、台詞の選択を間違えた気がする。

「し、仕方ないわね。店の売り上げの為に、仕方なく着てあげるわ」

「そ、そうですね！ お店の為ですしね！」

二人がそれぞれ服を手にする。やる気になってくれたようだなによりだ。

「お兄ちゃん、葉月の分は？」

「え？ 葉月ちゃんも手伝ってくれるのか？」

「お手伝い……？ あ、うん！ 手伝うから、あの服葉月にもちようだい！」

随分と積極的だな。そんなにチャイナドレスが着たいのかな？

「でも、ごめんね。気持ちは嬉しいんだが、葉月ちゃんの分は数が――」

「……………！！（チクチクチクチク）」

「こ、康太！ どうしてそんな凄い勢いで裁縫を！？ っていうかいつの間に！？」

「……………俺の嗅覚を舐めるな」

凄く格好良い台詞のはずなのに、凄く格好悪いな。

「それじゃ、三回戦が終わったら着替えますね」

そういえば、そろそろ姫路たちも試合だったな。

「いや、今着替えてもらいたい」

「「え？」」

「宣伝の為だ。そのまま召喚大会に出てくれ」

そうか……、たしか召喚大会は三回戦から一般公開があったんだっただ。折角人の集まる機会だから、宣伝しておいて損はないだろう。

「こ、これを着て出場しろって言うの……？」

「流石に恥ずかしいです……」

……確かに、お前らに任せるのはあまりにも自分勝手。言うならばこれは俺の我儘だ。

だけど……、

「二人とも、お願いだ」

俺はいつも人の為に動こうとしなかった。だが今回は誰かを助ける。誰かのために動ける俺自身にとってのチャンスなんだ。喜んで頭を下げよう。

「明久……。お前は本当に——チャイナが好きなんだな……」

敢えてそれも否定しないが。

「もしかして吉井君、私の事情を知って——」

「仕方ないわね。クラスの設備の為だし、協力してあげるわ。ね、

瑞希？」

「あ。は、はいっ！ これくらいお安いご用です！」

二人とも承諾してくれた。

「それならスグに着替えて会場に向かってくれ。大会では自分たちの所属がFクラスであることを強調するんだぞ」

これで喫茶店の宣伝とFクラスのレベルのPRという目的が果たせる。

「オッケー。任せておいて。行くわよ瑞希」

「はいっ」

チャイナドレスを抱えて教室を出て行く二人。あっちは任せておいて大丈夫だろう。

「……………できた」

「わ、このお兄さん凄いです！」

物凄い速度で葉月ちゃん用のチャイナドレスを仕上げる康太。才能の無駄遣いってまさにこのことだな。

「……………それにしても明久。良く似合っている」

「お、そうか？ サンキュ」

じゃ、俺は仕事に戻りますか。

『ムツツリーニ、後で明久の写真を譲ってくれ（ヒソヒソ）』

『わしも欲しいぞい（ヒソヒソ）』

『…………一枚1000円。1円たりともまけない（ヒソヒソ）』

『『高あつー！』』

周りの騒ぎの音で、こいつらの内緒話は聞こえなかった。

【Paradox '25】 名声赫赫（後書き）

明久の聴覚は普通の人の2倍以上ありますが、この時はチャイナで周りが盛り上がっていたのでヒソヒソ声が聞こえませんでした。

【Paradox 26】 相暮井目

- side 明久 -

黒幕側が動くとしたらこのへんだろっな……。動きが出る前になんとか潰さないと。

「たっだいまー」

「ただいま戻りました」

「丁度良かった。悪いが二人とも悪いがホールに回ってくれ」

雄二が帰ってきた2人に働いてもらうように催促する。召喚大会の2人は無事みたいだな。まあ狙うなら俺と雄二だしな。

『君。注文してもいいかな？』

『はい。どうぞ』

「……！ あれは、教頭の竹原か……！」

俺から結構離れた位置にいる竹原が近くにいたFクラスの男子に声をかける。ちなみに俺は厨房の方にいる。

『このクラスに吉井明久という生徒がいて聞いたのだが、どの子かな？』

『ああ、おーい吉井ー！ ……今は居ないみたいです』

男子生徒は声を上げるが声が返ってこないの俺がいらないと思っ
たようだ。

「……………明久」

「ん？　なんだ康太」

「……………茶葉がなくなったから持ってきてほしい」

「ああ、いいよ」

ちょうど今は教室から離れたかったし丁度いい。

教室を後ろの扉から出て廊下を早足で歩いて目的地の空き教室に
向かう。教室の中の様子をチラチラ窺っていたチンピラを連れて、
な。

「おい」

空き教室で後ろから声がかかる。声の主は俺と同年代くらいの男
3人。竹原に雇われたチンピラって所か。

「ああ、ここは部外者立ち入り禁止なのでアンタらみたいなドロッ
プアウト三人組は出て行ってもらえます？　てか、出て行け」

とりあえず適等に挑発する。冷静さを失ってもらった方がこちら
としては殺りやすいしな。

「ッ！　上等だコラアッ！！」

チンピラの1人が殴りかかってきた。ホント動きが単調だな。漫画の『先に動いた方が負ける』ってまさにこのことだな。

「あら……よつと！」

屈んで拳をかわして、相手の肩に腕を振り下ろす。もちろん手加減したよ？

ゴキンッ！ と音がなつて、男が肩を押さえて屈みこむ。今の音だと……、亜脱臼かな？

「てめえ！ 何すんだ！」

仲間の1人が声を上げる。その時、ガラッと音をたてて扉が開いた。

「おい明久。ムツツリーニが茶葉の他に餡子も急いで持ってきてくれと」

「ナイス雄二！ 丁度よかった」

タイミング良く雄二が登場。流石に全員の肩を破壊するのは気が引けるしね。

「ん？ なんだこいつらは？」

「敵の下っ端どもだ。一人は殺つといたから」

手を振って空き教室を出る。

『おい明久。これは——ああ、そうか。そういうことか』

『おい、あいつ行っちゃったぞ!?!』

『コイツの後でもいいだろ』

そんな声を背に扉を閉めて1分待つ。すると——

「お、覚えてろっ!」

「てめえらの面、忘れねえからな!」

「夜道には気をつけろよ!」

見事な負け犬です、本当にありがとうございました。

「おい、明久。あいつらはなんだ?」

もう隠せないか……。まあ学園長のババアとの約束なんてあつて無いようなもんだから、いいか。

「あいつらは黒幕……、教頭の竹原が雇ったチンピラだろう。本格的に潰しにきたんだと思う」

「お前、全部気づいてたのか?」

「ああ、全部話すよ。ここじゃ誰かに聞かれるかもしれないから教室で」

「おう」

茶葉と餡子を抱えて教室に戻る。

——雄二に事情説明して、それから二時間後——

「明久。そろそろ4回戦だ」

「ああ、準備をするか」

時計を見て時間を確認する。午後二時過ぎ。随分と時間が過ぎたみたいだ。

「あれ？ アキたちもそろそろなの？」

「そうなんですか？ 実は私たちもそろそろ出番なんですよ」

「そつえば次はお前らだったな」

「そつかフェアな試合をしようぜエ？」

「だな。よろしく頼むぞ二人とも」

「あ、はい。よろしくお願いしますっ」

俺と雄二で口元を歪めながら言う。楽しくて愉しい試合にしようぜ？

『それでは、四回戦を始めたいと思います。出場者は前にどうぞ』

先生に呼ばれ、俺達はステージに上がる。

外部からの来場客用の席。それらはほぼ満員といった状態であった。

「これは宣伝効果に期待できるね」

「そうだな。しかも出場メンバーも全員Fクラスだしな。文句のつけようもない宣伝の機会だ」

あたりを見渡して雄二と頷き合う。これで目的の達成に近づいたな。

「じゃあ、三人とも頼むぞ」

雄二はそう僕らに声をかける。そういえば雄二以外は全員コスプレをしてたんだ。

『四人とも、よろしいですか？』

「おう、それじゃ——」

雄二が言つて、俺達が召喚獣を呼び出す。

「『『『試獣^{サモン}召喚！』』』」

四人の足元に魔方阵が現れ、それぞれの召喚獣が現れる。

これだけで観客席の方から小さな歓声があがる。この試合から見始めた人からしてみれば、これだけでも珍しいんだろうな。

『では、四回戦を――』

「ちょっと待ってください」

「……はい？　なにかありますか？」

氣勢を削がれる形になり、先生は若干不満そうな顔をする。

「すいませんが、少しマイクを貸してください」

そう告げると、返事など待たずにマイクを奪う雄二。

『清涼祭にご来場の皆さんこんにちは』

といって、雄二は指でこっちに来いというジェスチャーをする。
そうか、雄二は宣伝をする気なのか。

（姫路、島田。こっちに並んでくれ。雄二は宣伝をするみたいだからよオ）

（え？　あ、はい）

『ここにいる僕ら四人は、本格飲茶を提供するＴ・Ｆの中華喫茶で働いています。このように可愛い女子や男子も一生懸命頑張っ

ていますので、よろしければどうぞお立ち寄り下さい」

「……よろしく願います！」「」

皆でお辞儀をする。ついでに召喚獣もペコリ……のはずが、俺の召喚獣はそっぽを向いていた。ツンデレなのか？

「先生、マイクお返しします」

軽く頭を下げて先生にマイクを手渡す雄二。

『——ということだそうです。ご見学の皆様、お時間に余裕がありましたら、出場選手たちのいる――Fに立ち寄ってみてください』

先生も余興として乗ってくれたみたいだ。感謝感謝。

『さて、それではCMも終わりましたし、いよいよ召喚大会の始まりです。Fクラスの四人とも、いい試合をお願いします』

そう告げて、向井先生は俺達から少し距離を取る。

「アキに坂本。ここまでよく勝ち上がってきたわね。でも、ウチらに勝てるとは流石に思っていないでしょう？」

「その言葉、そっくりそのまま返すぜ。それでも、元学年主席とクラス代表のコンビなんだぜエ？」

「その通りだ明久。それにお前らは確かに優勝候補だが、それ故に勝ちあがってくることは簡単に予想できた。それなら、対策はいくらでも打てるというものだ！」

雄二は大型ディスプレイを指差し、自信満々に答えた。俺達は数学の対戦ならば強制的に一对一を二つ作られてしまう。だが、決して島田は俺や姫路のように万能ではない！

『Fクラス 姫路瑞希 & Fクラス 島田美波

古典 399点 & 6点 』

『Fクラス 坂本雄二 & Fクラス 吉井明久

古典 226点 & 487点 』

「こ、古典！？ 四回戦は数学じゃなかったの！？」

狼狽する島田。帰国子女の彼女には古典は鬼門のはずだ！（俺も一時期苦労したし）

「お前らに渡した対戦表だが――」

雄二が完全に悪党の笑みを顔に張り付ける。

「アレは俺の手作りだ」

「だ、騙したわねっ！？」

「くはははは！ これで勝負はほとんど二対一！ 俺達の勝ちは貰ったようなもんだな、明久！」

「その通りだな雄二！ さあ！ フェア（笑）に勝負しようぜエ！」

「くっ！ なんて卑怯な連中なの！」

悔しげに呻く島田。そんな隙があるのか、なッ！

「おらァ！」

とりあえず武器（槍）を投げて、姫路と島田の距離を遠ざける。
連携されたら面倒だからな！

「俺が姫路をやるから、代表様は島田を倒せ！」

「了解ッ！」

まあそんなこんなで4回戦が始まった。

【Paradox '26】 相暮井目（後書き）

中途半端なところで終わってしまいました。

明日は続きをアップします。

【Paradox '27】 才芸器量（前書き）

pVが10万アクセスを超えました！

これからも頑張りますので応援よろしくお願いします！

【Paradox 27】 才艺器量

- side 明久 -

「いくぜ！ 姫路！」

そう言って俺の召喚獣は、挨拶と言わんばかりに剣を振り下ろす。

「よめますよそのくらいは！」

だが、姫路の召喚獣に剣で受け止められる。だろうな、だから！

「本当の狙いはこっちだ！」

姫路の召喚獣の腕を強引に掴み、後ろに回り込んで剣を刺す！

ドスッという音が2回聞こえた。

『Fクラス 姫路瑞希 VS Fクラス 吉井明久

古典 324点 VS 343点

』

「既に剣を構えてたのか……。やるねエ」

そう、腕を掴まれていた時に姫路は剣をなぎ払っていた。いくら高性能と言っても所詮学ランの防御力なんてたかが知れてる。

俺の召喚獣は首を攻撃されて、かなりの点数が減っていた。

「次はこっちから……、行きます！」

「うわつと！」

流石に点数で勝っていてもこれほどの点数の攻撃を受けたら一溜まりもないからである。

……そろそろ作戦をやるかな。即座に雄二とアイコンタクト。

「ねえ姫路、先に動いた方が負けるっていう言葉知ってる？」

「そんなに後がいいなら譲りますけど……？」

「いやいや、ここは公平にせーので動こうぜ？」

「……？ わかりました」

「ンじゃいくぜ？ せー……」

「「「のっ！」「」」

俺と雄二と姫路が動き出す。俺が姫路に向かって剣を投げ、姫路が俺に剣を投げる。もちろん二人ともそれをかわすが、剣に意識を向けていて迫った拳に姫路は気付けなかった。

「え？ きゃあっ！」

雄二の召喚獣の拳は姫路の召喚獣にクリーンヒット。そして姫路

が避けた俺の剣は、

「しまっ……！」

姫路の一直線状にいた島田の召喚獣に命中。これで俺達の勝ちだ。

『Fクラス 姫路瑞希 & Fクラス 島田美波

古典 0点 & 0点 』

『Fクラス 坂本雄二 & Fクラス 吉井明久

古典 153点 & 321点 』

作戦はこうだ。雄二が島田を俺と姫路の一直線状に誘導して、俺が投げた剣を姫路に避けさせ倒す。姫路は剣に意識を送らせて拳に気付かせないようにするためだ。

『えっと、坂本君と吉井君のペアの勝利です！』

「ひきょうもの」

「二人とも酷いです……」

「まあ、あれも勝負だから」

島田の非難するような視線と姫路の悲しそうな視線から逃れるためにそっぽを向きながら話す。

「二人ともそう言うな。お前らの代わりにしっかりと俺達が優勝してやるから」

（つてことで、お前たちは喫茶店に専念してくれるか？ 召喚大会は俺と雄二でなんとかするから）

一応秘密らしいので小声で島田に話しかける。

（そりゃ、アキたちが優勝した方が瑞希のお父さんの印象はいいだろうけど……）

姫路本人が優勝するよりは俺達が優勝した方が印象に残るだろうし。

「あの、絶対に優勝してくださいね……？」

「ああ、やってやるさ。全部上手く運んでやる！」

「やれやれ。それなら明日はゲームなんてやってないで本気で来いよっ。」

「……………へいへい」

「おい、今の間はなんだ……？」

新作をやるうと思っていたなんて当然秘密だ。

「それにしても結構盛況だね」

とりあえず強引に話を逸らす。

「そうだな。さっきの宣伝の効果があつたみたいだな」

「そうでなきゃ、こんな恥ずかしい格好で大会に出た意味がないものね」

この試合の立ち回りは無駄じゃなかったみたいだ。

『お、あの子たちだ！』

『近く見ると一層可愛いな！』

『教室内にいる子も可愛いし、レベルが高いな！』

お客さんの中からそんな声があがる。やっぱりチャイナドレスの効果は高いみたいだ。

「んじゃ、俺達も仕事をしますか」

「そうですね。喫茶店のお手伝いをしないといけませんよね」

「そうね。ちょっと視線が気になるけど、売り上げの為に頑張りますか！」

「じゃあ、俺もウェイトレスの手伝いでもしようかな」

随分と数が少ないのだから出来ることをやろう。

【Paradox'28】 気宇壮大（前書き）

すみません！ 最近パソコンが不調なのかちよくちよくデータが消えます。

再upなのでもう見た人は読まなくて大丈夫です。

あと、【Paradox'0】 自己紹介 の挿絵を変更したので見てくれると嬉しいです。

【Paradox '28】 気宇壮大

- side 明久 -

「それじゃ、準決勝に行ってくるよ」

「はい。頑張ってくださいね」

「アキ、負けたら承知しないからね！」

「わーてるって」

喫茶店で働くこと一時間。いよいよ準決勝の時間になった。決勝は二日目の午後という予定なので、今日の試合はこれでラストだ。

「明久。この試合はとくに負けられない。お前も禪を締め直せよ」

雄二の目が今までと比べモノにならないくらいマジだ。それもそのはず。次の試合の相手は、

「霧島さんと木下君のお姉さんが相手なんて、大変そうですね……」

「大丈夫さ。俺も保健体育だけは試験を受け直したし、何より雄二がまともにやり合っはうがないしな」

「まあな。あんな奴ら相手に正面からやるほどバカじゃない。上手くやってやるさ」

「二人がそう言うなら大丈夫そうね。きっちり勝ってきなさいよ！」

「お兄ちゃんファイトですっ」

「あいよっ」

クラスの連中の応援を背に、俺達は会場に向かった。

「で、雄二。作戦ってのはどんなのなんだ？」

「今回は秀吉にまかせている。ムツツリー二のバックアップもあるし心配ない」

「秀吉……？ ああ、なるほど」

また変装作戦か？ そんなの霧島なら余裕で見破るだろ。

「とりあえず今は目の前の戦いに集中しろ。これに負ければ、学校は潰れるし、お前はチャンスを失うし、俺は今後の人生を失う。命がかかってると思え！」

「おう！ 任せろ代表様！」

会場を前に、二人で気合を入れる。

「おっしゃ！ 行くぞ！」

「おうっ！」

拳をぶつけ合って、俺達はステージに足を踏み入れる。

『お待たせしました！　これより準決勝を開始したいと思います！』

俺達が到着すると、審判を務める先生のアナウンスが流れる。どうやら時間ギリギリだったみたいだ。

『出場選手の入場です！』

俺達が立つと、向かいに対戦相手の霧島と木下姉（？）がやってきた。

「……雄二、吉井。邪魔しないで」

「そうはいくか。俺はまだやりたいことが沢山あるんだ！」

「……雄二、そんなに私と行くのが嫌？」

「ああ。嫌だ」

それにしても、性格だけならお似合いだと思っけどな？

「……やっぱり、一緒に暮らしてわかり合う必要がある」

訂正。やっぱりお似合いではないと思う。

「ハッ！　残念だったな！　そんな寝言は俺達に勝ってから言つてだ！」

「……わかった。そうする」

二人の言い争いも終わり、いよいよ準決勝が始まる。

「で？ 雄二、その作戦とやらは？」

「任せておけ。抜かりはない。——頼むぞ秀吉っ！」

「……ふふっ」

やっぱり気付いてたのか？

「秀吉？ 秀吉って、あの「ミミ」のこと？」

木下姉がステージの脇の一角を指す。そこにあったのは、

「やっぱり上手いかなかったみたいだぜ雄二？」

「バ、バカな！」

ボロボロにされた拳句に手足を縛られた秀吉の姿だった。

「……雄二の考えていることくらい、私にはお見通し」

「ま、匿名の情報提供もあったんだけどね」

情報提供……、間違いなく教頭側の人間か。ってことは雄二も誰かに付けられていたばいな（明久を付けていた奴は病院送りになりました）。

「く……すまぬ、雄二。ドジを踏んだ……」

「……………！！（パシャパシャパシャパシャ！）」

「康太……。いつの間に……」

秀吉が申し訳なさそうに唇を噛んでいる時に康太が現れ、撮影を開始した。

「早く秀吉の縄を解いてやれよ」

「……………了解」

俺がそう言っていると康太は小さく頷き、素早く秀吉に駆け寄って縄を解いていた。

「おとなしくギブアップしてくれると嬉しいな。弱い者いじめは好きじゃないし」

「くうっ……………！」

木下姉の降伏勧告に雄二が顔を歪める。なに諦めてんだか……。

「雄二、なに諦めてんだ。まあ俺は一人でも絶対勝つから、下がってもいいんだよ？」

そう言っていると雄二は吹っ切れたような顔になり、俺の頭をワシャワシャと撫でた。

「誰が諦めるか。俺達は二人で勝つ！　そうだろ相棒？」

試召戦争最後の約束を覚えてくれてたみたいだな。

「じゃ、勝とうぜ？」

「ああ！」

もう一度俺と雄二がコツンと拳をぶつけ合う。

『では、召喚してください！』

「ふふん、いくら頑張ってもあなたたちじゃ勝てないよ」

「……雄二。諦めが悪い」

「あいにく、それだけがとりえ何でね！」

「いくぜ！」

「……試獣^{サモン}召喚！」

いつも通りの掛け声で呼び出される召喚獣。霧島の召喚獣は学年主席とだけあって武者鎧に日本刀という豪華な装備。木下姉は西洋鎧にランスだ。流石はAクラス、豪華なラインナップだ。まあ武器だけで勝負が決まるくらい甘くはないけどな。

『Aクラス 霧島翔子 & Aクラス 木下優子

保健体育 462点 & 321点 』

『Fクラス 坂本雄二 & Fクラス 吉井明久

保健体育 198点 & 768点

□

「なっ……！ 何なのよその点数は！」

「いかにも、俺の点数だが？」

慌てる木下に適当に答える。まあ前は400点台だったしな。

「明久……？ お前今日はゲームをしてきてたんじゃ……」

「あれはただの口実。本当は保険体育を一夜漬けしてた。二年ぶりぐらいに真面目にやったから頭がおかしくなるかと思ったよ。ほら、隈があるだろオ？」

「いや……。お前いつも隈あるじゃねえか……」

「ああ、それはゲームやってて」

「おい！」

俺達がそんな雑談をしてると霧島と木下姉が驚いたような顔をして俺を見てきた。

「……ちよつと待って。二年ぶり？」

「ああ、勉強なしてしなくても教科書を丸暗記すればテストなんて楽勝だろ？」

その一言で先生や観客たちも驚いたような表情になる。

「じゃああなたは去年、勉強をせずに学年主席の座にいたってこと！？」

「うん。その通りだ」

「ふざけないでよ！ なんなのよアンタ！」

「吉井明久、ただの天才だよ。お前らとは見てる世界が違ってた」

俺が答える前に雄二が答える。べつに俺は天才ではないよ、出来る事が出来るだけ。

「んじゃ無駄話はここまでだ。じゃあな出直してこい」

その時、俺の召喚獣が高速で移動し二人を切り裂いた。

『Aクラス 霧島翔子 & Aクラス 木下優子 VS Fクラス 吉井明久』

保健体育 0点 & 0点 VS 742点

』

何だ、やっぱりこんなもんか。

『さ、坂本・吉井ペアの勝利です！』

予想外の展開だったのか先生の声が裏返る。その言葉と同時に客席から凄い歓声が上がった。

【P a s t ' 0】 T h e l o s t d a y (前書き)

ちょっとした過去編のフラグです。

最後の方は右目を失う理由みたいなものです。

少し編集しました。

【P a r a d o x ' 2 9】は明日upします。

【Past 0】 The lost day

『天才』

その言葉を皆はどんな意味を持つと思う？ 頭がいい人？ スポ
ーツのプロ？

答えは努力が出来る人のことだよ。

頭がいい人は『努力』によって頭が良くなるんだ。運動が上手い
人も『努力』によって上手くなる。

じゃあ出来ない人は？

「何で努力が出来ないの？」

と、聞かれたら彼らは恐らくこう答える。

「努力をしないんじゃない。出来ないんだよ」

しないんじゃないで、出来ない。

出来る人と出来ない人の違い。それは『努力の才能』

才能がある人は努力が出来る。才能がない人は努力が出来ない。

さて、出来ない人と出来る人の説明を（ほんの少し）したがこの
二つに分類されない人もいる。

『神童』

神の童と書いて『神童』

だがこれは何でも出来る人達ではない。『神童』というのは自分のステータスが秀でてる人達のことだ。

そして、この物語の主人公とその友人はこれに分類される。だが、主人公は圧倒的過ぎた。

たとえば、過去に神童とまで呼ばれた『坂本雄二』はある出来事のせいで挫折し、成長した。

たとえば、いつも姉と比べられてばかりいた『木下秀吉』は好きなことを見つけて、ホープと呼ばれるまで成長した。

たとえば、ムツツリー二こと『土屋康太』はカメラが好きだった。人の笑顔を写真に撮るのが好きだった。そしてプロ顔負けのレベルまで成長した。

だが、主人公『吉井明久』は、歪んだ。ずっと誰かに出来ることなら何でも出来ていた。

勉強もスポーツも適当にやっていたのに出来てしまう。

誰かが苦勞してリフティングを100回出来るようになったとして。でも彼はその間に1000回をオーバしていたりする。

誰かが苦勞して数学の公式を覚えたとして。彼はそんなもの教科書をみれば丸暗記出来た。

そんなものである。誰かが『努力』して何かをクリアしたとする。彼はそれをあざ笑うかのようにポンポンとクリアしてしまう。

そして周りの人間は彼のことを『神童』と呼ぶ。だがそんなことを言う人間はいなくなつた。彼は『神童』なんて場所にいなかった。まさに『全知全能』で、圧倒的だつた。

だから彼は周りの人間の努力を雑草を刈るように無駄にする。

そして彼自身もそんな世界に呆れていた。

「恵まれた生まれ、恵まれた容姿、恵まれた才能、恵まれた環境……。そんなものはもう嫌だ！ うんざりだ！」

彼は今でこそ丸くなつてはいるが、前の彼はどんな人間とも……、家族とも距離を置いていた。どれだけ勉強して頭が良くなつても、どれだけ努力して運動しても才能だと周りの人間には認めてもらえない。

だから彼はもうどうでも良かつた。自分を傷つける為に死に急ぐように勉強し、自分の体力をすり減らす為に鍛錬した。

でも彼の周りは変わらなかった。大富豪の実家、恵まれた家族、完璧の自分。

ある豪雨の土曜日。コレを壊すためにはどうしたらいいのだろうと彼は考えた。そして彼は自分を壊すことにした。

どこを壊す？ 死ぬのは怖いな、痛いのは嫌だな、なんて事を言っていたが彼の中にはどす黒い感情しかなかった。

箇所麻酔を自分に打って、自分の目にカッターを刺した。痛みは麻酔でなかったが、壊した目……、右目からは血がドバドバ出てきた。だが彼は恐ろしいほどに冷静だった。

もう一方の目にカッターを刺そうとしたときに母親に見つかって病院に連れて行かれた。目は修復は不可能とのことで義眼を付けることになった。

家族は彼のことを怒らなかった。むしろ彼に頭を下げて泣いて謝っていた。彼の絶望に気づいてあげることが出来れば、自分が助けてあげれば……。そういう自責の念でいっぱいだった。

彼は安心していった。右目はなくなっただけでもっと大切なものが帰って来たのだから。

気がつけば空は晴れていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7339x/>

バカとテストと召喚獣 《パラドックス》

2011年12月5日21時54分発行